

---

# 魔法先生ネギま！～俺の平和は何処へ？

カルカトス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！俺の平和は何処へ？

### 【Nコード】

N0055T

### 【作者名】

カルカトス

### 【あらすじ】

【無限の剣製】の発想の勝利！！！！

【無限の剣製】の中身、何で皆さん増やさないの？

と言った疑問と、無いなら造ろう、と言った決断からでた物語

基本的に主人公は平和を求めます、まあ無理なんだけど

これは転生オリ主がのんびり生きる為に、がむしゃらに突き進んで行くとか何故だかフラグが立ったりしちゃう物語である

キーワードを知っていると、テンションが上がる可能性があります

ネギ君をイジメるな！

彼はまだ9歳だぞwww

知っている刀剣が出ると良いですね、もしくはコメントで出るかも

……出ない確率の高いけど

では、ネギま！俺の平和は何処へ？

始まります、ゆっくりして行ってね？

## プロローグ（前書き）

えっと、作者です

何かネギま二次製作を見てて、【無限の剣製】とネギま！って無いなあ、オマケに【その発想はあった】と言った感じの【無限の剣製】の中身を増やす、が無いし

もしかして【その発想は無かった】に分類される？

更には殆どがネギ君アンチに全俺が泣いた

「いやいや、ネギ君イジメすぎだろ、まだ9歳だぜ？ヒロイン総取りは良いけどさあ  
イジメかっこ悪い

オマケにネギま！独特のほのぼの何処行っちゃよwwwほのぼの迷子www」

と言った理由から書き始めた物語である

作者の心はニトロを積んでおります、無闇やたらに辛口コメントをすると大変危険です

エサ、もといコメントをあげる時は、甘めなコメントをあげてください

ゆっくりして行ってね（笑）

## プロローグ

「 諸君、私はネギまが好きだ

諸君、私はネギまが大好きだ

英雄が好きだ 悪役が好きだ

アリカが好きだ アスナが好きだ

オリ主が好きだ エヴァが好きだ

テオドラが好きだ ラブコメが好きだ

魔帆良が好きだ 魔法界が好きだ

エヴァが好きだ 31人が好きだ

現代で 電脳で

宇宙で 魔界で

戦場で 学園で

マンガで ゲームで

この世界に存在するありとあらゆるネギまが大好きだ

異世界に転生した主人公が、訳も分からず世界を救うのが好きだ

いきなり森の中で主人公が、エヴァを助ける為村人を撃退する様な  
ど心が踊る

チート能力を持つ主人公が、自分の正義を掲げるのが好きだ

超鈴音が、実は良い奴で世界の為だった時など胸がすくような気持ちだった

足並み揃えたヒロインが、主人公に一斉に愛を告げに来るのが好きだ  
ハーレムエンドで、誰も彼もが幸せを手にいれる様など感動すら覚える

万を超える魔物達を、力で跪かせる様ななどはもうたまらない

泣き叫ぶ敵キャラ達が、主人公の降り下ろした剣と共にばたばたと薙ぎ倒されるのも最高だ

ラスボスが圧倒的力で襲い掛かるのを、主人公がラスボスを超える力で、その舞台ごと木っ端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

可愛い女の子に無茶苦茶にされるのが好きだ  
必死に守る筈だった味方が、実は敵のスパイだった時は、とてもとても悲しい物だ

魔法の物量に押し潰されて魔物が殲滅されるのが好きだ

【完全なる世界】に追いかけて回され、害虫の様に地べたを這いずり回るのは屈辱の極みだろう

諸君、私は幻想を、幻の様なネギまを望んでいる

諸君、私と想いを共にする戦友諸君

君達は一切何を望んでいる？

更なるネギま！を望むか？

王道下真中の様なネギま！を望むか？

鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の鴉を殺す嵐の様なネギま！を望むか？

「ネギま！ネギま！ネギま！」

よろしい ならばネギま！だ

人々の夢と希望が詰まった、今まさに溢れ出んとするネギま！だ

だが、無数の二次制作を見てきた俺達にただのネギま！ではもはや足りない！



唯一無二の転生ネギまを!!!!

誰もが渴望するネギま!を!!!!」

で?

一体これはどういう状況なんだ?

えー、右手に見えますのは、真っ白い何処までも見渡せる地平線でございます。

そして、左手に見えますのは、真っ白い何処までも続く空間でございます。

そして、正面……俺の前に見えますのが、ソファーに乗ったテレビ、しかも割と古めのテレビ、何てったってアンテナが付いてやがる

まあ、更にその中の白髪（若白髪か?）ツンツン頭の男、血の様に真っ赤なマフラーを着用、更には王様のマントをコートに改造した様な物を着てる

しかも、その王様コート、なんと色違いである、いや別に色違いだからどうしたって言われたら「いや、色違いなだけだ、でも色違いって胸踊るだろ？」

ポケモンだって動物だって色違いだと胸踊るだろ？」ぐらいしか言えないけど

戯言だな（閑話休題的な意味で）

まあとにかく、その色違いの王様コートの色だが、本来赤であるべき場所が黒、そして、白いふわふわに関しては、真ッ赤

なんだコイツ？

滅茶苦茶厨二病真っ盛りみたいな格好しやがって、おまけにドコゾの主人公みたいにカッコイイから腹が立つ

「で、結局ここはドコざえもんだごるあ」

「ここは精神と時の部屋ざえもんだごるあ」

「え？」

「え？」

「なにそr」

「なにそれ怖いwww」

コノヤロウ、普通に被せて来やがった、いやソレよりもだ、何でこのテレビの中の男が返事を返せるんだよ

○ASAか？

NOSAの技術なのか？

NAOAだったら仕方ないか？

NASOやっぱ流石だな、世界だな？

「ってんな訳ねえだろおおおい」

「ハリが無い突っ込みだな？

良いか？だるデレってのはだな、おんにゃの娘だけがやって良い物何だ

分かったか？」

「俺がいつお前にデレたよ」

「昨日」

「会った記憶が皆無だわぼけえ」

「き…記憶喪失か朝田!？」

「いや、別に俺は医龍じゃないからね？」

ロスとかバチスタとかやった事無いからね？」

全く、コイツはナチュラルに嘔吐きやがって、俺は昨日……昨日？

あれ、俺死んでね？

いやいや、待つんだ俺

今ならまだ間に合う、何に間に合うかわ分らんが

そうだ、きっと夏休みの宿題が間に合う位重大な間に合うだ

小学生の頃は「先生、やって来たけど、持ってくるの忘れちゃったのが通用すると思っていたが、そんな事は無い」

なぜなら、先生方も皆経験してるからだ

皆経験してるんだ、先生はそんな事を言ってきた子供に対して

「んじゃあ今度持ってこい」

とか言うけど、ぶっちゃけ分かってるからね？

分かっている上であえてスルーしてるんだ、言わば先生のお情け

そんな温情に浸かっていると、将来大変な事になるから、今の内に勉強の習慣を付けろよ小学生？

俺は失敗したが

戯言だな（閑話休題的な意味で）

「で、俺は何かに気付いた気がするんだが

忘れちゃった、やべえ何処に忘れてきたかな？」

「探し物は何なのかね？」

「見付けにくい物なのかね？」

「鞆の中も」

「机の中も」

「探したけれど見つからないのかね？」

「いや、ムスカさんはもういいよ、お前はアレだな？」

みよーにノリが良いな？」

「まあ、お前に会ったのは初めてじゃ無いしなあ」

「……はあ？」

「そろそろ戯言は終わらせようか？」

お前は死んだ、これは良いな？」

急に真面目な顔（先程に比べて、先程に比べては、大事な事だから）  
をして腕をくむ男、何者なんだ？

オマケに、俺と会ったのは初めてじゃ無いとか抜かしやがった、それ  
に俺には死んだ時の記憶がハッキリある

別に誰かを助けたとか、トラックに引かれたとかじゃなくて、普通に  
ガンで死んだ、何でも他人が吸っていたタバコを吸い続けたのが  
原因らしい

確かにゲーセンとか行ってたけど、そこまでか？

とか思いながら死んでいった……筈だ

「ああ、後俺の名前が分からないんだが」

「今からお前はコードネーム、ネイキッドスネークだ、良いなスネーク？」

「もちろんだ大佐」

「もちろんだじゃねえよバーカ」

お前の名前が分かんないのは、死んだときのショックみたいな物だな  
とりあえずはフォルテって名乗っとけ、俺はロックマンEXEじゃあ、フォルテGSが一番好きだ、ロックマンEXEは3が至高にして最高だ、異論は認めない」

「待ちやがれ、俺はセレナードが好きなんだ、きつと女の娘なシャイ娘なんだ」

それに俺はロックマンは6が好きなんだ、6こそ頂点にして最高だ、異論は認めない」

「…………やるか？」

「…………やるぞ？」

☆数時間後

戯言だったな（閑話休題的な意味で）

「ふう、まさか俺様とロックマンEXEでここまで語らえる奴が居るとわな」

「ああ、それには俺も同感だ」

「でだ、話を戻すぞ？」

まずは自己紹介を

いつもニコニコあなたの隣に這いよる混沌、レヲン・スターク様です

気楽にレヲンって呼んでも良いよ」

「なあレヲン」

「気楽にレヲンとか呼んでんじゃねえ」

「ええ…」

「まあジョーダンだ気にするな」



魔王様って呼びやがれ」

「で、魔王様よ

俺は何でここに居るんだ？

普通……やっぱ良いや、どっかの誰かが「常識とは人生でほにやら」って言ってたからな」

「たしかベートーベンじゃなかったか？」

「ベートーベンはちげえだろ」

「まあ良いや、お前がここに居るのは

いわゆる転生をさせるからだ」

「それって魔王がやるのか？」

「あー、神様がミスって転生、転生トラック、選ばれた勇者、魔方阵を通ったら桃色ロリっ娘とファーストキス、ある日気付いたら変な化け物との戦いに巻き込まれる

まあ、無くは無い話だが

今回は違うぜ、お前には俺様の暇潰しの元能力を持って転生してもらう」

「まじかー」

「まあ、嘘何だかな W W W」

「嘘かよ」

「アヒヤヒヤ W W W」

まあ、嘘つつうのも嘘なんだよ W W W

あ、大抵文句言う奴とか居るけど W W W

その反骨精神刈り取ってるから、そういうの無いだろ W W W？」

「いや無いけど腹立つなあ」

「シャッッハッハッハッハッハァー!!!」

もう転生先も能力も決まってるから説明だけなんだけどね W W W」

「ふーん、ところで

今まで俺に会った事があるって言ったけど、俺はマジに記憶に無いんだが？」

「あー、そいつはお前にあげる能力に関係が有るんだなあ」

「……能力ってチート？」

「ああ、転生トラックとか知ってるなら知ってるよな？」

【無限の剣製】

簡単に言えば、目で見た刀剣を投影つつう魔術で世界に作り出す魔術

まあ、行く世界が世界だから、魔方に変えたけど

その【無限の剣製】をね、お前以外のお前に鍛えて貰ったんだよ」

「……………【無限の剣製】は知ってるけど

今一分からん、俺以外の俺とか、鍛えたとか、サッパリバツサリ分かります！」

「ヴァカメ、1から10を学びやがれ

お前以外のお前つつうのは、パラレルのお前だな、思考回路がほぼ同じ、行動がほぼ同じ、言動がほぼ同じ、思いがほぼ同じ

そんなお前達に、俺様は【無限の剣製】を授けて異世界に送り出した

お前達みたいに心が強くて、さらには転生願望を持ってる奴を探してたんだよ

そして、これが、数多の刀剣を内包したお前の無限の剣製だ」

テレビの中の魔王様がテレビ画面から右手を出すと、その掌には、火の玉見たいのが浮いていた

いや、なに普通にテレビから出てきてんだよ、ちよっとビックリしたじゃんか、…………バレてないよね？、俺がビックリしたのバレてないよね？

「さ・ら・に！

【無限の剣製】は俺様がちよっと弄ったからな、普通なら精神がエミヤに喰われるんだが、大丈ブイwww」

「ふるっ！」

「ひでえな、とにかく、行ってこい

そっからどうしようとお前の勝手だ、安心しな、トイレや風呂まで除く奴等が居るらしいが、俺様は覗かねえよ」

「…………もう一度生き返れるのは嬉しいけど

なあ、俺を勝手に生き返らせて、神様とか輪廻転生とか、後は世界の拒絶とか大丈夫なのか？」

「……………は？

は、はは……

く、クヒヒっ

アヒヤヒヤヒヤッ!!!

シャッハッハッハッハッハアー!!!

マジに面白いなWWW

輪廻転生WWW世界の拒絶WWW

オ・マ・ケ・に、かWみWさWまWWW

シャッハッハッハッハアー!!!」

一体全体何が面白いのかサッパリ分かんが、なぜだか急に魔王様は笑いだした

心底面白そうに、いや実際に心底面白いのか？

いまいち魔王様のツボが分からないが、どうやらかなりツボッたらしい、まだ笑ってやがる

……あ、足ぶつけた

「ひー、いー、ヒヒッWWW

痛えWWW足ぶつけたやんけWWW」

「知らねえよ」

「ま、だろうな W W W  
えーっと？」

輪廻転生 W W W 世界の拒絶 W W W

かみさま W W W (笑)

だっけ W W W ?」

「…そうだけど」

「大丈夫大丈夫、輪廻転生ごときは最早話に何ねえ、世界の拒絶う？」

話に何ねえなあ

後にかみさま W W W

これが一番話になんねえな W W W

俺様の事知らねえのはなんちゃって神様か、お前でも殺せる神様だよ W W W

今から送る世界にも神様居るけどさ、ソイツにはお前が転生者だつて気付かれる訳がねえわな W W W

だって、雑・魚、なんだもの W W W」

「……普通魔王って神様の送り出した勇者とかに」

「あ、俺様元・勇者でーっす！」

ま、今じゃ全世界！全宇宙！全時空！最強無敵の魔王様……！！

レラン・スターク様ツツ！！！！  
けどどな？

とにかく行ってこい！！！！

俺様の玩具（息子）」

テレビの中の魔王様が指差した先、黒い扉に向かって歩きながら、俺は色々な事を考えていた

さつき貰った【無限の剣製】の中の沢山の俺の記憶を覗いたり、結局俺の名前はまだ思い出せないな……とか

まあ、そんな事も所詮戯言か……

どこぞの戯言遣いで人間欠陥みたいな事を言いながら、俺は真ッ黒

いドアの中に入った

……あ、この部屋何かスマガみてえ

とか思いながら



俺の…平和エ……（前書き）

まえがたり

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ W W W

皆さん大好き魔王様ことレヲン・スターク様々だぜ W W W」

作者です

「で、二回目だが、何を書きや良いんだ？」

何も書くことなんか無いだろ

「てか、まだ主人公の名前が出てないって言う W W W」

気にするな、そんな些細な事はシュレッダーにでも入れてしまえ

「些細な事 W W W 主人公些細 W W W」

まあ、そんなこんなで始まります

「始まるざます W W W」

行くでがんす

「ふんがー W W W」

俺の…平和エ……

「はい、はい、ご注文の剣を八千ですね？」

「ああ、今度の戦争までには作って欲しい」

「お安いご用ですよ、これからもご贔屓にしてもらえれば」

「いやー、しかし、人里から離れた場所に目深にフードを被った怪しい男が居ると聞いたから来てみたが、まさか武器屋とわな」

「いやいや、普通本人を目の前にして怪しいとか言わないでくださいよ」

このフードだって、昔魔女に付けられた傷を隠す為なんですから」

「――ッ！

すまない、そんな事も知らないで私は」

「いえ、気にしないでくださいよ」

「また今度、武器を受け取りにくる」

「はい、さようなら」

「うむ」

……………行つたなあ

全く、ままならん世界だなあ、マジふざけんなよあの魔王様よお

俺の住んでた世界と違う予想はしてたよ、してたけどさ、なんで百年戦争真っ只中？

今の時代魔女狩りがガリガリ行われてる時代やん、その時代に転生とか

いや、体が有ったから転生よりトリップ？

魔王様が転生言ってたから転生か

………今の問題は転生かトリップか、じゃないよなあ

「こんなんじゃ、人前に出れねえよ」

パサリ

と目深に被ったフードを取ると、視界の端に白い髪がみえる、別に魔王様をリスペクトした覚えは皆無だけど、ストレスで若白髪になった

禿げないだけ良かった

この白髪った理由、それはどう言い訳しようがまず間違い無く【無限の剣製】だ

この【無限の剣製】について、今一度整理してみよう、俺の【無限の剣製】は普通とは違うみたいだからな

まず中身

いきなり確信に迫るけど、中身が圧倒的に増えてる

しかも、その刀剣を集めたのが他ならぬ俺だから、行った世界が小説や漫画の世界だった場合、一生懸命ハッピーエンドにしようと頑張ったよ、俺

しかし、何も全ての世界を、誰も失わず、みんな笑って、みんな笑顔なハッピーエンドだった訳じゃない

そんな記憶が一斉に頭に突っ込まれたんだ、白髪だけで済む訳が無いんだけど、多分それは魔王様が何かしてくれたんだろ

魔王様乙カレー

「しかし、八千か……………」

（トレース、オン）

———投影、開始！———」

俺の魔力を消費して、今の時代の剣よりもいくらかランクが上の剣を創る

やべえ、いつ考えてもこの鍛冶屋って職種は大当たりだな、今の御時世武器は、市販の物より安い値段で、より良い物を、より速く、だからな

その上俺が消費するのは魔力のみ（笑）

ここまでウハウハな職業も無いわな

まあ、若白髪のせいで人前に簡単に顔を出せないのはかなりキツいけど

まあ、いざとなったら嘘八百で逃げるけど、本当にピンチなら魔女のせいにすりゃ良いし、まだ見ぬ魔女さんメンゴ

「さて、仕事も終わったし、気楽に散歩にでも行こうかな、ヤツパリこんな時代の空気は良いね

ただし森限定」

家であり仕事場である木製の家を出て、森の中を静静と歩く、……  
男の俺が静静歩くって可笑しいか？

いや、おかしくは無い、反語乙

そもそも静静ってのは、静かに、非常に静かになって意味だ、ゴメン  
嘘だ

静静の意味なんか知るか、こんな時代に静静の意味なんざ分かるか、  
ぐーぐる先生どこですかー、長期休暇で後何千年も居ない………だ  
と？

「まあ戯言だよなあかつこ、閑話休題的な意味で、かつこ閉じ

とか言ってみたけど、これは一体全体どういうこっちゃ？」

「あっちに魔女が逃げたぞ……！」

「追え！逃がすな……！」

「今日の俺は、紳士的だあ、良かったなあ」

何か一名、紳士的じゃない奴が居たような………気のせいで有って  
くれ、頼むから、もしあの人………人か……アレ……？

とにかく、あのチートがこの世界に居るのなら、俺は今すぐ逃げる、無理だと思うけど

「……………覗いて見たけど、別にぶるあああああ、なああのチートは居ないな、やっぱ気のせいか……………いや待ちやがれ、あたらしい問題発生だと」

「はあ、はあ、…追い詰めたぞ

吸血鬼!!!!」

「くっ!!」

やべ、めっちゃあの吸血鬼に見覚え有るんだけど

えうゝあんじえりーん、何やってんだよ、真祖の吸血鬼じゃ無いの？

て言うかさあ、この世界

ネギま! かよ!!!!

「さんざん逃げ惑いやがって、だが

ここでお前の命は終わりだ……」

「……」

「どうした？怖くて声も出ないか？」

いや、多分呆れてるんじゃないかな、真祖の吸血鬼をアイツ等程度で倒せるとは思えないけど

とか思っていると、何か用意し始めたな、エヴァンジェリンの方向からは人が邪魔になって見えてないみたいだけど

「残念だったな、……コイツを食らったお前自信の運命を恨め！」

「なにっ！これは！？」

「ブフッ……思わず厨二っぽくて笑っちゃったじゃねえか」

エヴァンジェリンを追いかけていた奴、ここでは仮に魔法使いAとしておこう

その魔法使いAである彼は、何か鳥肌が立つ様な事を言って、エヴ



アンジェリンを何か魔方陣見たいな物に閉じ込めた

俺的には、厨二病要素はバトル物には必要不可欠だと思う、もし厨二病要素を抜いた場合、非常につまらなくなるに違いない

少なくとも俺はそう思ってる、つまりはいかに読者がその物語に感情移入出来るかであり

……………戯言だな

「くっ！貴様等、こんな高度な魔法道具をどこで！！？」

「へへ、どこだろうと良いだろうが、今から死んじまう吸血鬼にはよお」

「チッ」

はあ、どうすっかなあ、助けに入るべきか、入らざるべきか

漫画アニメゲームじゃエヴァンジェリンは無事だからと言って、今この世界で死なないとは限らないしなあ

【俺】は前に大丈夫だと思ってて失敗した事有るからなあ、同じ失敗は二度と繰り返さない為に、か……

かわいい女の子を集団で、ってのは気に食わないな、【俺】の、俺

の正義に反する

「ま、所詮戯言かな

て言うか、俺戯言好きだな、今の時代じゃ無いよなあ、今の俺は人外じゃないし、普通に寿命で死ぬか

（トレース、オン）

———投影、開始」

俺は一振りの日本刀を、左手に投影する

その形はまさしく日本刀と言って良いだろう、鞘に収まったその日本刀

完成形変体刀十二本

斬刀・鈍 ザントウ・ナマクラ

斬刀・鈍に右手を乗せ、今から多々ツ斬る道具を見つめる事瞬間

しゅりん

と言う音が聞こえた刹那

ことり、と道具は真っ二つになった

「えっと、それ斬らせてもらったけどさ、あんまり物騒なのはいいじゃないと思ったり思わなかったり」

「な、何だお前は！！！」

これはお前がやったのか！？」

「そだけど」

「お前が何をしたか分かってr」

「あー、はいはい、そう言うの聞き飽きたから

今から俺はこの子の味方だからー

正義の味方の名の元につてね」

「ふ、ふざけるなよ！！！」

正義は此方に」

「えい」

「ぐべっ！」

取り敢えず、何かうるさいからぶん殴って気絶させたんだけど

流石に皆さんいきなり杖を構えるのはどうかと思うぜ？

「うーん、皆さん落ち着こうよ

俺が殴った事は悪いとは思って……無いけどさ、そんな殴った位で杖を持ち出すのはどうかと思うぜ？

言わば酒場で起きた殴り愛の喧嘩に、いきなり拳銃を持ち出す様な物だぜ？

あんたら大人げないと思わないか？」

「黙れ！！！！」

その吸血鬼に加担すると言う事は、貴様も悪だ！！！！

死ね！！！！s」

しゃりんしゃりんしゃりんしゃりんしゃりんしゃりんしゃr

ゴトリ、と、魔法使い達の持っていた杖が斬れて地面に落下する

この事により、俺が万有引力を発見したのは余りにも有名……信じ  
る人居ないよな？

「ん、な…あ……！？」

「引いてくれよ、あんた等にもさ、守るべき人の一人や二人は居る  
だろ？」

帰りを待っていてくれる人が居るんだろ？

だったら、あんた等は引いた方が良いぜ

作戦名は命を大事に」

「わ、私達が…、…吸血鬼を目の前に………ひ、引く訳には……」

「そだなー、確かに目の前に吸血鬼が居たら普通はそーだなー」

確かに、目の前に時限爆弾が有ったらほっとかないよな、例えばその  
時限爆弾が爆発しない時限爆弾でも……知らないきや意味無いし

無知ってのは罪なのか？

それとも知ろうとしないのが罪なのか？

今さら罪だの罰だのどうでも良いか

所詮は戯言（閑話休題的な意味で）

「んだったら、目の前に居なけりゃ良い訳だ」

「な、何を」

「そら行くぞ幼女」

「…へ？」

「なに驚いてんだよ、行くぞ？」

「ま、待て!!!!」

そ、んな、私達が見逃すとても」

「見逃すよ」

「ッ！」

「だって、死にたくないだろ？」

俺は殺したくない、ほら、ハッピーエンド

んじゃ行くぞ幼女おー」

「え？ なッ——きゃ!？」

「それじゃーソルジャーさようならー」

「ま、待て！！！」

コラ！もっと他に持ち方があー」

啞然とする幼女と魔法使い達を無視して、幼女を小脇に抱えて走り出す

まあ幼女もといエヴァンジェリンが顔を真っ赤にして何か言っていたけど、多分フラグは立たないんだろうなあ

はあ、良いなーネギ君、ラッキースケベってか？

いや、しかし、うっかり幼女持ってきたけど

……………これからどうしよう……………

俺の…平和エ……（後書き）

さて、あとがきだ

今回はコレ

完成形変体刀十二本の内の一本

斬刀・鈍  
ザントウ・ナマクラ

「斬れ味」に主眼が置かれている  
柄や鍔、鞘が真っ黒な刀であり  
あらゆる物を抵抗なく一刀両断できる

宇練 ウネリ・キンカク 金閣と言う人物は、この刀で万人切りを成したと言われている。

所有者の宇練の居合い抜き速さゆえ、初登場時には刀身が見えず、  
後にこの刀を手にいれた主人公、七花は「なんか普通」と述べている  
刀身によって物質の分子結合を破壊しているために、「なんでも斬  
れる」という特性を発揮している

ぶっちゃけ、作者は【無限の剣製】で刀語の刀を出したかっただけ  
なんだ

他にも出したい刀剣はあるけれど



不思議と、こんなのやってるの作者だけって言う：

もしかして、【無限の創製】で作者が見逃してる設定とか有ったりするのかな？

だったら、そこは自己解釈、もしくは魔王様が改善したと言うことで

あとがたり、これにてお終い

## よしエヴァ、旅をしようか（前書き）

いやっふうー!!!

作者は1時から2時の間がハイテンションだぜー!!!

「イヤツフウーWWW

皆だいきすぎ魔王様!

レロン・スターク様々だぜWWW」

はあ、と、言うわけではじまりました

「おま、急にテンション下げんなよWWW」

光る風を追い越したら

君にきつと会えるね

新しい輝き

ハッピー☆レーディーゴー

「何を歌ってやるよ」

いや、書いてるのネギまやん?

今後、学園祭で皆に歌わせようかなあ、と

「ふーん、あんま興味ないやw w w  
どぞご自由にw w w」

はあ、書く事が無い

「んじゃまえがたり終わりで」

終わりゝ

## よしエヴァ、旅をしようか

さて、実に不思議なんだが、俺の目の前には怒ってる幼女エヴァがいる  
なんでコイツは怒ってるんだ？

分からない事は聞いてみよう、ぐーぐる先生はまだ誕生すらしてないんだから

「なあy」

「おいお前!!!」

一体なんなんだお前は!!!!

この私を真相の吸血鬼と知っての行動か!!!?」

「あのな?、他人のセリフに自分のセリフを被せるのは失礼なんだぞ?」

わかったか幼女?」

「——ッ!

さっきから幼女幼女幼女と………

私の一体全体どこを見たら幼女に見えるんだ!!!!」

「全体一体どこをどう見ても幼女だろうが」

「幼女じゃない！」

「幼女だろーが」

「幼女じゃない！！」

「幼女だって」

「幼女じゃない！！！！」

「幼女だって認めちまえよ」

「だから何度も言ってるが、私は幼女じゃn」

「あ、お前の変化はもうとっくの昔に切れてるからな？」

「……な、なあ、」

うん、気付いて無いのに気付いてたけど、あえて放置してみた

いやー、あっはっはっ、もしかして吸血鬼になってそんなに時間たつてないのかな？

「あ、あ…う…えええええい！！！！」

もういい！結局お前は何なんだ！！？」

「何なんだ……か…」

通りすがりの正義の味方です」

「んな訳あるかぁー！！！！！」

どこの世界に吸血鬼を助ける正義の味方が居るんだ！！！！」

「え、目の前に居るじゃん」

「むー、…むむむう…むきー！！！！！」

歯を食いしばったエヴァが腕をブンブン振って何かを伝えようとしてる

でも何を伝えたいのかはサッパリ分からない

「……珍しい怒りかただな？  
画期的だよ少女」

「だから私は少女じゃ」

「少女だろ？」

「うー！、…うー！！！！！」

歳は絶対にお前より上だあ!!!!」

「つまり大人だど？」

「フフン、そうだ、やっと分かったか」

「そうか、大人の女性はうー、うー、泣くのか、いやー知らなかった知らなかった」

「う、う……うるさあーい!!!!」

何だろうこの胸に沸き上がる熱い思い、もしかして俺ってロ

「うー!、しゅーりょー!

この話はしゅーりょーだ!!!!」

「もうちょっと慌てる様が見たいです!」

「何を宣言してるんだお前は!

お前に何時までも幼女呼ばわりは不快だからな、私の名前を教えるやる

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ」

「エヴァンジェリンか……」

「エヴァで良い」

「そいじゃエヴァ、自称正義の味方としては、名乗られたからには俺も名乗り返したいんだがな

生憎と、俺は自分の名前が分からない」

「……は？」

「いやー、度忘れしちゃってね

うっかりうっかり（笑）」

「何がうっかりうっかりだ!!?」

自分の名前をどうやったら忘れられるんだお前は!!?」

「だから俺の名前はお前が決めてくれ」

「わ、私か!？」

俺の名前を決めて欲しいと言うのは、自分で名前をつける勇気が俺には無い、ある意味拷問だ

いかにひどく無くするのかが問題だ



「いや、俺は自分のネーミングセンスに自信が持てないからな  
お願いできるか？」

「ふん、なぜ私がお前の名前を決めなきゃならんのだ  
そんな物は自分で決めろ」

「自分のネーミングセンスに自信が無いんだって  
今ならカーナリー、高い紅茶を用意出来るんだが？」

「ん？……む、交換条件か…」

「良いだろう、今からお前はチャチャゼロだ」

「紅茶は出してやる、だが、何がなんでもその名前は、その名前だ  
けは却下だ」

「おい！それはどういう事だ！！？」

「私のセンスがn」

さて、どうやら俺は自分の名前を自分で決めないといけないらしい  
それなんて言う公開処刑、今後俺は俺が考えた名前で呼ばれ続ける  
訳だ

さあ！

未曾有のピンチでございマスタング少佐！

「はあー、戯言だよなあ

いや……傑作か？

……ふむ、名字は決まったな」

「む？

何だ？言ってみろ、絶対に笑わないから言ってみろ」

こいつ絶対に笑うつもりだぜ、しかし

名字はナイフ使いで殺人鬼で人間失格に憑依した【俺】から取ったが、名前はどうするか

名前まで【それ】に近付けたら、名前に飲まれて殺人鬼化、とかなったら洒落にならんからな

ふむ……よしきた

「俺の名前は今から

零崎 回斗

こっちで言うなら、カイト・ゼロザキかな」

「カイト・ゼロザキ……」

こっちで言うならってのは、どう言う意味だ？」

「俺は日本って所から来たんだが、そこだと零崎 回斗って言うんだよ

まあ、海を挟んだ向こうだから、今は関係ないわな」

「ふーん、カイト……カイトか

まあまあ良い名前何じゃないか？」

とか何とか良いながら、何度も何度もカイト、カイト、カイト、つて口に出してるのは何なんだ？

ま、良いか、最低限フレンドリーになったし、そろそろ

「そろそろ、戯言は終わらせるか」

「む？何だカイト？」

「エヴァは吸血鬼、しかも真祖だよな？」

「――ツ！」

ふ、ふんっ、どうやらやっと私の偉大さが分かったらしいな

確かにあの時は助けて貰ったが」

「吸血鬼ってことは当然血を吸うんだよな？」

「……それがどうした」

「それで、吸血鬼に吸われた奴が吸血鬼になるってのは本当か？」

「そんな訳ないだろう、私だって人間を吸血鬼にする方法なんぞ知らん」

「んじゃあ、吸血鬼に吸われても、別に死ぬだけって事か？」

「……何も死ぬ訳じゃない

ある程度の量を吸えば、私は満足するし、吸われた奴も死なん

まあ、協会が吸われた奴を汚れた者として殺すらしいがな、ふん」

なるほどな、エヴァは無闇に人殺しをしない奴なんだな、マンガなんぞ宛にならないからな、この世界のエヴァがマンガみたいな奴と

は限らないし

やっぱり、ちゃんと会って話さないと、ソイツの事は何にも分からないからな

「…エヴァ、俺と一緒に旅しないか？」

血を一定の期間与え続ける奴が居れば、他の奴から血を吸う必要が無いから、協会に吸血鬼だってバレる確率が減る」

「え？……旅？」

「ああ

ぶっちゃけ、エヴァの背負ってる面倒事は無視して暮らしていききたい

何もわざわざ自分から厄介事に突っ込んで行く必要は無いからな」

「……………」

「でもな、ここで俺がお前を見捨てたら、後々になって、俺は死ぬほど後悔するんだよ」

「…？」

「多分、てか絶対に俺の勝手な考えだと、エヴァは強いけども、吸血鬼になってまだ日も浅いから

ある程度強い奴とかには勝てないだろ？

そこでエヴァに死なれると、俺は非常に気分が悪い訳だ、何てったって助けられた筈なのに助けなかった事になるからな」

「む……私は簡単にやられたりはしない

それに、お前の言い方だと、私よりお前の方が強いみたいじゃ無いか！」

「……試すか？」

「……」

「て言うか、もうどうでも良いや」

「え？

……どうでも良いや!!?」

「よし、旅するぞー、お前の答えは聴いてない」

わたわた慌ててるエヴァの手を掴んで、適当に隣街に歩いてく

いやー、もう、目からして、雰囲気からして、体全体から滲み出るオーラからして

私寂しいですオーラが出てるし、無視したらマジメに寝起きが悪い

俺は人間なんだから、しかもこんな時代の人間だ、ちんたらしてたらすぐ死んじゃう、即決！即断！！即答！！！！

「おい！ま、まま、まてえ！  
な、何をやってる！！！！」

私は吸血鬼だぞ！？真祖だぞ！？  
化物だぞ！？ひ、人殺しだぞ！？」

「ふーん、そーなのかー（笑）」

「そーなのかーじゃない！！！！」

「うるへーなー、人間はすぐ死んじゃうんだから  
ぐだぐだ言ってる暇なんか無いの

俺はお前と旅したい

お前はどうか、エヴァ？」

振り返ってエヴァを見てみると、なんつーかメツチャ慌ててる、戸惑ってるのか？

いやでも、わたわた可愛いな、何時までも見てる訳じゃ無いけど

「わ、私は」

「答えは聴いてない、例えば拒否っても無理矢理、一緒に旅するからさ」

「はぁ!!?」

ふ、普通はこう言うのって、その……」

「だって、拒否されたら傷付くじゃん

俺は傷付きたくない、ならば拒否を拒否するしかないじゃんか、しようがない

そうだ、旅にしよう

これからよろしくな、エヴァ」

「旅は一緒にしたいけど……!!」

せめて私の意見を聞けええええええ!!!!」

なんだか叫んでるエヴァと一緒に、隣街に向かって歩き出す





## よしエヴァ、旅をしようか（後書き）

さて、あとがたりだ

とくに書くことは無いのに、あとがたりだ  
エヴァは寂しがりだと思うんだ

て言うか、百年でも孤独だったら誰でも寂しがりにならないか？

そんなだから、ナギにちょっと優しくされたら、そりゃ惚れちゃうよ  
どんなに精神年齢が高くなっても、精神は肉体に引っ張られるって  
言うからね

誰が言ったか知らないけど

特に書くことは無いから

これにて、あとがたり終わり

## 投影できるのは刀剣だけじゃ無いんだぜ（前書き）

作者です

「皆の魔王様ことレヲン様だぜWWW」

まあ、タイトルで分かる通り、【無限の剣製】で作れるのは刀剣だけじゃ無いらしい

「何でお前が自信無さげ何だよ」

いやねー、実はドコ情報だったか忘れちゃって、もしかしたらデマかもしれん

でも、デマだった場合は素敵魔王様印の改造って事で

「俺様つつう逃げ道に逃げたか」

いや本当万能、感謝してます

「まあいい、崇めろ！称えろ！敬え！

シャ〜ッハッハッハッハッハァ〜！！！」

んじゃ最後に、この小説を見てる人に一言

妖光とは、hack／G・U.に出てくるツンデレです、デレた瞬間作者はやられました

クソッ、そんなデレなんて卑怯だぞ妖光！

**投影できるのは刀剣だけじゃ無いんだぜ**

「ごゆっくりー」

「言われなくても、ごゆっくりするつもりだったんだけど、まさか言われるとは

これは俺の全神経を持ってごゆっくりしなければ、一瞬足りとも気が抜けぬ!!!!」

「あはは、おもしろいお客さんですね？」

そんな事言った人初めてですよ」

「あははー、俺の住んでいた所じゃ【袖触り会うも多少の縁】と言って、これはどんなに小さな出会いでも、出会いは出会い

大切にしなさいと言う言葉でね、……まあ半分程うろ覚え何だけど

戯言だな」

宿屋の中で、目深にフードを被った男と、金髪ロリッ娘が、受付の子と話してる

て言うか俺だった

宿も取って、今は本当に全く何の意味もない戯言中、何だかこの受付の子と話しているとエヴァがむくれて可愛い&面白い

「…………おい、早く部屋に行くぞ」

「あ、すみませんね？」

連れが速くこの俺の武勇伝を聞きたいって言うんで、そろそろ行きます」

「武勇伝って、何か有るんですか？」

「有りますよ、俺はジャンケンを八回連続で勝った事が有るんだ

ま、この話はまた今度と言う事で」

「あははは、本当に変な人だね？」

何か困った事が有ったら言いなよ、私にできる事ならするからさ」

「うん、何か見つけたらね」

受付の子から部屋の鍵を貰い、二階の突き当たりの部屋に突入する

部屋はレンガ作りで、ベッドが一つ、椅子が三つに机が一つ、そして窓辺に花瓶に入った一輪の花が部屋に明るさを与えてる

「いやー、良い部屋取れてよk」

「バカかお前は!!!」

殴られた、しかも割と痛い

こ、この痛みは!?

ま、まちがいねえ〜、お、俺達は今

スタンド攻撃を受けている!!!

「……ふ、戯言だな本当」

「戯言じゃない!!!」

お前は何を考えてるんだ!!!」

「……エヴァのパンツの色は何ですか？」

「な! なな、何を言ってるバカか!!!?」

「まあ、そんな事は考えてない、今はこの部屋良い部屋だなー、って考えてるが

それがどうかしたか？

はっ！

もしや俺の考えは全部知りたいって言う変態さん？」

「ち、が、う！！！」

何をのんきに受付と話してるんだ！？

もしカイトの白髪がバレたら、どうするつもりだ！！？」

「そうだな……ジャンケンして勝った方の言う事を聞くと言うことで

俺のジャンケンに賭ける」

「うがー！！！！バカか！！！！」

そうかバカだろお前！！！！

いいや、確認しなくてもバカだ！！！！」

「おいおい、バカと天才は紙一重って言うだろ？」

「言う訳無いだろ！」

「……？……ああ、……無いのか、まだ」

そうだな、この言葉がいつ生まれたのかは知らないけど、まだこの時代に生まれて無い事もあるよな



そうか、しかしそれだと不便極まりないな、いざとなったら日本の言葉って言えば問題無いか

しかし吸血鬼か、吸血鬼と言えばヴラドさんだけど、……居場所も今生きてるのかも知らないんだよなあ

「何か言ったか？」

「いや、戯言だ」

「と・に・か・く！」

今後バレル可能性の有る事はするな！

バレたらどうなるか分かるだろ！」

「…………追っかけ回されて、捕まったらバッドエンド、捕まらなくても、今後その街には行けなくなる……ねえ」

改めて考えてみると、とてつもなく暗い人生だな、ちよいと鬱になりたいた時考えてみると良いかもしれん

……鬱になりたい時なんてあるのか？

いや無いか

「分かったら、必要最低限外に出るな

明日には、ここを出るぞ」

「だ、が、こ、と、わ、る！」

「……は？」

お、お前は私の話を理解して」

「なあエヴァ、俺は人間だ

ちんけで、すぐ死んで、すぐ壊れて、すぐおかしくなって、すぐ他人を陥れようとして、すぐ他人を信じて、他人を疑わなくて、他人を疑って

騙し騙され、殺し殺され

ただでさえ短い人生を更に短くする人間だ」

「……まあ、その考えには賛成だが

それがどうした」

「悪いが俺は、異常に短い人生を、ただ黙って影にこそこそしながら死ぬなんて

まっぴらゴメンだね……！！

俺は後何十年で死ぬんだ、何で短い人生を他人に怯えながら生きな

くちやならん！

故に！！故に！！！！

協会に行くぞ！！！！」

「……？……待て！？途中まではまだ良い！  
最後のは何だ！！？」

「思いつきだが、しかし面白い思いつきじゃないか？

ほら、吸血鬼と白髪異端が協会に祈りに行くなんて  
しかも全く神に敬意とか無いんだぜ？

やべえ、書籍化しようかな」

「できる訳無いだろ！！！！  
ダメだ、絶対にダメだ！

そ、そうだ！血！、お前は私に血を捧げなければならないだろう！  
！？

今ここで渡せ！！！！」

「えー、今それ出すかなー

別に良いけどさ、吸う場所はどうする？

一番、腕

二番、首

三番、足

四番、右足

さあ、どこから吸う？」

「二番だ二番！」

何をどう間違って三番、と四番、が出てくるんだ！？  
それにどっちも一緒だろ！」

「いや、三番、は左足と右足、どちらでも吸える権利を貰えるんだ  
がなあ

いやならしかたない、はい、吸って良いぞ」

「ん、む……」

フードを取って、エヴァに首筋を晒す

エヴァが舌で首筋を舐めた後、牙を突き立て、突き立てた所から血  
を飲む

いや、何かエロいな、エロチックエヴァ、エロア？エロエヴァ？

「ん、なあエヴァ」

「ふ……ん？……ん……んく……」

「エロチックエヴァ、エヴァエロン

## THE・エロス吸血鬼

どれが良いいい、ちょ、まっ、噛むな、そんなに強く噛むな！」

「むー、んー！」

「わ、悪かった、悪ふざけが過ぎた！」

紅茶！高級な紅茶を用意するから許して！」

「ん…ふ……本当だろうな？」

「ただちに！！！」

くっそ、なんやかんやで紅茶の件はうやむやにしたかったのに、めんどくさいけど良いか

さて、茶葉は有るから後は食器類か

「（トレース・オン）

———投影、開始

ちょっとお湯貰いに行ってくるわ」

「……………ちょっと待て

それ、そのカップをよこせ」

「ん？、良いけど壊すなよ？」

俺からカップを受け取ったエヴァは、しばらく色んな角度からカップを眺め、見つめ、観察し

指で弾いたり、重さを確かめた後

思いっきり地面に叩き付けた

「言ってる側から何してんのおおおおおお！？」

「な、何だこれはあああああああ！！？」

「ぎゃ、逆ギレ！！？」

何だってエヴァが壊したんじゃないか！？

こんなでも剣を投影するよりよっぽど魔力使うんだぞ！

「なぜこのカップがここに有る！？

なぜ消えて無くならない！？」

「存在を全否定ですか！？

そんなにこのカップ嫌いか？」

「違う！」

このカップは魔力で出来てるんじゃないのか!？」

「え? いや、どうなんだろう？」

カップはカップだろう？」

「このカップは、魔法で作ったんだろう？」

だったら、何で形が壊れた時に魔力にならないで残ってるんだ!？」

「……そう言う物だからとしか言えないんだがな

何時までも、欠片が落ちてたら危険だろう？」

とりあえず、欠片消して……

お湯持ってくる」

「何で……消えるんだよね……うう……頭痛い」

何か頭抱えてるエヴァを椅子に座らせて、下の階に言って受付の子からお湯を貰って二階に持っていく

紅茶をエヴァの前に出して、俺も紅茶を飲むと、ある程度落ち着いたのか、エヴァがまた質問してきた

しかし、幼女が足を組んで、さながら女王様みたいな格好してるのは、不思議な感じだな、エヴァだから似合ってるのか？

「流石だ、合法ロリ」

「?…何か言ったか？」

「いや、ただの戯言だ気にすんな

で、俺の魔法について、だったか？」

「そうだ、あんな物を完全に作り出す魔法なんて聞いた事が無い

もしかして、一族に伝わる魔法とかか？」

「いやいや、一世代限りの御技だよ

名前は【無限の剣製】

(アンリミテッド・ブレイド・ワークス)

簡単に言うとかチートだ」

「ちーと？」

「分かんないか、能力は俺が今まで出会ってきて、手に入れたた刀



剣をこの世界に呼び出す

って所か」

「……要するに、剣が折れても  
また別の剣を作り出せると言う事か？」

「まあ、そうだねー、簡単に言えば」

「さっきから簡単に言えば簡単に言えばと

まるで他にも何かありそうな言い種だな」

「まーね、それだけならチートなんて言わないよ

この話はもうお終い、紅茶飲んだら眠ろうぜ」

「む、そうだな、……なあカイト」

「なんだエヴァ？」

「べ、ベッドが一つしかないぞ？」

「そうだな」

「カイトはどこに寝るんだ？」

「ん」

俺は勿論当然の如く部屋のベッドを指差す

「わ、私は、どこで寝るんだ？」

「そりゃ、あのベッドだろ」

「い、いい、一緒に寝るつもりか！？」

ま、待て！私にはそ、そんな経験は無いし、だ、第一速すぎるだろう！！！！」

「……エヴァは俺を野獣か何かと勘違いしてないか？」

あり得ないだろ、知り合って数時間でそんなのとかJK（常識的に考えて）

それに俺は一途な女の子が好きなんだ、揺光とか、揺光かわいいよ揺光」

「そう…か、って待て！！？」

誰だ揺光って！誰なんだ！？」

「フィクションの人物であり、実際の団体、組織、宗教、ゲーム、人物とは、まったく関係ありません

さあ寝るぞ」

「待て！揺光とか言う奴の事を教えろおおおおお！！！」

あんまりエヴァがうるさいから、口の中に手を突っ込んで、モゴモゴさせながら眠った

……………☆

翌朝、何か自分の右手にとてつもない違和感を感じて起き上がってみると、まあ、案の定ベタベタになってた、しかもまだ舐めてるし

「…ん…むう…もぐもぐ…」

「……いや、待て俺……ダメに決まってるだろ、いや、でも、眠いしなあ

うん、仕方ない、眠いしなあ」

「朝食が余ったんですけど食べますかあ？」

「うひゃっはい！！！」

「？」

「い、います！」

連れを起こしたら行きますんで」

「分かりましたー」

とりあえず、エヴァの口から手を引っこ抜いてみ……………る

予想以上に力があるんだが、何で手放さないんだよこの少女は、おまけに、手で探してるし、本当に眠ってるのか？

「うー…む…うー、やあ…」

「…真祖の吸血鬼エ…」

おい、起きろエヴァ、確実にお前の貫禄（笑）やらカリスマ（笑）はブレイクしてるが、まだ取り戻せるやもしれん

ほら、起きろ！」

「ん……………」

「ようやく起きたか……？」

起きたのは良いんだが、何か上半身プラプラしてんな、って倒れそうだし

まずは倒れかけたエヴァの体をキャッチし、揺らして意識を覚醒させる

「おらー、起きろー」

「…ん…えへへ、カイト」

「なん……だと……？」

エヴァがデレた、だと？

え？え？何でだコレ！？何だコレ！？」

「んうー…うるさいぞカイト、何騒いで

………」

「……え、えっと、おはよう」

「な、何抱きついてる変態かお前は！」

「え？俺が悪い感じ！？」

寝起きのエヴァに事情を説明して、一階に降りる

既にいくらか冷めてしまった朝食を食べた後、エヴァと二人で外に出かける

昼過ぎまでは、いつも通り、至極いつも通りの戯言を語らい、買い食いをして、エヴァに何かアクセサリーを買ったりしながら楽しんでいた

まあ、無論、勿論、当然、議論するまでもなく、言うまでもなく、疑うまでもなく

俺は厄介事に巻き込まれる訳なんだが

「はあ、そりゃさー、治安悪いのは知ってたよ、知ってたけどさ、されどさ、だけどさ

そんな的確に俺に当たらなくても良いじゃない、あ、正確にはエヴァが当たったのか

まさか、まさかの人拐いとはね」

見事にかっさらって行ったなー、オマケに馬車で逃亡とか、ポカーンだよ

ここで助けない訳にもいかないよなあ、エヴァ一人でも大丈夫な気がするけど、口を封じられたら魔法使えないしなあ

それに、多分行かなかったら、怒るんだろーなー、予想が容易すぎて泣けるぜ

「とりあえず行くか、決め台詞何がいーかなー、やっぱり普通に正義の味方で良いかな

いよし、行くか!!!」

俺はエヴァが拐われていった方向に向かった、まあ、蛇足として言うなら

屋根を跳んで

**投影できるのは刀剣だけじゃ無いんだぜ（後書き）**

さて、あとがたりだが

まずは挨拶、作者です

「天元突破魔王様だぜwww」

さてさて、拐われちゃったエヴァちゃん、今回の話で存分に真祖の吸血鬼のカリスマ（笑）を見せつけてくれたエヴァちゃん

次回、急遽またしても刀語

またしても完成形変体刀十二本！

すんません他の刀剣に期待してた方、ちゃんと出します、大戦編とかに

それでは、あとがたり、これにてお終い

「（・ω・、）俺の居る意味……」



## 風・林・火・山（前書き）

風林火山

刀語を読んで完成形変体刀十二本を知ってる人は何を想像するのか

今回はバトル路線！

捕らわれの姫エヴァにゃんをカイトは無事助け出す事ができるのか  
！？

てな感じです

## 風・林・火・山

真ッ暗、と言う訳じゃない

けれども、よく見渡せるほど明るい、と言った訳でもない  
薄暗く、薄明かるい、これが一番しっくりくる

薄明かるい月明かりが照らす夜道を尻目に、薄暗い森の中を駆ける

だんだんと、森の木々の端から、大きな館が見えてきた、多分今回  
ズタボロにしちゃうであろう館

色々と聞き込みをした結果、この館の主がエヴァを買い取ったらしい  
いやホント、話の分かる人で良かった、今さら一人二人殺しても、  
精神的には変わらないけど、やたらめったら殺したい訳じゃ無いし  
だって、斬ったら痛いし、斬られたら痛いし、突いたら痛いし、突  
かれたら痛い

殺したら、その人はそこで終わり、そんな人を終わらせる事なんか  
したくない

いや、しない訳じゃ無いけど

「戯言だよな」

と、もうすぐか、刀出しとこ

(トレース・オン)

――投影、開始」

左手に斬刀・鈍<sup>ザントウ・ナマクラ</sup>を出すと、屋敷の外門を多々ッ斬って開け、中に入る

――瞬間

俺に向かって魔法が飛んできた為

しゃりん

と、真っ二つにしてみたら、何かわんさか出てきた、全員が全員真っ黒で黒子みたいな格好をしてる、その格好は全くもって楽しみを感じさせない、まさに仕事服

コイツら、無趣味か？

「せめてアクセサリーを付けるとかないかなー？  
全員同じじゃつまんなくないか？」

「ここをドコだと思ってる」

「貴族ん家」

「……即刻ここから立ち去れ」

「はぁ、アンタ等分かってるだろ？」

返答なんか聞かなくなつて、答えは決まりきつてるだれ？

やべ、噛んじつたよ

とにかく、俺に引く気は無いんだが  
アンタ等引いてくれ、どんなに頑張っても、アンタ等の力量じゃ勝  
てないから

そこのリーダーっぽい人、アンタなら俺とアンタ等の力量差分かる  
よね？」

「…………ツ…」

どうやらちゃんと分かってくれてるみたいで、悔しそうにしてる、  
顔隠してるから見えないけど

でも……引いてはくれないみたい

「まあ、引かないってんならしょうがないけど

死にたくない人は逃げてね？  
俺、無闇に殺したく無いからさ」

「魔法の射手！！連弾・光の」

「……零閃編隊・百七十二機」

しゃりん

今まさに、魔法を放とうとしていた人達は、魔法を唱える事なく、  
首を地面に落としていった

「やるせねえ、果てしなくやるせねえ

いちいち部屋を1ツ1ツ探すのは時間がかかるな

斬刀・鈍・限定奥義  
斬刀狩り」

死んで終わった人の体に、斬刀・鈍を突き立て、その血を斬刀・鈍に  
付けて

また、鞘にしまう

館の壁に向き合い、零閃を放つ

刹那的瞬間に、館の壁と言う壁を多々ツ斬った  
だがしかし、居合いの瞬間に、独特の音は響かない

斬刀・鈍・限定奥義

斬刀狩り

血液を鞘に入れ、鞘と刀の摩擦係数を減らし、その状態で居合いを  
行う事で、居合いの素早さを飛躍的に上げる

その速さは光速を超える、居合いを放つ

斬刀・鈍、限定の奥義

他人から見たなら、持ち手に手を置いて、また手を放した後

館の壁は、地面に崩れ落ちていく

その向こうの部屋には、部屋の掃除をしていたメイド、紅茶を準備  
していた執事、主に黙ってこっそりサボっていた召し使い

そして、今まさに服を脱ごうとしていた、この館の主

「はあ、やるせねえなあ

ども、正義の味方です」

「な、な、」

「あ、お前は喋らないで良いよ？

俺ってさ、正義の味方だから、悪役倒さないといけないし

だから、黙って、死んで逝け」

「だ、誰かあああああ……！！

侵入者だ……！！殺せ……！！

殺せ……！！」

ピーチクパーチク哭くこの館の主、主の声に答えたのか、至る所からメイド、執事、召し使い、黒子がやってくる

その誰もが、館の主を良く思っていないのは分かる、それと同時に何と言っても、引いてくれないってのも分かった

「やるせねえぜ

(トレース・オン)  
———投影、開始」

斬刀・鈍を消して、また新しい刀を出す

この刀は、もう既に、この場に出した瞬間から  
限定奥義を発動させている

「変体刀十二本、三本目

太刀並ぶ事、林の如し

千刀・ツルギ(セントウ・ツルギ)」

斬ッ！

と、一瞬にして、視界一杯が千刀・ツルギに奪われる

【多さ】に主眼が置かれている刀

千刀・ツルギ



千本で一本と言われ、千本の刀全てが材質、重量、斬れ味ともに同じ

その限定奥義の名は

「千刀・ツルギ・限定奥義

地形効果・千刀巡り」

「は、はは

どんな手品か知らないが

ただ刀が地面に突き刺さってるだけじゃないか？」

「ただ刀が地面に突き刺さってる【だけ】かどうかは、お前が自分の体で確かめろ」

まあ、本来の限定奥義・地形効果・千刀巡りは、剣士同士の死合の時に、相手を心理的に追い詰め、さらに千刀流を使わないと意味がないが

生憎と、ここは魔法の世界、心理的に追い詰めても、それが決め手にはならない

だったら、郷に入っては郷に従えだ

「魔法の射手！！連弾・」

「やらせねえよ？」

一刀・一文字斬り」

魔法を唱える前に殺す

これが魔法使い相手に一番効果的で決定的で確定的な攻略法  
故に止まらず停まらず留まらず動き続け斬り続ける

「クソッ！！！！」

刀が邪魔だ！！！！どこいった」

「今後は後ろに目付けときな

二刀・十字斬り

今後は無いんだけどさ」

「また殺られたぞ、何時までも地上に居る必要なんか無い！  
空だ、空なら奴を見失わない！」

「殺されてちゃ訳ないけどな？」

空に跳んだ魔法使いを見据え、震脚で刀を空中に飛ばす

上空の魔法使いまでの最短距離、跳躍五回で事足りる

一跳び、地面を蹴って空中の千刀・ツルギに左足に乗せる

二跳び、左足の千刀・ツルギを蹴り、また千刀・ツルギに右足に乗せる

三跳び、次の千刀・ツルギに跳び移りながら周りを舞う千刀・ツルギに魔力で出来た糸をくくり付ける

四、五跳び、両手に千刀・ツルギを構え、糸を操り、殺意を込めて滅多斬る

「空中一刀・億文字斬り！」

「ッ——」

「ん、な……ば、化物か」

千刀で一刀の刀、千刀・ツルギに斬り裂かれ、魔法使いが地面に落ちる、技に巻き込まれ、何人かの魔法使いも地面に落ちていく

「【壊れた幻想】（ブローケン・ファンタズム）」

地面に突き刺さった千刀・ツルギの内部にある魔力が乱れ、膨張して、爆発を巻き起こす

作り出した刀剣を特製の爆弾にしてしまう技、【壊れた幻想】（ブローケン・ファンタズム）、一本でも強力極まり無いのに、その数千本

そのかわり、作った刀剣は消えてなくなるが、また作れば問題ない

……大丈夫だ、問題ない

「来れ雷精、風の精!!  
雷を纏いて、吹き飛ばさべ!  
南洋の嵐、雷の暴風!!!!」

「……………あ、当たったか？」

「いや、土煙で見えないが」

「あの千本の剣も無くなったし、見通しも良かった  
当たったんじゃないか？」

「やったか？」

「言つとくが、それは

生存フラグだぜ？」

「な、んだアレ？」

鎧、なのか？」

「完成形変体刀十二本、五本目

動かざる事、山の如し

賊刀・鎧」  
ゾクトウ・ヨロイ

【防御力】に主眼が置かれている刀

七尺っていうふざけた大きさをしていて、見た目は西洋甲冑

部品の繋ぎ目が刃になっており、日本刀を鍛える様に作られたよろ、  
……刀

受けた衝撃を外に逃がす機能を持っていて、装甲を通貨して内部にダメージを与える、鎧通しも効かない

一度身に着けると、内部からしか開けられないから、脱がせる事も不可能

まあ、デカすぎて俺じゃ着れないんだけど、これだけは言わせてくれ  
これは、日本刀です

「そろそろ、終いにしようか

——投影、開始  
(トレース、オン)

完成形変体刀十二本、八本目

乱れ舞う事、風の如し

微刀・釵」  
ビトウ・カンザシ

俺の目の前に現れたのは、またしても人形<sup>ヒトガタ</sup>、ただし今度は西洋甲冑

じやなくて人形  
ニンギョウ

完成形変体刀十二本、八本目

微刀・釵  
ビトウ・カンザシ

【人間らしさ】に主眼が置かれている刀

【微刀】とは【美刀】とかけていて、完成形変体刀十二本を作った刀鍛冶が、唯一愛した女性を形作っている

刀の所持者にして刀そのモノ（者）

その名を、日和号  
ビヨリゴウ

ハデな浴衣を来ており、四本の腕と、四本の足を持つ、首は百八十度回転し、口からは槍をつき出す、動力源は太陽

あえて言おう、刀であると

「次から次へと、何なんだソレは、大道芸人かお前は……!?!」

「いんや、正義の味方です

本来ならこの刀、日和号は自動で動くんだけど、一度壊れちゃったからな

俺自身の手で、この世に黄泉返らせる」

「ふざけやがって、今度は何しでかすつもりだ！！？」

多分相手は心底怖いだろうな、今までが今までだ、この日本刀も恐怖の対象だろ

魔力で作った糸を日和号に繋ぎ、日和号を今ここに黄泉返らせる

キキキ、カキン、カコン

『目標、確認、確認』

「ヒッ！？」

「く、首が後ろに！？」

「さて、お祭り時間だ」



魔力の糸で吊り上がった日和号が、四本の腕に握った四本の刀で、魔法使いに斬りかかる

ここに来て、やっとと言うか、ようやくと言うか、魔法使い達も反撃をしてきた

でも、平常心を失い、魔力制御が乱れ、近距離戦が圧倒的に弱い魔法使いは、日和号に狩られるのみだ

「逃げたかったら逃げろー

別に追っかけやしないからよ

だが館の主、テメエは駄目だ」

「ひっ！」

『目標、確認、――竜巻』

館の主が逃げ様としたが、それは容認できないな、何せこの面倒事を引き起こした張本人だもんなあ

日和号が減多減多に斬り裂いた館の瓦礫が、主、デブ貴族の目の前に落ちて入り口を塞ぐ

「逃げる奴も居るっちゃ居るが

全然逃げないな、日和号、春一番」

『――春一番』

「ガフッ！」

日和号の足の高下駄の様な刀二本が、飛び蹴りの様にして魔法使いに突き刺さる、それにしても逃げないな？

「俺を狙うのは正解だ、成功するかは別として  
日和号、砂嵐」

『――砂嵐』

キキキ、カチン、カキン

と、腕を伸ばした状態で日和号が独楽の様に回転しながら魔法使い達を斬り裂く

おかしい、普通この状況だったら逃げる筈だ、なのに逃げないって事は

ちら、っと周りを見渡すと、案の定居た、居ました、館の影に隠れてコソコソやってる奴が、先手必勝！

「微刀・釵・限定奥義」

キキキ、カキン、カチン、カコン、カカカ

と、日和号が動く、上半身を下に、下半身を上に、足を開き、まるでプロペラのように高速で回して空を飛ぶと

ソイツ等に向かって飛んで行った

『——微風刀風』

「だ、誰か止めッ——」

日和号は、止まる事なく、魔法使いを斬り刻んだ、刻んだ場所は砂

煙りで見えないが、微刀・釵の限定奥義を食らったんだ、ただで済む訳が

無い、って思ったけど、自分で言ったんだよな、生存フラグって、いや魔法使いは生きてないけど

「悪魔パンチ」

「うおっとアブね!？」

……えーっと、悪魔さんでらっしゃいますか？」

「うむ？」

確かに私は紳士だが？」

「いや、悪魔かどうか聞いてんのにそんな返答が帰ってくるとは」

砂煙りの中から、壊れた日和号をぶん投げ、俺に行きなりパンチを食らわしてきた奴

まさかアイツ等悪魔呼ぶとか、悪魔は良くて吸血鬼や白髪はダメとか、どんな原理だよチクショウ

「はぁー、果てしなく、どこまでもやるせねえな」

「そう言わないでくれたまえ、私を呼び出した者は死んでしまったが君みたいな強い者と戦えるとなると、嬉しくなってるね」

「俺は心底やるせねえよ」

でもま、最後の<sup>デキ</sup>的には持ってこいだな、一家に一人悪魔さんってか  
戯言だな」

構える悪魔を見据えて、俺も構える、この最中にもデブ貴族から気を反らしちゃいけないのが俺の辛い所

いや本当に戯言だな

「――投影、開始  
(トレース・オン)」

その刀、まるで火の如し

完成形変体刀十二本

最後の一刀

炎刀・銃  
エントウ・ジュウ

これぞ、完成形変体刀十二本の内の最後の刀

回転式連発拳銃と自動式連発拳銃からなる一対の【日本刀】

【連射性と速射性と精密性】に主眼が置かれている刀

連射性と速射性に加えて、異常に高い命中精度を持っている

回転式連発拳銃は総弾数六発

自動式連発拳銃は総弾数十一発

もはや何も言うまい

「……ふむ、何やら面白い物を出したね」

「自慢の日本刀だ、良く見とけよ？」

この日本刀が、アンタを殺した武器になるんだからな」

「ははは、これはまた何とも

オモシロイ事ヲ」

「不生<sup>いかさず</sup>、お前は今ここで俺が斬り殺すんだからな

さあ、お前は何と言って死ぬのかな？」

炎刀・銃を構えて、悪魔に向けて撃ちまくる、ここに来て、魔法の世界と言う事がどこまでも生きてくる

何て言ったって、弾込めの時間が無い

この炎刀・銃の弾は俺の魔力で作っているため、弾を込める必要が無い、おまけに俺のでたらめな魔力が消えるまで弾切れが存在しないっていうチート設定

「不解<sup>わからず</sup>、なんてったってアンタは俺と戦うんだ？」

別呼び出した奴は死んじまったんだから、俺と戦う必要はないか？」

「ふはははは！」

理由なんてどうでも良いじゃないか、私は今、強者と戦える！

理由はそれだけで充分！」

「チッ、戦闘狂かよ

悪いが、アンタと何時までもやりあうつもりは無いからな、すぐに終わらせる」

「ははは！どうやって！！？」

確かにその武器は脅威だが、今の様に横に逃げていれば、当たらない！！！！

その代わり私も攻撃出来ないのだがね

私の勘だが、ソレは一撃も当たりたく無いのだよ」

確かに、今現在悪魔はビックリな速度で常に移動してる、だからこの距離からは炎刀・銃でも狙えない、着弾する前に既にその場所から移動していく

後ほんの一ミリ、といった所が入ってこない

どうやら勘は良いみたいだな、まあ炎刀・銃では狙えないけどさ

「ひつようあらず  
不用必」

心配しなくなつてすぐ終わる

何も、俺が行かないとは言って無いんだよ」

「ナニッ！？」



「不忍法・不生不殺！！！！」

(しのばずほう・いかさずころさず)

否！！！！」

「クッ、後ロカ！？」

「炎刀・銃、限定奥義！」

「全力悪魔パンチ！！！！」

「断罪炎刀！！！！」

一瞬にして、刹那にして、瞬間にして、悪魔の後ろに回り込み、炎刀・銃をまるで拳で殴る様に構え、炎刀・銃、限定奥義・断罪炎刀を発動させる

悪魔の魔力が込められ、渾身の力が込められた拳、その拳に向けて炎刀・銃の弾を一瞬に刹那に瞬間に、百十二発撃ち込む

悪魔の腕が、断罪炎刀で斬り裂かれ、粉微塵になって吹き飛ぶ

まだ、まだ終わってない

炎刀・銃の刀身に熱で炎が灯る、その炎すらも炎刀・銃の一部であり、日本刀その物、腕を振るえば炎が悪魔を斬り裂き

引き金を引けば、引いた数だけ炎刀・銃の斬ッ先が悪魔に飛んでいく  
斬って刻んで、突いて裂いて、撃って射って斬って切って

腕を殴る様に前に出しながら引き金を引き絞ると、その腕を振った  
時のベクトルも弾丸を撃ち出す時に加算される

そんな物を数秒も喰らっていた悪魔の上半身は、物の見事に亡くな  
っていた

「ふうー、まじつかれたー

これ、明日筋肉痛じゃないかな？

と思うよ、デブ」

「ひっ……」

「はあー、お前みたいなのに構ってこんな無駄な時間を過ごしたの  
かよ

おい、エヴァ、怪我無いか？」

「い、いや、まだ何もされてないが」

「そりゃ良かった、帰るか」

「む？」

てっきり私はコイツの事も殺すのかと」

ついつとエヴァはデブの方を指差すと、滅茶苦茶怯えて足腰を濡らしてるデブが居た

はあ、情けない事この上ない奴だな

「別に、ワザワザ殺す必要も無いだろ？」

それに、俺は殺人大好き変態さんじゃ無いんだぜ？」

「む、それもそうか」

「てか、俺的にはエヴァが落ち着いてるのが予想外なんだが」

「ふん、言っただろ幼女なんかじゃ無いって

長く生きていれば色々ある、だが、後でちゃんと聞くからな？  
お前には聞きたいことが山程有るんだ」

「へいへーい

んじゃーなデブ、今度からは人何か買おうとすんじゃねーぞ？」

「…ッ！…ッ！…ッ！！！」

デブが頷いてるを確認して、エヴァをダッコして外に向かって歩き出す、もう宿屋は開いてないだろ

となると、野宿か

野宿っていう現実泣きそうになりながらも、後ろで攻撃魔法を唱えてるバカなデブに炎刀・銃の切っ先を向ける

「……仏の顔も三度までってな」

「……殺す理由が無いとか言ってなかったか？」

「エヴァを拐ったので一度、変なの沢山けしかけてきたので一度でもって今のが最後の一度

それにな、殺す理由が無くても、生かす理由が無いだけだ」

「……どっちも私は同じだと思いがな」

「気にすんな、てか簡単に拐われてんじゃねえよ、ビックリするわ」

「う、…うるさいな、ただちょっと油断しただけだ！！！」

それに何だあの変なのは！

剣しか出せないんじゃないのか！？」

「あれは剣じゃなくて刀、日本刀なんだが

まいいや、明日話すから、もう寝るぞ」

「……どこで？」

「空いてる部屋くらいあんだろ？」

「うがー！！！！」

こんな所で寝れるか！！

野宿だ野宿！！」

「えー」

「えー、じゃない！

行くぞカイト！！！！」

「お、おい、引っ張んなよ」

ご機嫌を損ねたエヴァと一緒に森の中を突き進む、しかしエヴァが無事で良かった、もしかしたら手遅れな可能性も有ったからな

今度から気を付けよう

そんなこんなで、俺は今回の面倒事から逃げる事は出来なかったが、面倒事を解決する事は出来た

今度は、面倒事に巻き込まれない様にしようと思心に刻んでみたりした

ああ、果てしなく眠い

やるせねえなあ

## 風・林・火・山（後書き）

さて、色々突っ込みが来そうだな

「刀語を知ってる人知らない人両方から来そうだな W W W」

とりあえず、知ってる人に、断罪炎刀はアニメみた作者の勝手な解釈です、許してください!!!!

「でもって知らない人からは、日本刀じゃねえだろって突っ込みが来そうだな W W W」

それでもアレ等は日本刀なんです

それに、完成形は出したけど…完了はまだ出してないけど…アツチも一応刀だからね？  
出すよ？

「はあ、ま、良いんでないの W W W？

俺様は一向に構わん W W W」

そんなこんなで、質問には多分答えます

これにてあとがたりお終い



## 可愛いは正義らしいぞエヴァ（前書き）

まえがたり

実は、あとがたりにも物語があつたりする

「確か没ネタだよな？」

没ネタと言うか、カイトがエヴァと出会ったのが、エヴァが吸血鬼になったばかりのころだったから出来なかったんだよ

「まあ、生きてる時代が違うしな」

読み切りみたいな感じだな、西尾維新を知らない人には訳ワカメだから、適当に飛ばしてちょ

まあ、そんなこんなで始まります

## 可愛い正義らしいぞエヴァ

エヴァが連れ去られ事件から数週間後、唐突にエヴァが言い始めた事が有る

「微刀・釵、日和号を私によこせ」

「却下だアフォ、一昨日来やがれ」

それからそれから、またしてもまたしても、エヴァがよこせよこせ、俺が却下だ却下と言いつつこいから理由を聞いたなら

「……か、カッコ良かったから…」

「……………日和号は渡せない、あの日本刀にも歴史が有って、そう易々と俺意外の手に渡したくない

それでも、人形を使って戦いたいなら、俺が人形使いになる為の技術は教えるが

どうする?」

「……わかった」

「んじゃ明日からな、さ、寝るぞ」

「ん」

そんなエヴァに教えた技術が、まさかチャチャゼロイベントだと思わず普通に人形使いの技術を教えて数週間後

エヴァがチャチャゼロを操りながら出てきた時はマジで焦った、チャッ〇ー!?とか叫んだ覚えがある

いやしかし、問題はその後エヴァが盛大なデレを出した事だろう、それに比べれば、チャッ〇ーだろうがジェ〇ソソだろうがさしたる問題じゃない

「お、おいカイト、今暇か？」

「雲の形を見てて忙しいよ」

「そうか、暇か」

「いや、暇かと問われたら、世間一般的には俺は暇に見えるかもしれないけどな、だk」

「ほら」

「…ん?…なにこれ?」

エヴァがぶつきらぼうに押し付けてきたのは、赤いマフラーだった

………ただしメチャ長い

「ほ、ほら、この前寒いとか言ってただろ」

「すまん、まったく記憶に無い」

「言っただ」

「言っただのか」

「そこで、ま、まあ、お前に倒れられても困るからな、一応作った」

「作った?」

「——っ!ち、違うぞ!

カイトの聞き間違いだ!このマフラーは前の街で売ってた物だ!!」

「じゃあエヴァに教えた漢字で「正義」って書かれてるのは何でだ?」

「うぐっ、そ、それは……」

「それは？」

「う、うるさあああああい！！！！」

カイトは、黙って、着けてろ！！！！」

怒られ、その上で無理矢理エヴァにマフラーを何回も何回も巻かれてしまった

いや、しまったって表現は間違いか、別に着けるのは嫌じゃないしな、でもでも、まさかまさかのエヴァからプレゼントをもらうとはそんなこんなで、その日は新品のエヴァからのプレゼントを堪能しながら、魔女狩りから逃れる日々を送った

そんな事が有って、俺達の旅には、チャチャゼロと言うもう一人の仲間と、俺の首には赤いマフラーが装着された

「さて、何か魔女狩りウツゼーな、いや、魔女狩り事態はそこまでウザくないんだよ」

「急に何だ、魔女狩りがしつこいのは今に始まった事じゃないだろ」

「ケケケ、多分旦那ガウザイッテ言ッテルノハ2ツ名ジャネーカ？」

「そう！まさしくそれだ！！！」

俺毎回毎回言ってるよね？言ってるよね？

正義の味方だと言ってんじゃん！

いや、時たま「零崎を始めるぜ」とか言うけどさ」

「良いんじゃないか？私は好きだぞ？」

「ケケケ、確カニ旦那ニヤ正義ノ味方ヨリモコツチノガ似合ッテル  
ぜ」

「何処が！？似合ってるって具体的にはどこら辺がで御座いますの  
事ですかの事よ！！？」

「おい、何か変な言葉使いになってるぞ」

余りの仕打ちに頭を両手で抱えクネクネする、そんな俺をエヴァと  
チャチャゼロが何か暖かい目で見てる

いや、チャチャゼロは……暖かい目か？

ダメだ分からね、笑ってる様にしか見えねえ……いや、もしかして  
笑ってる？

俺が慌ててるの見て笑ってる？

いやさそんな酷い娘に育てた覚えは有りません、いやさまさか、そんな馬鹿な、もしかしてナチュラルで笑ってると言うのか!?

果てしなく戯言だな

「いやさー、エヴァー酷いんだぜチャチャゼロがよ、あんな二つ名が俺に似合ってるって言うんだぜ?」

「正義の味方よりは似合ってるんじゃないか?  
そもそもだ、何で正義の味方だなんて言ってるんだ、正義の魔法使いみたいで私は嫌いだぞ」

「あー、おいおいエヴァにゃん、おいおいおいエヴァにゃん、まさかだと思いつながら、だがしかしその可能性を否定できない現実に絶望しながらも聞くけどさ

あんななんちゃって正義を掲げる奴等と、俺の誇りある正義を一緒にしてないよな?」

「どっちも同じ正義だろ?

後、にゃんって何だにゃんって!?!?」

「どちらも同じ正義だと?

あっはっはっはっ、だめだめだ、ダメダメダメだ、丸で丸つきり丸々駄目丸だよエヴァにゃん

正義の味方の正義と、正義の魔法使いの正義は全全違うぞ

アイツ等、正義とか何とか言ってるけど、そもそも周りの正義に合わせたって、ろくな正義になる訳が無いんだ

どこぞの世界に、正義の味方を目指す少年が居たとする

その少年の正義が、今の正義の魔法使いの様に借り物の正義だった場合、少年はまず間違い無く後悔して、涙して、心折れ、幻想が砕け、過去の自分を殺そうとするだろう」

「いや、突発的すぎじゃないか？」

「ところがだ、この少年が、途中でその借り物の正義を、俺みたい

に自分自身のぶれる事の無い正義にした時は

そんな事は無いのさ」

「俺の正義は自分の信じる正義、アイツ等魔法使いの正義は、世間一般の正義で借り物の正義ってこった

にゃんってのは、ネコだな、エヴァにゃん、ネコミミ尻尾は正義」

かわいいは正義、きつと正義の味方のアイツもかわいいは正義に違いない



そう言えば、アイツ元気かなあ、元々この【無限の剣製】はアイツのだからなあ

ま、元気に決まってるか、戯言だったな

「意味の分からん事を言うな!!!!」

何だネコミミ尻尾は正義って、お前が言った正義はそんなのか!?!」

「正義なんて所詮そんなもんだよ（笑）」

「今マデノヤリ取りヲブツ壊シヤガッタナ」

「うがー!!!! 納得いかないぞ!」

「とにかく、俺はあの二つ名が嫌いだって話なんだよ」

「良いじゃないか、【極悪正義】」

「うぼおおあああ、や、止めろ、鳥肌がヤバい、くっそ、どこのこと  
いつが付けやがったんだよ

うあああ、寒気が止まない」

「ケケケ、ドウシタヨ極悪正義様ヨー」

「そうだぞ極悪正義様、何を身悶えしてるんだ極悪正義様」

「や、止めろオオオオオオオオオオ!!!!」

全身を駆け巡る寒気に腕を擦る、虫酸ダッシュ!!!!

そもそも、俺はそんなに人を殺してません、逃げる奴は追わないし、再度やってきた奴だって殆ど二度は見逃してるし

むしろ殺してるのはエヴァにゃんだ、ガンガンガツガツ殺してく、オマケに、普通にエヴァ強いんだけど、俺の勘違いだったんだけど  
うわっ恥ずかしッ、何かお前を守ってやるよ的な事を言ってなかった?

ヤベー、思い出したら恥ずかしくなってきた、くそっ、二つ名とのダブルアタックだと!?

戯言だなあ

「む、正義の魔法使いか?

おいカイト、奴等が来たぞ何時までいじけてるんだ」

「はあ、やるせねえなあ、全裸になろうかな、全裸だったら女性の魔法使いは逃げるよね?」

「んなっ！？ふざけるなカイト！そんな事は許さないぞ！！！」

「え、あはい、まさかエヴァにここまで怒られるとは思わなんだ

しかし、飽きもせずよくやるな、よし逃げるか」

「ハア、旦那ハ逃ゲテバツカリダナ？

オカゲテ人ヲ斬レナクテ斬レナクテ」

「何度も言うが、俺は殺人大好き変態さんじゃありません、そら逃げるぞ！！！」

エヴァとチャチャゼロを引っ付かんで魔力反応と反対の方向に逃げる

はあ、いい加減安定して暮らせる所無いかなあ、日本に逃げるって手もあるんだけど

日本って遠いよなあ、しかも船じゃまだ行けないし、飛んでくのはどこまでも辛いし

はあ、やるせねえ

## 可愛いは正義らしいぞエヴァ（後書き）

あとがたり

さあ、ちよつと始めます、時代は18世紀のロンドン、夜にエヴァとカイトが出会ったある人物の話

ゆっくりしていつてね☆

.....

ロンドンの街を、エヴァと二人っきりでデートする、電気が普及してきている故に、街を灯りが照らす

だけど、この灯りの未来を知ってる俺からしたらやっぱり暗い、でも、暗いのも嫌じゃない

「おい、何をボーっとしてるんだ、そろそろ散歩も終わるぞ？  
警備員に見つかったら面倒臭い」

「はあ、そこはデートって言おうぜ？」

「い、言える訳無いだろ……！」

「だろーなー」

エヴァもいつかナギかネギに惚れちゃうのかー、良いよなあアイツ等モテモテでよう、こちとら一生……いや何生か忘れたけど、人生  
|| 彼女いない歴だぞーあ

恐れいったかごるあ、何て思いながら、ふ、と街明かりの届かない  
路地裏を見てみると

ソコには全身を血に染めたバラバラな人だった物と、全身を血で化  
粧した深紅の子供が居た、その手には手術等で使うメス

こう言うのを何て言うんだ？ だっけ？ だろうか？ でしょうか？、い  
くら疑問を浮かべた所で、いくら動揺を沈めた所で、時間が止まる  
何て事は無い訳で

おい、誰だよまるで時が止まった様って言った奴、嘘じゃねえか

「おい、アレって巷で噂になってる……」

「だね、初めましてかな？」

ジャックさん、いや、女の子だからジャックじゃ無くてジルかな？  
八人目を殺した感想はどんな感じー？」

「……別に何も無いけど」

だるつと答えた少女は懷からメスを取りだし俺達に向かって投げてきた、俺は赤いナイフを取り出してメスを叩き落とす

まるで【俺】と出会った時の動揺など感じさせない動作で

「君の名前は何て言うのかな？」

「ジニー・r」

「あ、名字は知らない、名前が聞いたかっただけ」

そんな事を言いつつも、飛んでくるメスを叩き落とす、まるで普通に会話をするように、まるで日常のヒトコマの様に

俺は僅かに微笑んで、ジニーはしかめっ面で、でもどこか、安心出来る場所に帰ってきたかの様な、ユルい顔にしないように努力しながら

「そうか、そうか、そうか……」

俺の名前は【零崎】カイトと言っただけど

ジニー、君、家族にならないか？」

「んなっ!？」

「こ、告白!？」

何故かその後顔を真っ赤にさせたジニーとエヴァ二人に殺されかけた

……何故だ

**その昔ライト兄弟は言った、敵前逃亡テラ最高と（前書き）**

今回は内容が薄い、誠に申し訳ない

「まあ、ネタが無いんだからしょうがないんじゃないのWWW」

やはり、出したい刀剣は無数に有るから、基本的にほのぼの系目指してるのに戦闘ばっかりが思い浮かぶのはダメだと思う

「作者メシウマWWW」

お前、想像主たる作者にかけれ言葉がそれかよ

「俺様を縛る事は

画面の向こうだろうが、一次元〜百八次元の間だろうが、不可能D  
A☆ZE」

あつそ、ま、こんな戯言読者は興味無いだろ

本編はじめるよ〜



## その昔ライト兄弟は言った、敵前逃亡テラ最高と

エヴァと出会ってから五年、人外にとっては一瞬かもしれないけど、俺みたいな人間にとっては凄く長い時間が過ぎた

「で、大事なお金を落としたと?」

「……落としたんじゃない、いつの間にか無くなってたんだ」

「ケケケ、確力菓子ヲ買ッテナカツ」

「だ、黙れチャチャゼロ!!」

「エヴウアアアアアアア?」

「う、いや、つい出来心でな、まあ気にするな」

「何が気にするんだよ…」

何か? アイツに金を貰いに戻ってか? 恥ずかしくて出来るかよ」

アイツ、この五年でようやく出会った俺達異端の安息の場所、とある小国の王様

俺達みたいな異端、人に危害を加えようとしない異端を保護する国  
その王様とちよっと仲良くなったついでに、懷事情により協力を要

請した所、快く手助けをしてくれた……んだが

「はあ、この街で地道に金稼ぐか」

「うむ、では私はそこで紅茶を飲んで」

「エヴァ？」

「え、ええええい！

分かった、私も稼げば良いんだろう……！！」

と、言われても実はエヴァはやる事が無い、エヴァが出来るのは編み物か人形を操る事、これじゃ速やかにお金を稼げない

「てな訳で、俺達は今から大道芸人みたいなのだ」

「ミタイナノカヨ」

「俺が適当に芸をして、でもってお金を頂く良いな？」

「なにを言ってる、そんな簡単にいく訳ないだろ」

「大丈夫、こう言う時は、大金持ちが俺の芸に感激していくらかくれる筈だ

フッフッフッ、完璧な作戦だな、これならカルシウムだって取れるかもしれない」

「イヤ、取レネーダロ」

なんか言ってるチャチャゼロを無視して、今まさに机の下から出したかの様に、剣を作り取り出す

ネヴァン

見た目はギターだが、その実態は悪魔の力、雷コウモリの悪魔の力を秘めている

今回は別に悪魔の力は使わないで、ギターとして使うから、被害は出ない

「よし、やるか」

「……………大丈夫なのか？」

「……………そりゃどう言う意味？」

「ケケケ、マア旦那が出シタ物ヲ心配スルナツテノガ無理ダヨナ」



その歌は、ダイナマイトダイナマイトしか言わないが、俺の胸に熱い何かを残してくれた

いや、ダイナマイトを歌う訳じゃ無いんだけどな

歌う歌は、日本人として、エレキギターを最大限に活用出来る歌

撫子ロック、凜として咲く花の如く

「爪先であやす月の兎は踊り  
星の間を飛び回る  
口笛吹き

飛沫 あがる  
わたし 駆ける  
追いかける星は  
廻る 廻る 小さなツボミ

咲いて 咲いて 月にお願  
い  
穏やかな影に薄化粧

知らず知らず えいやと投げた  
ツボミは 行方知れず のまま」

そのまま歌い続け、歌い終る、と同時に歓声が響き渡る、聴いていた人達からお金を貰った後、エヴァの元に行く

満面の笑みで

「んで、なんか言うことは？」

「む？言うこと…か…」

「…ケケケ、ンナ物決マッテンダロ」

「散々人の事殺人鬼みたいに言いやがって  
こんな事、エヴァ達じゃ出来ないだろ？」

「そうだな、言うことは」

「後ろをってみろ」

「後ろヲ見テミ」

「……………なに？」

後ろをしてみると、そこには右手に杖を持った男が一人、紅茶を飲んでる俺達に震える指を指している

なにかな？サインならお断りだけど

そもそも、俺はサインなんか書いた事無いんだよね、キュキュキュツと軽快に何人も何人も書いてる人、書いてる人は指とか手とか痛くないのかね

ただ立ってるのも辛いけど、何時までも座ってるのも辛いんだよね、だって言うのにサイン会とかだとずっとサイン書いて

人は束縛されたり制限されるのを嫌い、とてつもなくストレスが溜まる生物なのに凄いなあと、俺は思った事が有るんだよね

………戯言だよなあ

「闇の福音と極悪正義だああああ！！！」

「極悪正義って言うんじゃないやめええええええええええ！！！」

「……ふう、確かに私には自分から目立って見付かる何て真似は出来ないな

て言うか、したくない」

「ケケケ、楽シクナッテキタナ」

あつと言う間に魔法使い達が集まってきて、俺達に杖を向けてくる  
ちなみに、杖にもいろんな物があつて、良い杖何かはそれなりのお  
値段らしい、それなりのお値段って何だよ

戯言だな

「やるせねえなあ

逃げるぞエヴァ、チャチャゼロ」

「セツカク楽シクナツテキタノニ、逃ゲルノカヨ」

「当たり前だ、俺は白いハトみたいな平和主義者なんだから」

「はあ、どうして私はこんな奴の事を…」

「おい、なに言ってるんだ逃げるぞ？」

「分かっている!!!」

街から魔法使い達が集まってくる前に、城壁をぶっ壊して外に逃げる  
何て言うか、城壁すまんかった、でも多分城門はもう閉まっちゃっ  
てるから、これしか方法は無いから仕方ない



異端狩りお疲れ様です

とか、居ってきてる魔法使い達にネヴァンの雷と雷蝙蝠を飛ばしながら考えてみる

毎回毎回しつこく居ってきて、本当にやるせねえ

**その昔ライト兄弟は言った、敵前逃亡テラ最高と（後書き）**

って訳で出ました新しい刀剣

その名もネヴァン

アレは剣に分類されるから当然無限の剣製に入ってるよ

「ネヴァンが入ってるって事は、デビルメイクライの世界に行った事が有るってこったな」

だな、作者はデビルメイクライ好きだからな、多分その内デビルトリガー発動とかあるんじゃないかな

まあ、そんな感じであとがたり  
お終まい

## エヴァは負けず嫌い（前書き）

やっときさ、ほのぼのらしいほのぼの来た、これで勝つる

「まさか感想来るとはな、やはり俺様を見に来てると言う認識で間違っ  
て無さそうだなwww」

間違いまくってるよ、さてさて、ついにほのぼのだ、読者の求めた  
ほのぼのとは違うかも知れないが

そんなこんなでまえがたりはお終い

## エヴァは負けず嫌い

エヴァと出会ってから、実に八年の月日がたった

つい最近まではエヴァとチャチャゼロと旅をしていたが、流石に八年近くも暴れ回っていては身動きが取れなくなる、いや暴れ回っている覚えは無いんだけど

なーんか、正義の魔法使いが魔法で壊したり燃やしたりした物、それ全部俺等がやった事になってるらしい

俺等はそんな事してたのか、知らなかったなあ

じゃねえよ、いつ俺等がそんな事をしたんだよごるあ、あんま濡れ衣着せてつと零崎を始めるぞ？

でも、今の俺は、今の俺ほど、今の俺だから、そう簡単に動いて周りの奴等に追われる訳にはいかない

信じらんねえ事に、今の時代の寿命は極端に短い、30生きたらジイさんだそうだ

その中で、既に歳食ってる俺が、更に八年も歳をとった、俺も充分ジイさんらしい、転生したお陰か知らないが、ジイさんでも体は未だに若い、前みたいに暴れまわれないけど

今も昔もこれからも、俺の目的は厄介事から逃げる事だから、暴れ

られなくても問題無いんだけど

そんな感じで、ジイさんになったらしい俺は、異端な国にてエヴァ  
やチャチャゼロと一緒に暮らしてる

今、幸せだなあなんて、満月を見ながら思考する

「何て言うか、短命短命たまんねえって感じだな」

「何が短命だ、一体何年生きてるか知らないが、まだまだ元気そう  
じゃないかカイト」

「運動トシテ一戦殺ルカ？」

「嫌だよ、なに普通に言ってるんだ、お前の一戦って試合じゃなくて  
死合じゃねえかよ」

「どうでも良いが、退屈だな、こう退屈だと折角の満月だと言うの  
に眠ってしまいそうだ」

「……だったら囲碁でもやるか？」

「囲碁？」

「日本の遊びだ、やってみようぜ」

「ほう、どんな遊びだ？」

「ま、やりながら説明するよ」

やるなら先ずは基石か、石ころを弄くって印でも付けるか？

だとしたら石ころ拾うか、暇潰しだしそんな本格的じゃなくて良いだろ

☆一時間後

「ええい！！！！もう一度だもう一度！！！！こんな結果が認められるか！！！！」

「あー、エヴァ？、俺はもう眠いんだが、それにな？  
いつまでも起きてちゃロウソクが勿体ないだろーが」

「私は眠くないぞ、それに、夜は長いんだこれからだ、これからが私の本領発揮だ」

「いや、エヴァが本領を発揮していくと同時に俺の眠気がマッハ何だが

それにロウソク勿体ない言ってるだろーが」

碁石代わりの石を即席の碁盤から回収しながらエヴァの頭を撫でる、何回もやってるが、未だにエヴァは勝ててない

ぶっちゃけだんだん強くなってからその内俺も負けそうだ

「ロウソク何ていらん！魔法が有るだろうが魔法が！！！！  
さあ！もう一戦だ！！！」

「御愁傷様ダナ」

「はあ、もう一戦だけな？」

このままズルズルと続くのも嫌だからな、適当に負けるか、エヴァも勝ったら満足するだろ

碁石（仮）を手の中でじゃらじゃしながらエヴァに先攻を譲る

☆数十分後

碁盤には何度調べて見てもエヴァの勝利を飾る碁石が置いてある

「いやー、エヴァ強くなったじゃん、負けちったよ、まさかあんな手を打つとはな

さて、俺はそろそろ良い時間だし、眠ろうかな」

「手…減……………てす……………」

「え？」

「見栄好いたあああ……………」

「ちょ、エヴァ？」

「手加減なんてするなああああああああああ……………」

「うおおおう！？もしかしてバレてた？」

「お前は手加減が下手なんだ……………！！  
次は絶対に真剣に来い！全力で来い！

いいな？変な手加減とかいらなからな？」



「あー、後一戦だけって話じゃ」

「手加減したんだから無しに決まってるだろ!!!」

「うぼあ、分かった、分かったよマジメにやりゃ良いんだろ？」

ただし、今度こそ最後の戦だからな？」

「ふん、最後は華々しく私の勝利で飾って見せる!!!!」

### ☆数分後

「うつ…くつ……ツ……!!」

「…あの、エヴァ？」

俺が悪かった、頼む泣かないでください、いや、泣かないでお願いします」

「な、いつ、…泣いてなんか、ツ、無い!……」

「ケケケ、フルボッコダッタナ」

「ふ、ふえ…」

「ちょ!?! チャチャゼロ!?!」

お前は何を追い討ちかけてんだよ!?!」

真っ白に染まった碁盤を横に置き、手に持っていた使われる事の無くなったエヴァの碁石を横に捨て、涙目で服の端を握ってるエヴァを慰める

なんと言おうか、胸に感じる弱々しく叩く力が何とも言えない、これ俺眠れるのかなあ

「エヴァ、落ち着いたか？」

「……………」

「…………エヴァ？」

「…………大丈夫だ」

「ラブラブダナオ二人サン」

「な、ななあ！！何を言ってるチャチャゼロ！！！！  
恥ずかしいだろうが！！！！」

「がふっ、ごふっ、あの、ぐはっ、照れ隠しに殴らないで、げほおあ、人間の俺としては非常に痛いから」

エヴァがある程度落ち着いた後にエヴァをベッド運ぶ、エヴァと一

緒の部屋をこの国のトップ、アイツが用意したから一緒の部屋で眠ってる

だが、流石に一緒の布団は不味いだろうと、ベッドは2つ用意させた時たま、エヴァが布団の中に居たり、自分以外の誰かが居たような暖かさが布団に残ってたりするが、多分寝ぼけて入ったか、一人で寝るのが寂しくなったんだと俺は思う

「さて、そろそろ寝るぞ？」

「……ん、そうだな」

「……そうだな、寝るぞエヴァ？」

「ああ、寝るなカイト」

「……………」

「……………」

「……なあエヴァ？」

この手を放してくれないと、俺は自分のベッドに行けないんだが？」

「……っ！……すー、はー、すー、はー」

「……何深呼吸してんの？」

「う、うるさいな！少し待て！！！」

ふうう、……手、手が悴んで（かじかんで）放れない」

「……いや、そこまで外寒かったか？」

確かに夜だから寒いが、流石にエヴァの手が悴む程寒くは無い筈だ、何てったってエヴァは氷魔法を使うから耐性やら何やらが有りそう  
な気がするんだが、

オマケとばかりに、ついさっきまでその手で俺の事を殴ってませんでしたか？

「さ、寒かったんだ

わ、私としてもなんとかしたいが、悴んでしまったんだから仕方ない、し、仕方ないから私のベッドで寝ても良いぞ」

「…普通に俺がエヴァの手を放せば」

「触ったら殺す」

「ええ！？」

今まで顔を真っ赤にさせてたのに、急に睨んできた、心なしか俺の服を握ってる手の力が強くなった気がする

そして心なしか、空いていた筈の手が俺のマフラーを握った様な気がするんだが

あれ？おかしい、おかしいな？

俺って触れられたく無い程に嫌われてるの、いやいや、多分そりゃ無いだろ、たかが八年されど八年、嫌いな奴と八年も居られねえよ

んじゃ何でだ？

「旦那、大変ダナ、大変スギテ多分城ノ連中ニ恨マレルゼ、ケケケ」

「いや待てい、意味が分からないんだが何で俺が城の連中に恨まれねばならん」

「マア、手が放レナイッテンナラ手ヲ貸ソウカ？」

「チャチャゼロ!？」

「マジか、それはありがたいんだが、なんでエヴァは驚愕してるんだ」

エヴァがチャチャゼロの言葉に驚愕して目を見開く、その時、一瞬手を放した後に思い出した様にもう一度握ったのは気のせいだろうかエヴァ？

「ンジャ早速、ズタズタニ切ッテヤルヨ」

「なんで!!?」

「服ガ切レタラ解放サレルゼ?」

「嫌だよ! 断固として拒否権を使うよ!」

「ダツタラ一緒ニ寝ルシカネエナ」

「……ふう」

「で、何でエヴァは安心してんだ?」

「な!?!、安心なんかしてない!!!」

とにかく! 離れられなんだから仕方ない! 一緒に寝るか、氷付けになるか! どっちか選べ!」

それは……実質一つなのは、とか思っても事実一つな訳で

エヴァとチャチャゼロと川の字になって寝た、疑問だったのが

エヴァの手の力が弱まっても離れようとするともた力が強くなる事  
と、チャチャゼロが俺の隣に来た事だったりする

それにしても眠い、今日はもう寝るとしよう

## エヴァは負けず嫌い（後書き）

書いた書いた、後はいくらかほのぼの書いた後に次のステップに進むか

「いくらかねえ、次のステップに今すぐにも行きたいくせにW W」

しょうがないさ、ぶっちゃけヒロインはエヴァだけじゃないんだから、でも今はエヴァがオンリーヒロイン、エヴァ主人公一人占め

「他にヒロインは誰が居るんだ？

良ければ俺様に言ってごらんW W W大丈夫、痛くないからW W W」

痛い訳ないだろ、痛いってどんな状態だよ

ヒロインはいっぱいだよ、ハーレムハーレムウ

「そんなエヴァ違いの次回予告のサービスサービスウみたいに言われてもW W W」

まあ、あとがたりはお終い



そんな感じで次回もよろしく

ハーレムハーレムウ



てますよ

次に、回斗君の年齢ですが

転生した時は21歳、それから八年だから29歳、間違い無くお祖父さんです

昔、12世紀は極端に寿命が短いから、ここまで生きていて、さらにピンピンしてるんだから化物（誉め言葉）ですね

エヴァも心のどっかでカイトってもしかして自分と同じ不死者じゃないか？とか思ってます

それでは最後に

感想をけしてしまい、誠に申し訳ない

とてもー、とてもー、まあお風呂だな（前書き）

一から百まで数えるエヴァを想像したら鼻血、もしくは忠誠心が溢れた

「いーち、にー、さーんってかWWW?

精々頑張って更新するが良いさWWW」

てか、12世紀頃って絶望だよな、何もねえ

「まあ、何も無いってのが有るだろう？

現代よりかはフリーダムだよWWW」

だろうけどさ、そんなこんなで  
まえがたりお終い

ほのぼのー

とてもー、とてもー、まあお風呂だな

事の始まりは、そう：俺が現状に我慢できず、有る物を手掛けた事だ、その時はまだ、あんな事件になるなんて、思わなかったんだ

（Kさんの証言です）

☆

地図に記され無い位周りに嫌われた王国、されど、歴史に記され無い位嫌われた者達にとっては、楽園とも言える場所だ

だが、だかしかし、否、駄菓子菓子

この俺、零崎回斗には、この王国だけじゃなく、この世界そのものが、あらゆる意味で生き辛い

何より、達筆すべき点と言えば

「なぜ、風呂に入るといふ習慣が無いんだ、と言うか風呂その物が無いじゃないか」

「何をいきなり言ってるんだ？  
そもそもフロとは何だ？」

「やはり、ここはあれをやるしか無いか？」

「おい、そのバカ、聞いているのか？  
おい！？」

「よし、そうと決まれば即決即断即答！

ちよつとアイツの所に行ってくるわ」

「あ、おい！待て！！！」

部屋を飛び出しアイツの元へ向かう、なんとも嬉しい事に我が部屋は、アイツの計らいでアイツが住んでる城に有る

時たま、部屋を物色した痕跡（俺のみ、しかも下手な隠しかた）が有ったり、誰かに覗かれている様な気配がしたり（たまたま通りかかったアイツに聞いても誰も居ないと言う）

多分メイドさんとかだと思い、アイツに相談しても顔を赤らめてわたわたするのみでまるで解決しない

それでも、アイツはこの王国の王様、俺が風呂を作る事くらい許し

てくれる筈だ、何でか知らんが、アイツは俺達に優しいからな

「つと、ついたついた、クラウチングスタート用意」

「……あの？カイト殿？何をしているのか私に教えてくれませんか？」

王様への部屋を前に、デカイ扉に向かってクラウチングスタートのポーズを取った所、兵士に止められてしまった

仕方なくクラウチングスタートポーズを止めて、兵士との戯言に移る

「よう、ちよいとその王様の部屋への扉を飛び蹴りで開けようと思っ  
てな」

「何でそんな事を！！？扉なら私達が開けますよ！！！」

「いや、わざわざお前等の手間を取らせるまでもない、何でかと問  
われたら、あの扉大きいじゃん？」

重いから蹴りで開けると他の開け方より楽なんだよ、………後、…  
…あの扉って蹴りで入りたくなる」

「何ボソツととんでも無いことを言ってるんですか！」

それに今までにやった事が有る的な事を言いませんでしたか!？」

「許してくれたぜ？」

「そう言う問題じゃ有りませんよ？」

とにかく、扉は普通に開けてください」

「分かった」

兵士が見張っている為、仕方なく普通に入る、部屋の中には王様が座ってそうな椅子に座ってる王様と、その王様と話をしている執事爺が居た

いつも通り俺を見つけたアイツが小さな手をブンブンと振ってくる、挨拶は基本だと思い俺も手を振り返す、でも執事爺に手がぶつかって痛そうだ

まあ戯言だな、本題に入るか

「穴掘って良いか？」

「良いよ」

「お待ちくだされお二方アアアアアアアアアア!!!」



執事爺の絶叫を隣で聞いていたアイツがコテン、と横に倒れる、倒れたアイツの元に歩いて行き、起こして執事爺に問いかける

「えっと、どうした執事爺？」

「どうしたではございません、何なんですか穴を掘るって、全くもって意味が分かりません

カイト殿は今度は何をしでかすつもりですか？」

「何って、だから穴を掘るんだよ」

「説明不足です、それに王様？」

アナタはどうして何も聞かずに許可など出してるのですか…」

「だって、カイトが今まで言ってきた事は効果は証明されてるじゃないか」

効果、効果ねえ？

今までにやってきた事を思い出す、どれもこれも、未来を知ってる俺からしたら当たり前で当然の事だが、今の時代じゃ画期的で革命的な事だったらしい

だがしかし、執事爺の言い分は分かる、あの執事爺はこの平和な国で、平和を保つ為に色々やってる執事だ、王様も執事爺の事は信用している

まあ、そんな執事爺はガンコだから、ガンコに説明しないといけないな、お風呂の素晴らしさについて

☆ガンコに説明中

「なるほど、それは確かに画期的ですね、ねえ王様……………王様？」

「だ、男女、男女に、男女に別れる…」

「……………なあ執事爺、コイツ大丈夫か？」

「…ふむ、なるほど、少々お時間を」

壊れたビデオみたいに、同じ事を何度も何度も言うアイツに執事爺は一言、二言言うと、アイツと一緒に内緒話を始める

……俺置いてけぼりなんだけど

しばらくした後、何か決意した様な顔で質問してきた

「か、カイト、男女に別れるって言ったけど……もしかして、男は男と一緒に入るって事だよね？」

「それ以外無いだろ」

「よし！……カイトは……ボク……女じゃ……男だと思っ……」

これで勝てる！！！！」

「安心してください王様、この爺や、何人たりとも邪魔者は出しませぬ」

「……今一訳が分からんが、風呂作っても良いんだよね？」

「勿論だよ！」

何かやる気をだしてるアイツをほっというて、エヴァの元に帰る事にする

## ☆数日後

風呂を作り初めてから時間がたったが、確かに出来上がった、本来ならもっと時間がかかるんだろうが、素敵な事に魔法と言う万能な物が存在する

地面を抉り、石を敷き詰め、水を張り、お湯に変える、まあこれ以外にも色々様々有るんだけど一々説明する気にもなれない

しかし、あれから時間はかかったが、確かに風呂は出来上がった

その場所は魔法を最大限に利用して、天然の露天風呂と化している、一番苦労したのはこの風呂と言うシステムを説明する時だ

女性に……実演しなくて良かったと心の底から考えられる、とりあえず一番風呂をエヴァに入ってもらった所

「まさか逆上せるとはな、てか俺が言ったみたいに百まで数えるのは良いんだけどさ、限度を守ろうぜ？」

そんな状態になるまで入る物じゃないぞ風呂は」

「うあー、それを…先に…言ええ」

「ケケケ、真ッ赤ッ赤ダナ、風呂トカニ入り続ケタカラカ？  
ソレトモ旦那ニ、才姫様ダッコサレテルカラカ？」

「だあ、だまれちゃちゃぜろおお」

「ケケケ、本当ニ元氣無イナ、旦那今ナラ手込メニ出来ルゼ？」

いややらねえよ、と呟いてエヴァを部屋に運ぶ、しかししかし、エヴァは逆上せたが、このエヴァから立ち上るお手製シャンプーやらの匂いは成功だと言って良い

……一瞬エヴァの匂いを嗅いでる自分が変態に思えたが、多分気のせいだ、筈だ、だと良いんだけど

とにかく、今日は俺も入るかな、今日はエヴァと俺でゆっくりして下さいと皆に言われたからな

「じゃ、俺は行くからな？」

ベッドで静かにしてろよ、お腹を冷やすと風邪になるからちゃんと被ってな」

「い、いくなぁー、頭がもやもやするー、私を一人にしゆるんじやないいゝ」

「甘えん坊かよ……、こんなエヴァ初めて見たぞ」

流星にほつといて、意識が覚醒した後、怒られたら困るからベッドに寝てるエヴァの横に腰かける

エヴァのベッドに腰かける事数秒、寝息が聞こえて来たから今度こそ風呂に向かう

「エヴァお願いな、チャチャゼロ？」

「マカセロ、ドンナ奴ガ来テモ大丈夫ダゼ」

「ソイツは安心、行ってくる」

やっとこさ部屋から出た俺は風呂に向かい、そして、一枚一枚服を脱ぐ

その全くもってサービス精神溢れない場所に、俺以外の影が現れた

「お、おお！おはよう！！！」

「……………今の時間帯は今晚わが正しいんだが、まあ良いか、何でっ  
たってここに居るんだ？」

王様？」

目の前に現れたのは、バスタオルを巻いた王様の姿だった、その姿  
とバスタオルがあっていて、妙に抱き締めたくなる

王様、本名不明、本名を知る者は王様本人と、今は亡き女王様と元  
国王しかいない、つまり王様の両親しか知り得なかった事

何でも、結婚する相手以外名前を名乗ってはダメらしい、面倒臭い  
習わしだなあとも思っても口にしないのが優しさ

「い、いや、その、ああもう、大丈夫、大丈夫だよ、自分を信じて」

「……………あの、忙しいなら俺風呂に入りたいんだけど？」

「ま、まって!!!」

えっと、…………い、っしょに、お風呂に入ら…ない？」

「風呂に？」

問いかける俺に、みよーにもじもじした王様が答える

「うん、ほら、お風呂って皆で入ったりするんだよね？」

だ、だから!!!

…一緒に入りませんか!!!？」

「え、嫌だ」

「…………ふえ？」

…………ふええええええええ!!!？」

何で!?!? 何でえ!!!？」

何でか知らんが慌てる王様を見つめる、コイツは一体何がしたかつ



たんだ？

この

可愛くて

思わず抱き締めたくなる

真っ白いバスタオルがよく似合う

コイツは

「だってお前さ

羊じゃん」

「……ふええ？」

「いや、流石に風呂に体を洗いに来たのに、また毛で汚したく無いしさ」

「ふえ……え、あ…！」

王に角と尻尾が生えて

【羊】

理由なんぞは知らないが、この王国の王族は呪いだか何だかで、全員羊になってしまったらしい

書く言う目の前のコイツも、デフォルメされた羊みたいな感じにな  
ってる

だが顔はデフォルメされた人間の顔、何かスカカードのキャラみた  
いだな

うん見れば見るほど、可愛らしく、抱き締めたくなり、真っ白いバ  
スタオルが真っ白い毛によく似合う

「一年周期で人の体に戻るんだろ？」

そんな時と一緒に入ってやるよ、じゃーな」

「え、あ!？」

王様を脱衣場に置いて風呂に入る

いい湯だったな、ハハハ

170

とてもー、とてもー、まあお風呂だな（後書き）

あとがたりなんだが

皆さんの王様についてね反応が怖い

「安心しろ、これを見てる奴はきっと、素敵で不敵な紳士達ばかりだよwww」

ま、不安がってもしようがないしね、戯言でも言う？

「デモンズソウルのマンガに吹いたwww」

まあ、確かにやってる人である俺は吹いたが、何故に今？

「俺様は開始五分、チュートリアルで死んだ男だwww

ぷぎゃーwww、タコがwwwタコが怖いwww、チリンチリン聞こえると恐怖www」

頑張れ、きっと誰かが応援してる

まあ、そんなこんなで  
あとがたり、お終い

## 人の底力は常識を覆す（前書き）

さて更新が遅くなりましたー

「死ねば良いのになWWW」

なんでそんな嬉しそうに言うかな？

「ひゃっはー！もうすぐ俺様の出番だぜひゃっはーWWW」

ああ、うんそれでか

と言うか、一言ありがとうございます

励みにさせてもらってます

「俺様の出身地もとい初登場場所バレタナーWWW」

やめろ、あれは作者の黒歴史だ、今一自分でも何を書きたかったのかが分からないから、修正すらままならない黒歴史だ

「だったら消せば良いんじゃないWWW？」

いやあ、見てる人も居るだろう、それはなあ、どう思いますか魔王様

「本編始まるズエアWWW」

ちよ、おr

## 人の底力は常識を覆す

三日月が笑う夜

一人の漆黒が闇夜を味方に付けて屋根を跳ぶ、その姿を見かける者は居らず、その姿を知覚できる者も居ない

その漆黒が屋根を跳んだ翌朝、とある家で、絹を裂く様な悲鳴が平和な国に響き渡った

エヴァとチャチャゼロと一緒に寛いでいる所に、割りとしかめっ面な執事爺いがやって来て、最近この国で起こっている事件に協力して欲しいと言われた

最近この国で起こってる事件と言えば、あれ以外無い、人を人とも思わない様な残虐な事件

頭の中で事件を整理しながら執事爺と共に、王様の元に向かう

「たしか、連続密室殺人だっけ、凶器は刃物だと思われていて、全員が全員夜明け前に殺害されている

達筆すべきは、被害者の首から上が全員無くなっていた事

本当に、やな事件だよな……」

「いえ、その様な事件は一度も起こってませんが？」

「何だって？」

おかしいな、暇潰しに考えてた時に来たからフラグだと思ったのに  
現実になんかのは無いって事だね」

「とにかく、速めに解決しなければなりません

実は、公には言えませんが、王様も被害にあったようなのです」

「なに？アイツがか？」

私としてはどうでも良いが、大丈夫なのか？」

「はい、相手は物取りですから、直接の被害はございません」

物取り、物取りか、物取りって言ってもピンからキリまで居るから



な、だけど、本来なら客人に位置する俺達を出すって事は

相手がそれだけの相手って事かな？

ルパン三世みたいに、絶対に盗れない様な物を盗んで行ったのかな？

例えば貴方の心とか

「う、……うう……あ、カイト……」

「おい、私も居るぞ」

「まあまあ、それで？」

俺は噂に疎いって訳じゃない……と思ってたけど、どうやら疎いみたいだな

一体、何を盗まれたんだ？」

「……え？……えっと、それは……」

なかなか言い出さないで、ベッドに座り込んでる王様の元にエヴァが行き、背中を撫でる

王様はしばらく説明出来なさそうだと判断して、横に立ってる執事爺に説明を要求する

「で、全体何を盗まれたんだ？」

「パンツでございます」

「そうかパンツか……？……パンツ？」

「パンツでございます」

パンツ、人が生み出した人類の英知、「パンツはいいね、人類が生み出した英知だよ」と言う言葉があるくらいだ

その三角に秘められた魔性の魔力に誘われ、並み居る男達は階段の下にスタンバると言う

そのパンツを盗む者

うん間違い無い、変態だ

「何でも、王様のお気に入りパンツを盗んだらしいのですがその事がどうにも不可解で……」

「不可解？」

「ええ、噂に間違いが無いならば、タンスの中身、一つ残らずパンツは盗まれる筈なのですが」

「……一夜の内に？」

「はい」

変態じゃない、大変態だった

「ふ、ふふ……ふふふふふ……」

「え、エヴァ？」

何でそんな私黒幕です的な笑い方してんの？」

「盗人狩りだあああ！……！」

「……………う？」

「何をしてるカイト！！速く準備をしろ、それとパンツを買うぞ！」

「え？、ちょっ、意味が」

激怒したエヴァに半ば引きずられ、部屋に戻った後、準備をして街

の方に泊まりに行った

いや、意味が分からないんだが

エヴァに引きずられて街に泊まる事2週間、未だに怪盗パンツ（仮）は現れない

エヴァが怪盗パンツ（仮）を捕らえる作戦は、自分をエサにする事だった

だけど、自分が着たパンツは一瞬でも触れられたく無いらしく、タンスの中身のパンツは全て新品

自分が着るパンツは、いちいち魔法で消してるそうだが、なんと勿体無い

しかし不可解な点が浮かび上がった、怪盗パンツ（仮）は、なんでも女性のパンツしか狙わないらしい

「それじゃー、何で王様のパンツは狙われたんだ？  
それに、盗まれたパンツが一枚だけとは」

「何を言ってる、ほら、お前の番だぞ」

「はいはい、エヴァも諦めないね、はい、エヴァの碁石貰うね」

「うー、があー、またか！！！」

「さて、一度言ってみたかったんだよな」

「なにをだ？」

「エヴァ、エヴァが弱いんじゃない、俺が強いのだ」

「う、ぬ、……碁石をくらえ！！！」

「痛っ、ちょ！投げんな！！碁石は投げる物じゃありません！！！！」

「知るか！！！！」

「平和ダナー」

涙目で盤上に乗ってる碁石をグシャグシャにかき混ぜるエヴァを止める、これじゃ元に戻すのは無理だな

机に置いてある紅茶を飲みながら寛ぐ、しかし泥棒か、最近戦闘なんか無かったし、俺も老いてきたからな、戦闘は無いと嬉しいけど

「……今夜だ」

「は？」

「今夜奴は動く筈だ、準備しておけカイト」

「何で今夜来るって分かるんだよ？」

浮かび上がり、無数のコウモリを椅子に変え、足を組んで髪を掻き上げ、腕を組んでえらく自信満々なエヴァに問いかける

それに準備と言われても、俺は刀剣を設備する必要は無いし、そもそも戦闘になるとは限らないし

あそこで一生懸命ナイフを研いでるチャチャゼロは見なかった事にしよう

「勘だ」

「なるほど、勘か……いや、勘かよ？」

「私の女の勘が言っている、今夜ヤツは動く」

「……………そうか、所でエヴァ」

「何だ？」

目の前に浮遊してるエヴァの腰辺りを指差す、行動の意味が分からないらしいエヴァが小首を傾げる

そんな、何も分かってないエヴァに教えて上げる、俺的にはもう少し見てたいけど

「パンツ見えてる」

「うみゃう！！？」

な、なな、ん、なにっ！！？」

「まさか、エヴァのパンツが白でリボンが結んで」

「忘れろおおおお！！！」

目を覚ました時は既に夜だった、さらに詳しく現状を理解するなら  
ここは宿屋のベッドの中で、隣には顔を真っ赤にさせて目を瞑って  
るエヴァが居る

ぐるぐる先生はまだですか

「何してんだ？」

「え？、…う…うわあああああああああああ！！？」

声をかけた途端、布団を巻き込み物凄い速さで俺から逃げて行った  
ひ、悲鳴を上げる程ってどんだけ？



一瞬エヴァに抱き着きそうになったのを、寝起きの頭で無理矢理抑えた俺って誉められても良いよね？

こんなに可愛いのに、将来ナギに惚れて、その後はネギ君に惚れるのかな？

はあ、泣きたくなってきた

「い、何時から起きてた!？」

「ついさっき起きたんだけど、なんで俺はエヴァと一緒に寝てたんだ？」

「なな、何もしてないぞ!？」

「……………」

「だから、何もしてないんだ!!!」

「そ、そっか何だか分かんないが分かった」

「ふう、……分ければ良いんだ」

「ケケケ、モウ一回S」

「チャチャゼロオオオオオ!?!？」

チャチャゼロを振り回してるエヴァと、振り回されながらもケケケ笑ってるチャチャゼロを見て、平和だなあ

とか、思っ、いたら

「ッ！そこっ！！！」

「むっ！？……気付かれたか」

暗闇に、魔力の揺らぎを感じてソコを殴れば、その暗闇から全身黒タイツの漆黒が現れる

全身黒タイツってどんだけ大変態なんだよ、間違いない変態だ、どうしようもなく変態だ

「チッ、まさか揺さぶりをかけてくるとはな」

「揺さぶり？……今一意味が分かんないけど、お前が巷で噂の変態、怪盗パンツ（仮）だな？」

「ふっ、いかにも、俺が怪盗パンツだ」

寝起きで何とも言えなくなったと思われる口内のよだれを飲み込み、口元のよだれを拭く

隣のエヴァもゴクリ、とよだれを飲み込んだ後、丁寧に口元のよだれをなめとった

なんか、無駄にえっちいですねエヴァさん

「くっ！、互いを共有し、さらにそれを見せ付けるとは

貴様等 あゝあゝあゝ！！！！

さては新婚だな！！？」

「し、新婚！？」

「ケケツケ、ケケケケケ」

「ダメだ、意味が分からなすぎて頭痛が痛い

何で俺とエヴァが夫婦なんだよ、共有って何だよ」

「白々しい、今さっきその娘とk」

「わあああああああ！！にやあああああああ！！！

リク・ラク ラ・ラック ライラック！！！！

氷の精霊 17頭

集い来りて 敵を切り裂け

魔法の射手

サギタ・マギカ

連弾・氷の17矢！！！！」

エヴァから放たれた17矢の魔法の射手が変態に突き刺さる

て言うかやりすぎじゃね？

「えっと、エヴァ？

や、やりすぎじゃないか？」

「はあ、はあ……いや、これでもやりたりない位だ、変態は死ぬべきだ」

「そ、そうか、でも流石に死んだんじゃないか？

「アイツ魔法障壁を張ってなかったぞ？」

「う、しょ、しょうがないじゃないか……………」

「お、…………終わらァァァァン!!!!」

「んなあっ!!?」

エヴァの魔法を食らった筈の怪盗パンツ（確定）が窓から逃げて行った

んなバカな、魔法の射手が17矢も食らったんだぞ、魔法障壁を張ってたなら分かる、分かるが、アイツが魔法障壁を張っていた様には見えない

それに、血があちこちに落ちてる事から、間違いなく直撃したんだろう

「それでも逃げるってどんだけだよ」

「何してるカイト!! 追いかけるぞ!!!!」

「ん、さっさと終らせるか

（トレース・オン）

———投影、開始」

右手に緑色の刃を持つ剣、Zセイバーを握りしめ、怪盗パンツを追いかける

怪盗パンツの背中にエヴァが何度も何度も魔法を打ち込むが、まるで倒れる様子が無い、それどころか速くなっている気がする

「エヴァ退いてろ、Zセイバーで斬りつける!!!!」

「大丈夫なのか？その剣が前に岩を斬っていたのを見た事が有るんだが？」

「安心しろ、非殺傷だ!!!!」

怪盗パンツを後ろから、首を斬り、胴を斜めに斬り、最後に足を斬る

紅き英雄の剣ZセイバーのZ斬り

普通なら、例え非殺傷でも、首を、胴を、足を斬られれば止まる、筈なんだけど

「アイツ何で止まんないの!!?」

何か怖いんだけど!!!」

「フウハハハハア!!!」

私は止まらんよ!!!

この手にパンツが有る限り!!!」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック

来たれ氷精 爆ぜよ風精

ニウイス・カースス  
氷爆!!!」

エヴァが氷爆でパンツを吹き飛ばすが、怪盗パンツはまた新しいパンツを懷の中から取り出す

これを繰り返す事15回、Zセイバーで斬り捨てる事7回

「お前はいくつパンツを懷に入れてるんだよ!!!」

「いくつでもだよ!

フウハハハハア!!!

悔しいか? 悔しいか?

悔しいだろう！！！悔しいだろう！！！

己が履いた物を変態に奪われるのは、私の変態度数は五万hを軽く越えている！！！」

「ちっ、意味の分からん事を、今日は意味が分からん事が多すぎる！！！！

いい加減倒れやがれ！！！！」

「ごふっ！、まだだよ、倒れる訳にはいかんのだよ

私は最高の変態として！！！！  
至高の変態として！！

一度手に入れたお宝を手放す訳にはいかん！！！！」

「そんな市販のパンツなんて、自分で買えば良いだろ！！？」

エヴァの魔法を受けながらも、未だに逃げ続ける怪盗パンツ

流石にここまで来ても倒れないとなると、信じられないが、吸血鬼と言う可能性もある

その上活動時間は夜中、ますます怪しいが、吸血鬼がパンツ泥棒な



んてするのか？

「ただの市販のパンツ等では……！」

断じて！断じて無い……！！

これには、乙女が履いたと言う事実がある、これはもはやパンツ等では無い……！！

聖遺物なのだよ……！！」

「いやだから、それは市販のパンツだって

エヴァ履いてないんだから」

「――なに？」

だんだんと速度を落とし、最終的には屋根の上に立ち止まった怪盗パンツの元に歩いていく

うん、どうやら逃走の意思は無くなったみたいだな

「その、君、今、これが、ただの、市販の、ただの、パンツだと――言ったかね？」

「ああそうだよ、俺達はアンタを捕らえる為にダミーを用意したんだそれは、誰も履いてない、ただの市販のパンツだ」

「――さよなら人生、ゴハッ！！！」

「怪盗パンツウウウウウウ！！？」

ど、どういう事だ、私はてっきり吸血鬼なのかと」

エヴァの言葉に同意しながら、怪盗パンツを縄で捕らえて回復魔法をかける

傷口などから見てコイツ……

「吸血鬼じゃない、ただの人間だ

いや、ここは敬意と畏怖を込めて変態と言っておこう」

「人間？、人間が……人間なのかコイツは？」

「間違いなく、おい、起きろ」

「ん、ここは……その素敵なお嬢さん

私にパンツを見せてくれないか、いや、魅せてくれないか？」

「死ぬか？」

「フウハハハハア……！！」

「まてまてまてい、聞きたい事があるんだよ

吸血鬼ならまだしも、ただの……訂正して、変態だとしても人間が城の中に入れるのか？」

しかも一番警備が厳しい王様の私室に？」

「………王室？何の話だ？」

「は？」

「私は王室等には行っていないよ」

その後、エヴァの蹴りを喰らい気絶した変態を城まで連れていった疲れを取る為に、お風呂に入る、こんな夜中に人は入っていない為、貸切状態だ

はあ、今一なっとく出来ないが、なっとくするしか無いか

頭に乗せたタオルで顔を拭くと、城中に響き渡る、怒声が聞こえてきた

「パンツを焼き払うとはどう言う事ですか王様アアアアアアアアアアアアアア！！！！」

「ごめんなさああああああああい！！！！」

ふう、プライベートな事なのかな

聞いちゃいけない事なのかな

確認してはいけない事なのか

こんな平和がいつまでも続くと良いんだけどね

「王様アアアアアアアア！！！！」

「ごめんなさああああああああい！！！！」

やるせねえ

## 人の底力は常識を覆す（後書き）

さて、前書きで本編始まりの合図を魔王様に奪われた作者です

「皆が尊敬する魔王様だぜ W W W ひゃっはー W W W ヒアルロンサン  
ヒアルロンサン W W W」

……コイツは無視して行きましょう、実はそろそろ過去編もとい、  
エヴァ編を終わらして次に行こうかと

「シャーッハッハッハッハッハー！！！！

無視か？無視かよ？いいぜえ W W W

お前が俺様を無視するってんなら W W W

まずはそげぶ W W W」

そこ大事なんだから略すなよ

とにかく、お前はもういいから、帰れ

「甘い甘い W W W 甘ままあああい！！！！ W W W

この俺様は無視されようとオートでテンションが上がるのうだあ W  
W W

ぶるあああああああ！ W W W

キャッチマイはあああああと、ブエリイムエロオオオオンW  
W  
W

うぜえ、とにかく、次回から、おそらく、エヴァ編終了と思われ

「この後書きすごおいよおW W Wさすが前書きのおにいいいさん  
W W W」

……………それでは次回の更新をお待ちください

ゆっくりして行ってね？

眠るように…(前書き)

さて、これにてエヴァ編は終了

最初に言っておくと、この話で終わりでは無いからね？

戯言は終わりにして

まえがたり、お終い



眠るように…

今から少し前、宣戦布告も無しに、捕虜になりに行く者達を虐殺して

正義の魔法使い達が

万全の軍隊で現れた

正義の魔法使い達の起こした事は、腕を無くし、片目を抉られた兵士が教えてくれた

ただの殲滅戦では無く、恐怖を与える為に技と痛みを伴う方法で、技と恐怖を与える方法で

「そっちの荷物はこっち！」

「準備急げえ！！！」

「必要な物だけ持っていけ！」

「くそったれ！！！」

誰か！このくらいの女の子見なかったか！」

騒がしい以上に騒がしく、忙しい以上に忙しい

この国はいつからこんなに慌ただしくただしくなったんだ？  
ついさっきからか……

この国から魔法使いの世界、魔法世界に逃げるべく行動してる人達の  
間を縫い、城に向かって歩いてく

空を飛び交い、地上を走り回り、慌ただしくこの国から、この惑星  
から逃げる為に駆けて行く

城に入ると、そこは誰も居ない、がらんどうな城の中を一人歩き続  
ける

「消えたなあ、平和

はあ、やるせねえ」

最近はやってなかった口癖を呟き、今もっとも忙しいだろうアイツ  
の元に向かう

軽く、くはっ、と笑いながらアイツが居る王室の部屋を開けると、  
そこには珍しく険しい顔をしてるアイツと、何時もよりも険しい顔  
をしてる執事爺

「よ、ずいぶん湿気た顔してんな？」

「あ、カイトさん……」

「カイト殿、なぜこのような場所に……とにかく、速く待避してくださいだされ

もう……もう、すぐソコに来ている筈です、奴等は容赦等」

「正義の魔法使い（マギステル・マギ）……」

……ふうん、全く、とんだ名前違いだな、な？

俺が掲げる正義と、アイツ等の掲げる正義……

まさか、開戦の合図も無く、容赦も無く、感情も無く、いきなり戦争をおっ始めるとはなあ……

多分、この戦争も後世に伝えるのは、捻れ曲がって、ひん曲がって、曲がり曲がるんだろうなあ

正義は必ず勝つ、そりゃそうか、勝った奴が正義を名乗りや良いんだもんな」

「なにを、なにを言ってるんですか！？」

今はそれ所じゃ無いでしょう!?

速くカイトさんも逃げてください!」

座っていた椅子から立ち上がり、俺を外に出すべく走ってきた王様の首後ろの毛を掴んで持ち上げる

本日、この異端達の楽園は、日の出と共に現れた正義の魔法使い達に崩された

今も、この国の兵士と、正義の魔法使い達が戦ってる

今現在、生きてるかは別としても……

「んじゃ、何で逃げるべき王様がここに居るんだよ、ここは危険じゃ無い訳じゃないだろが?」

「そ、それは、一王国の王様として、ボクが真っ先に逃げる訳には」

「執事爺を巻き込んでか?」

「ボクは逃げろって言うてるのに……」

「王様が逃げないのに、逃げる執事爺ではございません」

どっちも頑固だなあ、と思いながらも、ヒツジにシツジを渡す

あれ？

シツジにヒツジだっけ？

戯言か

「ほら、下ろすなよ？

シツジ爺に迷惑かけるなよ？」

「は、離せ〜！ボクは王様として」

「絶対に下ろすなよ？」

「かしこまりました」

確りと頷いた執事爺を見据えた後、未だにバタバタと、ばたばたと、暴れる王様の頭をグシャグシャと撫でて黙らせる

まだうだうだ言ってる王様は執事に任せ、王室の扉の取っ手に手をかけ軽く捻る

「んじゃ、俺は行くぜ？」

「どこに？……だ、カイト？」

「——ッ！？エヴァか？」

「私以外に誰が居る」

軽く捻る、——途中で影から出てきたエヴァに腕を掴まれる

僅かに、ミシリと音が響く

しょうがなく扉から手を放すとエヴァと向き合う、空気を読んだのか執事爺と王様はもう既にこの部屋には居ない

「あー、エヴァ？

非常に腕が痛いんだが、放しちゃくれないかな？

ほら、余りの痛さに五臓六腑が吹き出すかも」

「戯言はいらない

それより前に、私は何処に行く……と聞いたんだが？」

「――、散歩だよ」

「こんな時にか？」

「こんな時だからだよ？」

「……………」

「……………」

静寂、無音、無痛、いや無痛じゃない、鈍痛、未だにエヴァの腕は離れていない、むしろ力が増したかもしれない

しばらく見つめ会っていると、自然、エヴァが俺の胸に頭を乗せて抱き締めてくる

「――行くな」

「エヴァ？」

「何処にも――行くんじゃない…」

「……エヴァ」

「どこにも行かないで、私の隣に居ろ

一緒に生きよう

お前の本気なんて知らないがな、相手が誰か分かってるのか、バカが」

「あだ」

どすん、——エヴァの頭突きが胸板に当たる

何度も、何度も、何度も  
どすん、どすん、どすん

「だいたい、何が、散歩だ、バカが

勝てる訳が、無いだろ」

「……………」

「もう一度言うが

——どこにも行かないで

——私の隣に居ろ



——私のモノになれ、カイト」

「——」

「何か言ったら、どうだ、バカ」

「ごめん」

「ッ！謝るな！謝るな！謝るなあ！！！」

まるで子供みたいに、嫌だイヤだいやだと、胸板に額を押し付けたまま首を振る

俺の答えを責めるみたいに、グリグリ、ぐりぐり、痛みが広がっていく

「お前は分かってるのか！？

お前は吸血鬼でも、人外でも無いんだ！

首を切られたら死ぬ！

胸を刺されたら死ぬ！！

血を流し過ぎても死ぬんだ！！！」

「そーだな、俺は貧弱で脆弱で弱小な人間だからな、簡単に死ぬな

」

「だったら」

「エヴァ」

涙声で、涙目で、泣いてるエヴァの顔を上げさせる

袖を使ってエヴァの顔を優しく拭く

「何時だって、どこの世界だって、世界を救うのは、人を救うのは、人を護るのは、人間なんだよ、エヴァ

今この国を、人達が逃げるまでの時間を稼げる奴が居るか？

それに、俺は正義の味方だぜ？

俺は自分の正義に、感情に従って、この国の人達を見捨てるなんて事はしたくないんだよ」

「嫌だ……、そんなの嫌だ……、理屈なんか知るか……、カイトは私のモノだ……！」

行きたかったら、私を倒してみせろ……！」

「なんと？」

俺から離れたエヴァから魔力が溢れて、周りがビキビキ凍り始める  
エヴァの魔力は、始めて会った時とは比べ物にならないくらい、強  
くなっていた

「私と出会ってから十一年、流石のカイトも老いた今じゃ

私には勝てないだろう!!？」

「う?……もう、そんなにたったっけか？」

「戯言はいらないだろ、カイト、一緒に行こう、魔法世界で一緒に  
暮らそう」

私とチャチャゼロとカイトで、三人で一緒に……ずっと……」

流石のエヴァも、俺が人間だから、何時か死ぬのは分かってる筈

だったら多分、ずっとてのは、いつの日か遠くない日に、俺を吸血  
鬼にする方法が見付かったって事かな？

そうまでしたい程に好かれる、男冥利に尽きるって言うべきかな？

刹那の瞬間にエヴァを抱き締め、首に手刀を叩き込む

「エヴァ、一緒に生きようって言うてくれて

ぶっちゃけると、嬉しかったぜ？」

「う、あ——カイ……」

「…………やるせねえ」

「終わりましたかな？」

「終わったよ、そっちは？」

「強制的に連れて行きました」

「そっか……エヴァ、頼む」

「…………かしこまりました」

現れた執事爺とほんの少し話すと、お姫様だっこしていたエヴァを執事爺に渡す

これで、エヴァはこの奴等と一緒に魔法世界に行く事になるだろう

最後に、お別れに、エヴァの顔を撫でた後、扉の取っ手を捻る

「カイト殿はこれからどちらへ？」

「散歩ついでに

一人ぼっちの

零崎を始めにな」

草原の中を進軍してくる者達が居た

それは、彼等の信じる、すぎる、頼る、人生の支えになる、人生の  
指針になる正義の為に

止まらない進軍

目指すは、何時爆発するか分からない爆弾達の元へ

一度爆弾すれば、自分達は死に向かうと信じて、爆弾する前に消さねばならないと信じて

爆発する筈が無い爆弾を消すために、新しい爆弾に火を付ける彼等を、事情を知ってる者は言うだろう

それは失敗なんだ、と  
なんてバカな真似を、と  
どうしようもなく失敗だ、と

無知は罪なのか  
それとも

知ろうとしないのが罪なのか  
少なくとも、失敗ではあった

「―――投影、開始。  
(トレース・オン)

―――工程完了。  
(ロールアウト)

——全投影、待機。  
(バレット・クリア)

——停止解除。  
(フリーズアウト)

——全投影連続層写。  
(ソードバレルフルオープン)」

地平線を埋め尽くす程の者達の周りに、突如として、剣の軍隊が現れた

数え切れない程の、見渡せない程の、視界全ての、無数の

無限の剣群が

「よ、こんにちは  
早速だけど、止まってくれないか？」

「——、これは、お前がやったのか？」

極悪正義？」

「…………俺はその名前嫌いだって何度も言ってるんだけどな、いい加減覚えて欲しい

その質問には、是、と答えようかな？」

「…………今から殺されるのに、随分気楽だな、極悪正義？」

まったく、俺は、その名前がほんと嫌いなんだけどね？

て、呟いても誰も答えてはくれない

残念だけど、敵同士でも、気が合えば話し合う気にはならないみたいだなあ

気楽に、極めて気楽に答える

「殺される…………ねえ…

お前にかい？

俺から二度も逃げたのに？」

「…………ツ」



「……はあ、何度も言うけど俺は殺したく無いんだよ、あんた達だって死にたくないだろ？」

それに、守りたい奴だって」

「その、守りたい者の為に戦うんだ」

俺から過去二度逃げ出した男が、震える手を無理矢理抑え、剣を両手で握る

なんとも、なんとも可笑しい、コイツはもう少し頭が良かった気がする

俺と敵対した時と、この先の皆を見逃した時のメリットデメリットくらい分かる奴だった

「……ふうん、人質っていった所か？」

「ッ!？」

「……ふうん、ふうん、ふうん

ま、今は俺に出来る事は無いな、しかし

覚悟は決めるよお前達！！！！」

決戦にするには、余りに勿体無い青空の元、突き刺さる剣群が太陽の光を反射して、正義の魔法使い達を照らす

その草原に声が轟き、響き渡る

「今回ばかりは途中下車はお断りだ！

そもそも、覚悟を決めたなら、逃げるな、退くな、背を向けるな！！！！

死ぬその瞬間すら前のめりに倒れて逝け！

そんな覚悟が無い奴が、戦場に、俺の前に

立つな！！！！」

ビリビリと響く言葉に、戦く（おののく）奴等が出てくるが、知ったこっちゃ無い

これで退くなら、元からこなけりゃ良かったんだ

「俺と敵対する覚悟のある奴は

恐怖を捨てろ、前を見ろ進め、決して立ち止まるな

退けば老いるぞ！

臆すば死ぬぞ！！！」

右手と左手に、魔剣と聖剣を握る

魔剣ネビリム

聖剣レイヴェルト

魔剣ネビリム

二又の、生きている様に動く魔剣、第一音素と言う物を秘めていて、敵を倒した数だけ強くなる、限界の無い魔剣  
まさしく最強

聖剣レイヴェルト

レイヴ（RAVE）と言われる聖石をはめる事により、第1から第9の剣に変える事が出来る、世界を救った英雄が使った、邪悪な魔力を打ち破る力がある聖剣  
まさしく最強

この2つの最強を握り締め、草原を踏み締める

「さあ、恐れずしてかかって来い!!!」

side－エヴァ

始めに目を覚ました時は、もう既に魔法世界に転移する寸前だった  
無理矢理転移装置から逃れ、止めようとする執事爺の手を振り払い、  
後一瞬で転移すると言う時、装置から外に出る事に成功した

周りを見渡すと、どうやら私と執事爺が最後だった様で、逃げ遅れ  
等一人も居ない

空っぽになった王国を眺めていると、遠くの方から、強烈な破壊音と、慣れ親しんだ、慣れ親しくない量と密度の魔力を関知した

それからは、自分で言うのも何だが速かった

チャチャゼロを抱え、出来るだけ一直線に、出来るだけ間に合う様に、駆ける翔る、早く速く、もっともっと、ずっとずっと、速く

居場所は簡単に分かった、魔力と、辺りに散らばる刀剣達、カイトが出したと思われる刀剣達は全てが総て

1つ残らず可笑しかったが、今はそんな事はどうでも良い

その場所に近付くと、そこはまるで神々の争いの後の様だった

その場所の熱が、乱れる魔力が、もう既に一流の暴力、一流の攻撃抉れた地面の下には、赤い海が流れ、時たま思い出した様に赤い海が亀裂から勢い良く吹き出す

巨大な穴が至る所に、ごく当然の如く空いている、私が気絶させられた時には晴れ晴れとしていたのに

空が乱れ、雲が荒れ、雨や雷が轟いている

まさに、神々の争いの様だった  
世界の終わりの様だった

じゃあ、ここに居る筈のあいつは？

こんな終わってしまった、寂しい世界に居るはずのあいつは？

考えたく無かった、だから駆けた

駆けたて駆けて駆けた

見付からないあいつに泣き出しそうになった時

あいつを見付けた

今まさに地面から二本の剣を引き抜いた

真っ白で神々しい剣と、真っ黒で禍々しい剣を頭上で構え

「約束された（エクス）——」

目を瞑りたくなるような魔力を二本の剣に込め

「勝利の剣——！！！」  
カリバー

振り下ろした

白と黒の光線の様に巨大な剣が大気を、大地を、空を斬り裂き、カイトの目の前に居た正義の魔法使い達を殺した

間に合わないなんて冗談じゃない、この、この神々の争いの後の様にしたのは、カイトだったのか

ふ、と、安心した時に気付く

身体中に武器を突き刺し、今まさに前のめりに倒れたカイトの事を

「カイト！！？」

「っ、——？エヴァ……か、」

「待て！！！！動くな、今治してやる！！！！」

「何で……ここに？」

カイトの身体に突き刺さった邪魔な武器を引き抜き、傷口に手を当てて治療魔法を使うが、まるで効果が無い

カイトの身体から赤い血が雨と一緒に流れ出ていく、必死に手で抑えても止まらない、懸命に治療魔法を施しても止まらない

「なんで！なんで！！？」

「あ……無駄だぜ？……何か……呪いとか、不死殺しとか……色々食らったからな

それに、エヴァは治療魔法苦手だろ？」

「——ッ！」

「エヴァ、皆は逃げたか？」

「……ああ、私達以外は全員な」

「そっ……か……」

はあ、って、息を吐いて身体に溜まっていた息を吐き出して力を抜



くカイト

その身体を抱き締めて血が抜け出るのを止めようとするけど、止まらない

傷付いた身体を起こして何かを指差すカイト、指差す方を見てみると

そこを見ると、傷付きながらも、泥だらけになりながらも、未だに生きている奴等（正義の魔法使い）が居た

「――ッ!!?!? アイツ!!!!」

「待て、まてい」

「な、何で…?」

止めを刺そうと魔法を使おうとすると、寸での所でカイトに止められてしまった

「せっかく、殺さなかったのに…こふっ…殺そうとするなよ」

「こ、殺さなかったって…」

考えてみれば、おかしい

何故こんな地獄の様な場所に居て、カイトと敵対していて  
傷や泥だらけ程度ですんでる？

「アイツ等さ、何か、他の正義の魔法使い達に脅されて、無理矢理  
戦ってたみたいなんだよね」

「……そんなもの、殺してしまえば良かったのに……」

「いや、俺もさ、殺そうと、思ったけど

なんか、出来なかったんだよな、ただの

ただの、わがままだけどさ、甘いつて、分かってるけどさ

あいつ等の家族が泣いてるのを想像したらさ、どうにも殺り辛くて  
な」

そんなの、甘い所の騒ぎじゃない、相手の為に自分が死ぬなんて、  
正義じゃない

「勘違いしてる、なら、言っとくが、俺はあいつ等の為に、殺さなかつた訳じゃないからな？」

「え？」

「だって、あいつ等殺したら、気分悪いだろ？」

俺は気分悪く生きて居たくないんだよ、だから、これは、俺の為の行動だ」

「そんなの、屁理屈じゃないか……」

「屁理屈でも、理屈は理屈だろ？、こほっ」

カイトの口から血が溢れる

抱き締めているこの手に、もう人並みの暖かみは無い

その、鉄みたいに冷たい体を起こして、最後の、最後の願いを

「なあ、一緒に生きようとか、言ってたけどさ

……これから先、生きていくエヴァに

お願いがあるんだよ」

「何だ！、お前の頼みなら何でも」

「俺の事は忘れてくれ」

「……え？」

言葉が、言葉に、言葉で

自分の立っている場所が揺らいだ気がした

なにを

「お前は、無駄に優しいからな

悪い魔法使いだとか、…言っ、悪になりきれない所が有るし」

なにを言っ

「だからな、多分、俺の事を忘れなかったら  
いつまでも引きずってくと思うんだよ」

なにを、言って

「だから、」

「お前は、なにを言ってるんだ」

「俺の事は綺麗サッパリ忘れて、これから先、出会うかもしれない  
運命の人

そんな感じの奴と、幸せに生きてくれ」

「そん、なの

いや、いやだ……お前じゃないと、イヤだ」

「たのむ、お願いだから……」

今までに聞いた事が無いくらい弱気な声で、今までに感じた事が無いくらいの弱い力で

私にお願いをしてきた

だけど、私は

その願いを聞き入れたくない、認めたくない

一度でも、一度だけでも、振りだけでも、嘘でも良いなら

コイツの願いを聞こうと、私は

――想った

「カイト」

「――ん」

「パクティオーをしよう」

「…………いきなり何を」

「お前が私とパクティオーするなら、私も、お前の事を忘れる努力

をしよう」

「……努力かよ……？」

「努力……だ、カイト、パクティオー………してくれないか？」

「………分かった」

チャチャゼロに魔方陣を描かせる

その形は、カイトを従者にする物

「行くぞ、カイト」

「逝くか、エヴァ」

「「パクティオー本契約」」

神々の争いが起きたような場所には、傷付きながらも生きている者達と

目から雨を溢してる少女と

その少女を何も言わずに慰めている人形

そして

少女が抱き締める「称号」「徳性」「方位」「色調」「星辰性」「  
アーティファクト」が消えた

少年の映った一枚のカードだけだった

そこに、少年の死体は無く

まるで天に召される様に

光の粒になって

空に飛んでいった



## 眠るように…（後書き）

さて、今回出てきた四本の剣について

まずは、魔剣ネビリム

ネビリム先せええええええええい！！！！

こと、テイルズ オブ ジ・アビスの剣、敵を倒す毎に強くなる、最強装備ですね

まさしく最強

故に説明はこれだけ、あの神ゲーはやつといて損は無い

人によっては得も無いけど

次は、聖剣レイヴェルト

レイヴ知ってるよね？

今はフェリーテイルを描いてるけど、昔はREVVEってマンガを描いてて

そこで主人公が使っていた剣の、第10の剣ことレイヴェルト

作者は大好きです

次に二本の【約束された勝利の剣】（エクスカリバー）

白い方は皆さん、詳しく調べてない人も分かると思いますが

黒い方、ここでは仮に魔剣と、いやだってあれ魔剣でしょ、この世全ての悪とかさ

とにかく、二つとも、【無限の剣製】でお馴染みですねー

黒い方はセイバーオルタが使ってます

そんなこんなで、まだまだ続くよ

ゆっくりして行っってね？



ってよお！！！！

俺様を知覚した奴等が軒並偉業を打ち立てたってY O！！！！

この俺様が見たこの世の終わりがハッピーエンドどころかトゥルーエンドに早変わりだぜえ！！！！

俺様だあ！！！！

主演、脚本、構成その他もろもろ全て俺様で事足りる、否あ！！！！

俺様でないと意味が無いんZ E！

そんな感じで始まるZ E☆」

ちよ、おま、まえがたり乗っ取っとうわ何をする止め（r y

さあ、俺様の掌の上で愉快におwどwれw

ふ、と沈殿していた意識が浮上する

周りを見渡せば、そこは何時か訪れた真っ白い場所、後ろを向いて見ても

そこにはあの時通った扉は無い、そりゃ、ちよつとは期待してたけど、世の中そう簡単には行かないよな

前を見てみれば、何時か見た、ソファアに乗っかってるアンテナ付きのテレビ、ただし、映っているのは砂嵐

ここは最初の場所だった

そして最後の場所だろう

十一年、あの魔王の暇潰しは終わった、こうして、振り替えて見ると

実に転生物らしくない物語だった、力は有るのに、逃げて、逃げて、逃げて

小説やら何やらで見た人達みたいに、力で何かを成す、と言った事も、最後の最後しかないで、本当にこの十一年、エヴァ達と喋っ

てしかなかったな

そして、十一年生きた人生は、物の見事に終わってしまった

「……………十一年ぶりに、あの人に会うかな」

古テレビに近付き、チャンネルを回す、砂嵐がしばらく続く

あの人、魔王様は何がしたかったのだろうか？

そもそも、したい事なんて有ったんだろうか？

魔王様が言っていた、「他にも転生者は世にいる」発言、転生者たる彼等は、自分を転生させた存在をどう思ってるんだろう？

考えていても、意味が無いと思い無心でチャンネルを回す事7回

やっところさ、チャンネルが合った

「お久しぶりです、魔王s」



「皮をく捨てるヤゝツゝが居る！

皮をく捨ててわあいゝけないZ E ☆

フウロにい、入れてあ・あ・たあまればあああ！！！

ポ・カ・ポ・カアアアアア！！！」

「チャンネル変わらない！？」

「心が和めばあ！！！」

世界わあひ！と！つ！

世界に羽ばたけえ！！！！」

「「ええええひめのみかん！！！！」」

「一人増えてる！！？」

何かテレビの中の住人に、一人エヴァみたいな金髪ロリ娘が居るんだが

「こいやあああああ！！！！」



「みかん！みかん！みかん！」

「みかん！みかん！みかん！」

「みかん！みかん！みかん！」

「ミカアアアアアアアン！！！」

そのロリ娘の声で歌う曲じゃ無いとか、今俺は凄いシリアスな気分何だけど、てか死んだんだけどとかあるんだが

「愛媛のお！みかんわぁ！世界一イイ！！！」

みかんをお！身体でええええ！！

感じよおおお！！！！

みかんを！粗末に！する奴わぁ！！！！

みかんにい！やられてえ！！

死んじまええええええええ！！！！」

とりあえずは黙ってくれ、かなり切実に

「こ！た！つ！にい、みかんがあ無い家は！  
日本の心を無くしてる！

日本のお！心を！取り戻せえ！！！！」

「「取り戻せええええ！！！！」」

「おい？、お前等？

お前等聞ってるか？そこのアホ共だアホ共！」

「みいかんを絞！れ！

こおれが」

「「ポンジュース！！！！」」

一々ハモるんじゃない、どうしよう、コイツ等聞く気無いんじゃないかな？

「命の水だあ！  
ポンジュース！！！！」

「みかん！みかん！みかん！」

「みかん！みかん！みかん！」

「みかん！みかん！みかん！」

「ミカアアアアアアアン！！！」

しかも、無心で、無視してるとかじゃなくてガチで聞こえてない感じ何けど？

俺って、お前が転生させたんだよな？

「皆で飲もおお！愛媛の心！！！」

みいいかんを食！え！ば！

救われる！！！！

オレンジに負けない！！！！

黄金色の果実！！！！

命の水だあ！！

ポンジュース！！！！」

「カモオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

「「みかん！みかん！みかん！

みかん！みかん！みかん！

みかん！みかん！みかん！

ミカアアアアアアアアア！！！！！！」

はあ、やっと終わった感じかな

「「みかんミカンみかん！！！！

ミカンみかんミカン！！！！

みかんミカンみかん！！！！！！」

「いい加減にしろよごるああああああいあああああああ！！！！！！」

俺のドロップキックがテレビ画面に突き刺さり、椅子を倒してテレビをすっ飛ばす

「はあ、はあ、はあ

……あゝ……て、テレビ」

「残像D A ☆」

「そう、超高速移動により実体を残したまま分身する

その技術こそが」

「「秘奥義・超高速究極武神撃破滅殺音楽空空喉渴キング疾風疾風  
見えないメガネが無いと明日も見えない分身の術<sup>なのじゃ</sup>!!!!」」

「……お前等、言ってて恥ずかしく無いか？」

「いや全然www」

「永年たつと、もうその程度の嘲笑………フハッ!!  
笑え! 笑えば良いのじゃ小わっぱ共が!」

な、なんだか分かんないけど、あの金髪ロリ娘からは、魔王様とお馴染みの感じがする

そう、街中で会ったら関わり会いになりたくないのに、気付いたら巻き込まれる呪いみたいな感じが

「あ、紹介してなかったな、俺の嫁その1ですwww」

「ミオン・K・シクラウドなのじゃ

ちなみに元魔王、現ぬし様の嫁なのじゃ」

「まて待てまてい！！！！今その1とかほざかなかったか！！？」

「ハーレムごときで狼狽えるな小僧がwww

てかお前死んでやがんのwwwプギャーwww」

「所詮その程度、戦闘力たったの5……………ゴミなのじゃ」

どうしよう、スゲエエエエエエ、腹立つ、何これ？アイツ等何なの？ウザさが二乗何だけど

プギャーって何だよプギャーってよ、俺死んだんだよ？

それをプギャーってどうよ？

「オマケに、ラストはエクスカリバーですか W W W  
いいセンスだあ！！！」

そのセンスに応じて一曲歌ってやろう W W W」

「いえ、結構です」

「エクスカリバー W W W エクスカリバー W W W フロム W W  
W ユナイテッド W W W キングダム W W W アイム W W W ルツキン W W  
W フォー W W W ヘブン W W W アイム W W W ゴーイン W W W ツー W W  
W キャリフォルニア アアアアアアアア W W W エクスカリバー  
 W W W エクスカリバー W W W フロム W W W ユナイテッド W W  
W キングダム W W W アイム W W W ルツキン W W W フォー W W W  
 W W W エクスカリバー W W W フロム W W W ユナイテッド W W  
 W W W キングダム W W W アイム W W W ゴーイン W W W ツー W  
 W W W キャリフォルニア アアアアアアア W W W エクスカリバー  
 W W W エクスカリバー W W W キングダム W W W アイム W W W  
 W W W ユナイテッド W W W キングダム W W W アイム W W W  
 W W W フォー W W W ヘブン W W W アイム W W W ゴーイン W W W  
 W W W ツー W W W エクスカリバー W W W フロム W W W  
 W W W ユナイテッド W W W キングダム W W W アイム W W W  
 W W W ゴーイン W W W ツー W W W キャリフォルニア  
 アアアアアアア W W W」

「ウツツツツツツツツツズウエエエエエエエエエエエエエエエ  
エエ！！！！！！！」

そいつは違うエクカリバーだ!!!」

俺は、例え間違っても、何がなんでもそのエクカリバーだけは！そのエクカリバーだけは！投影しない！

絶対だ！

「いやあ、お前がエクカリバーを使ったからさ、こるはやらぬえば  
と思ってな

どうよWWW、俺様の美声痺れる歌は？」

「死んじまえ」

「いやあ、しかし恋愛してたねえWWW

死ぬ最後の瞬間に好かれてたって気付いた気分はどんな気分WWW？

ねえねえWWWどんな気分WWW？

ねえどんな気分WWW

ねえねえねえWWW」

「心底ウザい」



「いやしかし、可愛かったじゃんかよ最後www

エヴァなんか、目を涙目にさせてきwww、いや本当に可愛k」

「……………え？」

一瞬、一瞬にして俺の前、まあテレビの中の魔王様がウニに変化した  
いや、ウニ、と言うか

魔王様の皮膚を突き破って、赤いトゲが出てきてウニみたいになった

「ぬし様……………浮気は許さぬのじゃ…」

「……………」

「何か……………文句でもあるのかのう？」

「い、いえ」

こ、ここ、こええ、こええええよお

何だよありゃ、し、死んだ？

だって即死だろ、あれ、え？、本当に殺した感じ？

夫婦じゃなかったの？夫婦だよね？夫婦であってるよね？

「悪かったよ」

「分かれば良いのじゃ」

「…………いやいや、待とう、その、ちょっと待とうか？」

「どったのwww？」

何か普通に会話に加わってるバカが居る、より正確に言えば、さっきまで赤いウニだった魔王が居る

「なんで大丈夫なの？」

「俺様だから」

「ぬし様だからのう」

……ここ、笑う所でしょうか？

「いやしかし、死んじゃったな？」

「え、ああ、そりゃ死ぬよ……ますよ？」

「今さら敬語とかいらん、それよか

お前は一度のみならず、二度も死にましたーWWW、どんどんパフ  
パフあひゃひゃひゃWWW」

ダメだ、この魔王は何がしたいんだ、サッパリ分からない

それに、今一分からない、魔王の目的は何だ、暇潰しならもう終わ  
った筈だけど

「でだ、少年……少年には2つの道が残されてる」

「……………2つの道？」

「そうだ、一つは元の世界に戻って輪廻転生に加わる

二つ目は、俺様と一緒に黄泉帰って暮らす

3つ目、ネギまとは違う世界に転生

さあ、どれが良い？」

「……3つなんだが？」

「人間は嘔吐き何だよWWW」

「少なくとも、魔王様は人間に分類されてません」

「残念無念また来念WWWそうは問屋が在庫切れってなWWW

俺様が人間だと思ってる限り人間なんですうWWWさっさと選べやWWW」

……魔王様は無視しよう、しかし3つか、この中だったら3かな？

「決めました」

「だが断るのじゃ」

「いや、なんでミオンさんが断ってんのさ」

「いや、実は沈黙が痛くて出てきたのじゃ」

「はあ、とにかく、俺が選ぶのは

三番です!!!」

「だゝが!断るwww!」

「なんで!!?」

まさかのだった、はっきり言うと、そろそろ疲れてきた、何なんだ全く、この二人は人を苛立たせる達人か?

そもそも、二回もだが断るを使うなよ、選べって言ったのそっちだろうが

「魔王が選べって言ったんだろうが」

「あ!聞きましたミオンさん?

魔王だってよ魔王!呼び捨てk t k r、もう様を無くすなんて信じられないわ」

「マジキチなのじゃ」

「さっさと質問に答えろや」

「全くもう、世の中自分の思い通りに行くとも思ってたんの？ w w w

世の中はこんな筈じゃ無かったばかりなんだよ？ w w w有り得ないなんて有り得ない、絶対なんて絶対無いんです w w w」

「もう……好きにして」

「言ったな？」

……何が？

「今間違いないで、好きにしてって言ったな？」

「え？ いや、ちょ」

「はい裁判開始です」

「開始ですなのじゃー！」

まてまて、どう言う事だ？

ちょっと頭が追い付かないぞ？

もしかして、ハメられた？

「お前は今回沢山の人達を殺したのじゃ」

「え？、はい」

「よってw w w、罰を受けねばなりま千円w w w」

何だか分からない、分からないけど、分からないなりに分かった事が有る

このまま流されたら、良くない、非常に良くない

「m! ! !」

「却下なのじゃ」

「却下速くない! ?」

「お前は今までの罪を償え

償う方法は、人の体を捨て  
新しい身体で人助けだ

無償で、金品を貰わず

恩義のみを貰い

人助けの方法は構わん

例えば！大戦の片方に付くとかでも  
俺様は一向に構わん！！！！

てな訳でwww二度目の転生

セカンドチャンスゴーwww」

抵抗する暇も無く、後ろに浮かび上がった白い扉に吸い込まれる

テレビ画面を見ると、手を振ってる二人

「あ、俺様に都合の悪い記憶はポポポポオーイだからwww  
だってwww大戦www行って欲しいんですのんwww

頑張れwww頑張れwwwすごい頑張れwww」



ああ、殴りたい、おもいつきり殴りたい

そんな事を考えながら、真っ白い扉に吸い込まれ、意識を閉ざ……  
し……た……

さあ、俺様の掌の上で愉快におwどwれw（後書き）

「シャーッハッハッハッハッハア〜！！！！」

皆大好き魔王S……………」

「ミオンなのじゃ

あとがたりは妾が務めるのじゃ」

……助かります

「大丈夫なのじゃ、問題ない」

それは、あの魔王様が復活するフラグな気が

「ぬし様を何とかしたかったら、ポケ殺し（シリアスブレイカーブレイカー）か、ギャグ補正で一時的に無力化するしか無いのじゃ」

で、今回は？

「ポケ殺しが蔓延する世界に送ったのじゃ」

よし、これで暫くは

「あひやひやひやひや W W W

甘い甘い甘い甘いぞお！

自分の必殺技を強敵に当てた後に、土煙で見えない敵に「……やっ  
たか？」位甘い！

もしくは、外への移動手段が無くなった孤島で「こんな殺人鬼が居  
る場所に居られるかよ！、俺は好きにさせてもらうぜ」位甘い！

例えボケを殺されようが……！！

諦めず何処までもオートでボケる男！

魔王レヲン・スタークとは

そう言う男だ」

お前、機嫌良いな？

「当たり前前田……！！

俺様はなあ、あとがたりか、まえがたりか、こう言う重要な場面し  
か無いんだよ

出番が無いんだよおおおおおおお！……！」

あ、もうあとがたり終わりだな

「え？、まだ俺様のターンは」

「それでは皆さんさよーならーなのじゃー」

……**最弱になりました（前書き）**

最弱になりましたよ、最弱に

てか更新が遅くてすいません！

何も言い訳は無い！

テオドラかわいいよテオドラ

しかし、更新が遅い、遅い、遅い！

ま、本編が見たいでしょうし、ここらで、まえがたりはお終いです

……最弱になりました

「……………いけ」

「……………」

「おら、行きやがれ」

「…………ッ！…触れるで無いわ！」

「けっ、自分の立場を考えて言えや」

目が覚めると、そこは牢屋と子供部屋を合体させた様な場所だった  
出口と思わしき場所には、鉄格子が有り、そこから出す意志が無い  
のが分かる

そして肝心の牢屋の内部だが、ぬいぐるみや（ぬいぐるみの位置は  
俺の周り）、御菓子置いてあり、まさしくお金持ちの子供部屋だ  
しかし、そんな部屋に連れてこられたと思われる少女……………幼女は、  
酷く不機嫌そうに見える、てか誘拐じゃね？

そんな場所に何で俺は居るんだ？

「行くぞ、これからどうやって身代金を受けとるか考えないとなあ」

「ああ！こんなに上手く行っただ、最後までやらなきゃなあ！？」

幼女を置いて外の仲間だと思わしき場所に歩いてく、ここに囚われた幼女は暫く当たりを見回した後、不機嫌そうに俺を抱っこしてぬいぐるみに埋もれる様に座った

あー、待て、何かおかしかったぞ？

「…まったく……妾を、誰だと思って居るのじゃ、こんな……ぬいぐるみ……で、っ………くっ、うっ」

………？

泣いてるか？もしかしくなくても泣いてるよな、そりゃこんな年で誘拐なんかされたら泣くよな

しかし、ふうん、なるほどなー

確か魔王様が言ったな、人の身体を捨てろとか、罪を償えとか

「っ……くっ…ひっく……ふ…うつ……」

泣かない様に努力するのは、まあ子供なりに頑張ってると思うが、それ以上キツく抱き付かれると内臓的なのが出る

この少女が言っていた事から推測するに、俺はどうやら今はぬいぐるみらしい

更に言えば、魔王様は人助けをして罪を償えとか言っていた

なら、目の前の【知らない】少女を助けても良いだろ、何てったって正義の味方だからな

「助けてやろうか？」

「……ッ！？だ、誰じゃ！！？」

「俺だよ俺、言つとくが……オレオレ詐欺じゃないからな？」

今時やる奴何て居ないか、俺だよ、お前が抱いてるの」

「ん……な！？ぬ、ぬいぐるみが……喋ったのじゃ！！？」



ふむ、ぬいぐるみじゃ無い……ってハッキリ断言出来ないのが辛い、今の所俺は自分の身体がどうなってるか分かんないからな

ぬいぐるみ、ぬいぐるみか、しかしぬいぐるみか……この少女とほぼ同じ位かな？

だとするなら、ぬいぐるみ説が高くなったな、いや、ぬいぐるみみたいな生き物かもしれない

「いや、まあ、俺が今どんな姿をしてるのかは分からないが

後で調べる事もできる、俺も後で説明しよう、でだ  
少女お前は助かりたいか？」

「だれが少女じゃ……！！

妾には、テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア  
……！！

ヘラス帝国第三皇女じゃ……！！」

「へー、テオドラ……あ、ん……ヘラス………シャバダバドゥ  
？」

「テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじゃ！  
……！！」

テオドラ、テオドラねえ……………【知らない】なあ、まあこの少女が誰だろうが関係無いな

「で、テオドラ少女、お前助かりたいか？」

「少女じゃ無いわ!!」

……………お主、何を隠しておる？」

「何か隠してるつもりは無いが、強いて言うならガラスのハートを……………」

「ごまかすな、ただで人を助ける等と言う訳が無い……………そんなぬいぐるみで騙される妾では無いわ

本体は別か？妾を一体どうするつもりじゃ？」

テオドラが僅かに遠ざかりながら身構える、うんうん、少女にこんなに嫌われると泣きそうなんだけど

て言うか、このテオドラって少女だよな？、何でそこまで考えられるんだろうか？

……可能性としては、今現在誘拐されている様に、今までに何回か人のダークな部分をピンポイントに見てきたのかな？

嘆かわしい、嘆かわしいねえ、子供は無条件で幸せにならずにちやダメだよ

しかし、世の中には幸せじゃない子供は溢れる程に居るからなあ

「おい？、聞いておるのか？」

「あ、悪い悪い、考え事してた、それで見返りだったよな簡単だよ」

「…ゴクリっ…」

「俺に感謝してくれ」

「……………なんじゃと？」

「うん、分かって無さそうだな、ここは一つ

説明しよう！！！！

この俺は、元人間だが罪を償う為に仮初めの身体で人を助けなければならぬ

無償でな」

「……？……元……人間じゃと？」

それに罪とはなんじゃ？」

「……いきなり聞くね、俺は罪人なんだよ、人間だった頃に……人を殺してな

それとかなりの人数を……

死んでから、その罪を償う為に、無償で人助けだ、その時に人の身体を没収されてな

喜べー、記念すべき一人目だぜ？

で、俺に助けられるか？」

何とか理解はしたみたいだけど、納得はあったのかな？

抱っこを止めて床に降ろしてもらおう、テオドラが俺を頭の先から足の爪先までジロジロと、ジロジロと見詰めてくる

ジロジロ、ジロジロ、ジロジロ、ジロジロ、ジロジロ

……見詰めすぎじゃないか？

「そんな身体で大丈夫なのかのう？」

「大丈夫だ、問題無い！」

と、言いたいが自分の身体が分かんないからな、何とも言えないんだよ

鏡とか持っていないか？」

「ん……う……む、無いのじゃが

姿見ならソコにあるのじゃ、……元人間だったと思えない姿なのじゃ」

テオドラが指差した方向に歩いて行き、姿見の前に立ち、全身を見渡す

んんー、素晴らしい、この流れる様なフォルム、キリリとなった目、背中には小さな悪魔の翼、黄色く輝く口元

そう、まるでペンギンみたいで……ペンギン……みたい……で……

何度姿見を見ても、結果は変わらない、強いて言うなら、色が青やら赤やら緑やらでは無くて、白色だと言うこと位

爆発するんだ、その弱さは転けた拍子に爆発し、敵に投げられれば爆発し、プリニーに攻撃させる暇が有るなら敵に投げる

「嘘だと言ってよバアニィ……」

「……いや、確かにさ、罪を償うと言う名目だったらコイツだけどさ」

「二人で納得してないで説明するのじゃ!!!」

プリニーとは何なのじゃ!?!」

「あー、プリニーってのは……今の俺の名前だよ……」

と、とにかく、ここから逃げるぞ」

鉄製の扉の前に立ち、ため息一つ

「やるせねえなあ」

この扉は結構錆び付いていて、すぐにでも壊れるだろ、それでも、この先にはおそらく魔法使い達が居るだろう

んだったら、敵の攻撃は一撃たりとも当たる事は許されないな、今なら死ねる

「――投影、開始。」

（トレース・オン）」

両手に双剣を構える、双剣と言うか、ダガーと言うか、その双剣を逆手に持つ

禍々しくねじ曲がった三枚刃の双剣、【虚空ノ双牙】、軽く構えろと、真っ直ぐだった三枚刃が、三又に分かれる

「今の俺ならデータドレイン、もとい、奥義・暗黒吸魂輪唱波もできる気がする」

「奥義・暗黒きゅう……何じゃ？」

「奥義・暗黒吸魂輪唱波だ！

知らないなら良いよ……」

「むう、何か納得が行かないのじゃ……」

しかし、脱出を手伝ってくれるなら助かるのじゃ、お主は妾が逃げるまで

時間稼ぎをして欲しいのじゃ、まずいと思ったら……その時は一緒に逃げるのじゃ」

「ああ、時間を稼ぐのはいいが――」



——三爪炎痕!!!!」

虚空ノ双牙を構え、扉を吹き飛ばす、飛んでった扉に巻き込まれて  
何人か気絶してるけどちょうど良い

アルファベットのAに似た形のサインが付いた入り口から出て見渡す

数は30、手加減の準備は万端

「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

やりますかね、人助け

……**最弱になりました（後書き）**

万能型雑魚キャラ（プリニー）

転けただけで倒れる、投げられると倒れる、爆発して倒れる

どこのスペランカーだと言いたい、デイスガイアのキャラクター

設定は、罪を犯した人の魂がペンギンのぬいぐるみに入っていて、魔界だとお金を集め、天界だと善行を行い、前世の罪を償う

償い終わると、成仏できる

そして、奥義・暗黒吸魂輪唱波！

知ってる人は知ってる、hackでのパロディモード

でも、武器はhack／G.U.の、葬炎のカイトの武器

葬炎じゃないよ葬炎だよ

まあ、こんな感じです、名前がカイトだったのはこれを狙ってたのかって？

作者がカイトって名前にしたかったんだよ、彼はこれから頑張って罪を償います

応援してあげてね、え？

魔王様が人殺しは罪だどうのこうの言う資格が無いって？

まあ、魔王様だから

そんなこんなであとがたり、お終いです

……あれ？何で俺テオドラと居るん？何か親しげ？大戦？逃げれない？もういい  
さて、またしても更新が遅いが

もう良いよね、てか原作が欲しい

「ねえねえ、俺様の出番はー？」

ありません

「な……ん……だと……？」

はあダンボール戦記楽しみだなー、俺の言いたい事はただ一つ

ガチャフォースじゃね？

「ガチャフォース……知ってる奴いるのか？」

居る、居る筈だ……！俺はガチャフォースが好きなんだ……！

ガチャフォースが……！！

好きなんだああああああああああああああああ……！！

「ちょ W W W おま W W W もちつけ W W W」

何で2が無いんだよ おお おお おお おお！！！！

俺がGブラック出す為にどんだけ頑張ったと思ってんだよ！

8週すりゃ出るって聞いてやったら、ただの色違いじゃねえか！！！！

「ど W W W ん W W W マイケル W W W」

ダークナイトとかサファイアナイトとかルビーナイトとか、ラスボス戦で敵ガチで涙目（笑）なドリルロボとか、アンパンマンみたいに顔が外れる、てか飛ばすメガトンロボとか真っ黒いゲルフィールドがウザいタールダイバーとかザ・ワールドなクロノサムライとかビームサムライとかサムライショウグンとか

とにかくがふっ

「お前が W W W 黙るまで W W W 殴るのを W W W 止めない W W W」

ちょ、ま、ごめんごめん、まじすんません

そろそろ本題に戻る雑炊

「了海鮮丼」

前回テオドラと一緒にになったカイトもといプリニー

「一緒になったってエロ的な意味で？」

最弱たるプリニーになったカイトの運命は！？

「おまwww、プリニーなめんなwww

体力を上げて投げればwww、魔王ボールだって倒せるんだぞww  
」

とにかく！

そんな感じです、まえがたりはお終いです

「ゝです、って夕映みたいwww」

だまライオン

……あれ？何で俺テオドラと居るん？何か親しげ？大戦？逃げれない？もういい  
どうしてこうなった？

城の中の一室、て言うかテオドラの私室のベッドの上で俺は非常事態に困ってる

テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ………なんたら、名前が思い出せん、てか長いんだよチクシヨウ

なに？なんなの？何でこんなに名前が長いの？

カッコイイと思ってるのか？、思ってるんだろ？、絶対にテオドラの親は病気だよ

漢字を知ってたら絶対に付けてたよ、そんなに長くて難しい名前を付けたかったらな、ジュゲムでも付けろよ、アレも一応人の名前だからな

「プリニー、プリニー！！プリニー！！！」

「ジュゲムジュゲムゴコウノスリキレカイジャリスイギヨノスイギヨウマツ……」

「プ、プリニー！！？」

「あ？、何でここに居るんだよテオドラ？

お前仕事サボってきた？」

「終わらせて来たのじゃ……!!」

プリニーは何をボーっとしておるのじゃ？」

「いやな……何で俺はお前と居るのかなあ……と……」

プリニーになった俺は、色々と忙しいテオドラを助ける事で罪を償うと言う事をしてる、んだが……その契約をした夜

無くなっていた【テオドラ】に対する記憶が戻った……あんにやろうそれとなくしれっと記憶を奪いやがって

279

「ほら！仕事が終わったから、速く街に行くのじゃ……!!」

「はいはい、分かったからナチュラルに俺を抱っこすんじゃないやねえよ

テオドラお前分かってるか？

どんなに頑張っても、俺が人を殺した殺人鬼には違い無いんだぜ？

城の奴等だって、それとなく警戒してるってのによ？」



「大丈夫なのじゃ！  
それに、きっと理由が有って仕方無くやったに違いないのじゃ！！  
！」

「……盲目的に信じるのは止めろよ？」

何度も言ってるが、正義の反対はまた別の正義だ、俺にとって正義でも、お前にとって正義かどうかは……別だぞ？」

「と、言うことは、その罪だってプリニーの信じた正義なんじゃろ？  
だったら、その正義はきっと正しいのじゃ！」

……盲目的に信じるなって言ってるんだがな

テオドラの抱っこから逃げ出し、部屋を飛び出して街に向かう  
外に向かうまで、何人かの城の人物から監視の視線を感じる、俺の事は言っているから警戒は当然だな

まあ、その監視してるのが嫌で、監視してる奴等と飲み仲間になつたからそこまで嫌じゃ無いが

「しかし……居ないな」

「何を言っておるプリニー

居ないにこした事は無いのじゃ」

「まあ、そりゃ…そうだけどさ」

人が行き来する街で、テオドラと俺は人を探してる、ただの人探しじゃない、困ってる人を探さないといけない

俺の罪は、人を助けないと償えない、故にこうして積極的に人助けをしないと、罪を償えるのが何時になるか

む！

彼処に大量の荷物を持ったお婆さんが！！

「大丈夫ですかー？手伝いますよ？」

「おお、すまないねえ」

「気にしない方がいいですよ、困った時はお互い様だからね」

「それじゃあ、あんたが困った時は助けてやるよ、ほほほ」

お婆さんを家に帰して考える、困ったことねえ、強いて言うなら困った人が居ないのが困った事なんだが

ちゃんとお婆さんを家に帰すと、何となく罪が軽くなった様な気がする

色々人助けをした結果、この感覚は間違いじゃ無いと言う事が分かった

人助けをするごとに、だんだん罪が消えていく気がする、非常に困った事に、魔王様が俺の罪をデカくしたのか知らないが

全く消えない、全然消えない、まあ人助けの種類によって罪の消え具合が違うから、もしかしたら速く消えるかも知れないな

「なあ、プリニー？」

……メセンブリーナ連合との戦場に出て、どんな感じじゃ？」

「む……実際に行ってみなきゃ分からんだろうが、戦場なんて何時の時代も同じだ

人が死んで死んで死にまくる、それだけだよ」

「……………速く、終ればいいのじゃが…」

そうも、行かんだろうな、この世界の未来の記憶ももう殆ど覚えてないが

アラ・ルブラ  
紅き翼が未だに有名じゃない、てか見た事が無い

ベルム・スキスマティックム  
という事は大分裂戦争が未だに終わらないって事だ

コスモ・エンテレケイア  
たしか犯人は完全なる世界だっけか？

ダメだな、殆ど覚えてない

ああ、もしも戦争で将来美人になる筈の奴が死んだらどうしよう

………戯言だな

「む！喧嘩か！？

ちょっと止めてくる！」

「あ、ちょ！妾も行くのじゃ！」

喧嘩を止め、酒場の修理をし、絵師のモデルになり、大道芸の手助けをし、子供の探し物を手伝い、テオドラとお菓子を食べ、

そんなこんなで、今は夜

テオドラが何か大事な用事が有るから庭に来てほしいと言われた

な〜に〜かな〜、もしかして告白か!?

：無いよなあ、プリニーだもん

「バクティオー仮契約だ?」

「バクティオーそう、仮契約なのじゃ」

庭に先に居たテオドラに何をするのか聞いてみたが……バクティオー仮契約?

どういこうこった?

テオドラは別に俺を好きって事は無いだろう、なんせプリニーだ、  
プリニーが恋愛的に好きだったら普通に引く

「プリニーも戦場に出て、何時どうなるか分からん

それだったら、少しでも戦力を増やしたい方がいいのじゃ」

「それで、ミニストラ・マギ魔法使いの従者にねえ

俺は良いけどな、テオドラは良いんだな?」

「無論なのじゃ！」

テオドラが指を鳴らすと、庭に仮契約パクティオーの魔方陣が浮かび上がる

……ん？

「ちょ！おまつ！」

この魔方陣キスの魔方陣じゃねえかよ！」

「いや、だって、ダメ？」

「いやダメって、むしろ何でこの選択をしたのか意味が分からん」

「ほ、ほら……血を使うのは……」

「使うのは？」

「い……痛いのは嫌なんじゃあ——！！！！」

「む！？」

テオドラがキスをすると同時に魔方陣が光り、一枚のカードが出てきた

いや、そんな理由かよ……しかも、クチバシだから、感触が無い  
いやいや、感触を狙ってた訳じゃ無いが

「む、どんな仮契約カードかのう？

ん？」

「どうした？」

「色調が……透明クリアなのじゃ

徳性が最弱最強、方位が世界それに数字がZERO、星辰性が魔王  
世界

称号は【魔王の玩具】

アーティファクトは【魔王の加護】

………バグったのかの？」

視界が滲んで……………良く……………見えない…

「……………とりあえず、複製カードを渡しておくのじゃ」

「……………わあー、透明だあー」

見た目は、十二宮と六芒星を組み合わせた魔方陣の背景に、プリニ  
ーの俺の背後に人だった頃の俺だと思われるシルエット

これって、アイツが作ったヤツか？

あ、真名はプリニーなんだ……

「と、とにかく使ってみるのじゃ……!!」

「来たれ（アデアット）！」

一瞬にして、光が俺を包み込む

……………うわっ、眩し



む、だんだん光りが消えていく、光りが消えて、周りを見渡す

うん、テオドラどこに行った？

「……だ、だれじゃ？」

「？……テオドラ縮んだか？」

「縮んでないわ……！」

「……プリニー……か？」

「プリニーだが、人になってる？」

こ、これは……！？

間違いない、マフラー巻いてるし、視野の端に白髪が見えるし、間違いない、間違いないぞ！

「も、戻った……！」

あ、あはははは……！戻ったあ……！」



「お、俺の体あああああああああああああああ！！！！」

「はあ、はあ……ん、はあ……じ、時間制限が有ったみたいなのじゃ」

「あ、ああ……体ア……」

もう、やだ、ぬか喜びさせといて、これかよ、また？またなのか？

また転けるたんびに爆発するのか？、死なないとは言え痛いんだぞ、動けないんだぞ？

戦場で転けた時の虚しさと言ったら

くっ！！

「ま、まさか……プリニーの本来の体が……むう……しかし……わ、妾も立派なれでいな訳で……」

「……もう、良いよ、体が戻った時に、いくらか力が戻ったから」

「む、そうなのかう？」

「……」

プリニーの姿になって出来ない事が出来た、まず、打撃が出来ない  
……この前、敵を殴ったら……爆発して数時間動けなかった

オマケに、無限の剣製の代名詞が出来ない

他にも、リーチが短いし等々

これ等が解消できる仮契約カード（パクティオーカード）ってすごい便利なんじゃ

数分だけだけど

「おお、探しましたぞプリニー殿」

「あ？、あー、また行ってこいつてか？」

「はい、連合側に少し押されておりまして」

「はあ、やるせねえ」

「ふ、プリニー？」

「ん、何を不安げな顔してんだよ

すぐに帰ってくるって、パクティオーカードだってあるしな」

「ちゃんと帰ってくるんだぞ？」

「当然」

テオドラの頭を撫でた後、やって来たじいさんと共に戦場に向かう  
パクティオーカード、これのお陰で、幾らか気が楽になった、テオ  
ドラに礼を言わないとな

さて、零崎を…プリニーを始めに？

……とにかく行くか、戦場に

……あれ？何で俺テオドラと居るん？何か親しげ？大戦？逃げれない？もういい  
どうも、作者です

「魔王様 W W W で W W W す W W W」

お前は字数が多い、いい加減、Wを止めろ

「Wこれはな、笑のWじゃない、ワールドスリー W W W の W W W だ」

なんでワールドスリーを連呼してんだよ、なんだ？お前ワイリーの仲間か？

「俺様は W W W フォルテが W W W 大好きです W W W」

俺は普通にロックマンが

「俺様アナザー！」

アー、じゃねえよ、全く本編に触れてねえよ

「俺は悪くない！俺は悪くない W W W！」

ヴァン先生が悪いんだWWW」

黙れ、アレは名作だ、異論は認めん

じゃなくて、本編に触れてねえよ

「ダメダナ（・×・）」

……さて、本編だが

プリニーの弱さが分かって頂けたら嬉しい

「プリニーになってやんのWWW」

お前がやったんだよ

「おかしいなWWW、俺様のログには何も無いぜWWW」

そうか

「するーするなよ（・ω・）」

とにかく！次回遂に！

遂にあの「マンマンテロテロ」さんが！

邪魔すんな魔王貴様

「マンマンテロテロWWWマンマンテロテロWWW」

変な所にツボぼってんな……

なんかグダグダだし、あとがたりお終いですザマス！！！！

「そして現れる新しい転成者」

……………え？



さあ怯えろ恐怖しろ、畏怖して逃げ感え!.....え?ちよ、何で逃げないん?

更新が遅くなり、誠に申し訳ない

やっぱりダメだね、ちゃんと日頃書いてないと大変になっちゃう

「知るかWWW、俺様の出番はマダガスカルWWW」

おい、かなり先だよ、出てくんじゃねえよ

「やだポロンWWWなんだよWWW、作者にとって俺様は都合の良いキャラか?WWW」

だよ

「却下だWWW、お前WWW処刑様BGM流しながら殺るぞごらWWW」

止めてくんない?、作者のヒットポイントはゼロよ!?

「ターカージャードルーWWWターカージャードルーWWW」

おま、それは、せめてタトバにしとけ

「タ・ト・バ W W W タトバ W W W タ・ト・バ W W W つか W W W

俺様はなあ、日常十タカジヤドルがハマったんだよ W W W 吹いたわ W W W」

はいはい、ぐだぐだって来たから、そろそろ、まえがたりはお S  
「ひゃっはー W W W お終いザマス W W W」

さあ怯えろ恐怖しろ、畏怖して逃げ惑え！……………え？ちよ、何で逃げないん？

赤い火の粉が舞い、幾千もの魔法が飛び交う

悲鳴が上がり、命を散らしていく

戦場を背中の羽を使い上空から見つめて、軽く柔軟体操をする、この体に柔軟体操が必要かどうかは別として

「さて、行くかな

情報操作が上手く聞いていると良いんだけど

（トレース・オン）

——投影、開始」

両手で黒い炎と雷電を走らせる剣を握りしめて狙いを定める、うん、メセンブリーナ連合の拠点の隣に墜落してる船で良いかな

人も全員出てるし、黒煙吹いてるし、俺から船までの距離に人もいない

こんな絶好調なチャンスを使わないで何時使う

マケンヨシツナ  
魔剣良綱を構え、その剣に溢れんばかりの魔力を込める

「天知る地知るマニア知るってな、一気に決める！」

——大次元断!!!!——

魔剣良綱を降り下ろす

と、魔剣良綱に纏わり付いていた魔力が溢れだし、巨大な刃になって、俺とメセンブリーナ連合の船までの間を斬り潰した

地面に巨大な斬り傷が出来上がり、黒煙を上げていたメセンブリーナ連合の船が真っ二つになって爆発する

よし、ここらでミュージックお願いしますよ

デーンデーンデーン、デーデデンデーデデン、デーンデーンデーン、  
デーデデンデーデデン

どこぞのダークフォースに落ちたダースベーダーさんの曲を鳴らし

ながら、戦場にゆつくりと降りていく

「こー、ひゅー、こー、ひゅー」

「ひっ！、な、なんだよアレ！？」

「ば、バカ！お前知らないのかよ！！？」

狙った獲物は逃がさない、地獄が天国と思える様な残酷な殺し方を好み、マグマの湯に浸かり、ため息で災害を巻き起こす

敵に容赦なく、拷問をした後に笑ってその肉を食べるって噂のペンギンじゃねえか！！？

気に食わなけりゃ老若男女容赦せず、今までに生きて逃げた奴は居ないって噂だ

へ、ヘラス側だって噂は本当だったのか！！？」

「なんだよその化物！！？」

「こひゅー、皆殺しデス」

「化物相手に、やってられるか！！！！」

俺は逃げるぞ、まだ死にたくない！」

「化物が相手何て聞いてねえ！」

恐れ戦き恐怖し畏怖し

まるでアリの如く逃げていく、うん、情報操作は上手くいったみた  
いだな

ここらでもう一押し行っとくか

「ふははは！人がゴミのようだ！！！」

逃げる逃げる、逃げる逃げる、メセンブリーナ連合の連中が逃げて  
逃げて逃げまくる

時折、当てない様に刀剣を飛ばし、爆発を起こし、恐怖心を煽るこ  
とも忘れない

「むー、この情報操作も上手く行ってるんだけど……」

なんともなあ」

「おお、流石プリニー殿！

圧倒的すな！」

「ばっか、そう言う時はな、我が軍は圧倒的じゃないか！！

って言うもんだよ」

「は、はあ」

「まあ、戯言なんだけどな」

情報操作のお陰で、俺は戦場で人を殺さずに勝利できる

でも、ヤッパリ殺してない訳で、この噂も何時か効果を無くすんだ  
よな

何か劇的な変化が欲しい所なんだが

「どうしたもんか……って何事！？」

「――千の雷！！！」

突如としてメセンブリーナ連合の方から魔力が膨れ上がり、滅茶苦茶でかい雷が飛んでくる

あ、ああ、アブネ！！！

っべーわ、マジっべーわ！！

かすりそうだった！！、今かすりそうだった！！！！

「見つけたぜ！

俺と勝負しろ！ヘラスの化物！！」

「……………うそーん」

「ちょ！何を言ってるんですかナギ！！！！

相手を誰だと思ってるんですか！？

月面に斬り傷を作り、太陽の光が気に食わないと言う理由で嵐に変え、奴に斬られたら最後、魂さえも残さず奴に食われるんですよ！！？

オマケに音速で移動する上に、捕まった敵は皮を剥がれ、その皮で



出来た袋の中に閉じ込め、そのまま食らうそうです!!

その名も……

——プリニー!!!」

……何か、流してない噂が有るんだが、アレ?

いや、それよりもだ

何でここに居るんですか?

ナギと愉快的な仲間達  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!  
!?

なぜこんな場所にいるんだよ?

に、人数は?、ナギ・スプリングフィールドに、青山詠春、アルビ  
レオ・イマカ

ゼクトとラカン  
は居ないな、よし

「そんな奴なら、よっぽどほっとけねーだろ!!!」

「ああ、また無茶を!？」

「……………どうしよう、……………とりあえず、お前等誰だ？」

「俺か!？」

俺の名前はナギ・スプリングフィールド!!!

千の呪文の男だ!!!  
サウザンドマスター

「あ、青山 詠春だ」

「アルビレオ・イマと申します、くふふ、あの有名な貴方に会えて嬉しいですよ

プリニーさん」

「俺は嬉しく無いんだがなあ……」

どうするか、コイツ等が相手とか想定してないぞ

いや、まて、そうだ、まてよ？

ナギと愉快的仲間達はこの先有名になる筈だ、例え原作通りじゃなくても、これ程の実力なら確実に有名になる

だとすれば、そのナギ達に勝ったら、別に噂を流さなくても逃げて

くんじゃないか？

やばい、キタコレ

「へえ、俺と戦いたい何て……自殺志願者か？

それとも、……やっぱり自殺志願者か？」

「はっ！お前なんか負けるかよ！

えーっと、来たれ！ 虚空の雷！

薙ぎ払え！ 雷の斧！」

「はっ！

あんちよこ読みながら唱えるたあ余裕だな、例えどんなに強くても  
当たらなければどうと言う事は無い

——ッ！？」

「だと思い、貴方にはちよつと重くなってもらいました」

自分の身体が重くなる、地面にズルズルと引きずり込まれる様な感覚

アルビレオ・イマの重力魔法か！？

くそ厄介な、このまま地面に当たったら、アウトじゃないか!?

俺はプリニーだぞ!?

プリニーに、プリニーに愛を!!!

「っ!!!」

京都神鳴流奥義!!

極大 雷鳴剣!!!」

「ぬ、おのおおおおお!!!?」

詠春の刀から弾ける電気におっかなびっくりしながら魔剣良綱で受け流す

――が

やはりと言うかなんと言うか、無理な体制で刀を受けたせいか、手に持っていた魔剣良綱がどこぞに飛んでった

「ああ、手に入れるのに凄く手間隙がかかったのに……」

「はっ!化物なんて言われても何て事ねえな!!!」

「あ、あれ？」

な、なんだか凄くアツサリ」

「……二人とも、気を抜いてはいけませんよ？」

あら？

気を抜いてくれたら楽何だけど

まあ、今回の目的は、力の差を見せ付けて気絶させる事かな

しかし、不殺か……ころさず……

アレで行くかな、ちょうど日本人の詠春も居るみたいだし

「ふむ、将来に期待して、今は殺さないで置いてやる

良かったなあ、今日の俺は紳士的だ

(トレース・オン)

——投影、開始」

「あ？まだ悪あがきを——それって詠春が持つてるカタナって奴か？」

「ん、な！、？」

それは、私達を舐めてるんですか？

そんな刀で？」

「そんな、どういう事か気になりますね？」

詠春が俺がとりだした刀に反応して、静かに怒る、うん、まあ舐められたと思ったかな？

いやでも、不殺は貫き通したいから、そこら辺は勘弁してほしい

「逆刃刀、峰と刃が逆転した刀で、まともに人を斬るには、峰で斬らねばなりません」

普通に斬っても相手を殺める事が無い刀です」

「逆刃刀・真打、これがこの不殺の刀の名前だ、覚えておくといい」

アルの上空に飛び上がり、そのまま飛びかかる、アルの魔法で重くなった身体が更に速い速度でアルに飛びかかる

「速ッ!？」

「飛天御剣流!  
りゅうついでん  
龍槌閃!!!」

「アル!!!？」

「安心しろ、峰打ち……この場合は峰打ちで合ってるのかな？」

「良くもアルを!!!」

来れ雷精!」

「遅い!!! 飛天御剣流!  
りゅうそうせん  
龍巢閃!!!!」

「ぐっ!？」

「ナギ!？」

なぜ、日本の剣術を!!!？」

「教えてやる義理は無いぞ？」

逆刃刀・真打を鞘に納め、腰に付け、腰を低く構えて詠春に飛び込む

「居合い!？」

「そんな身体で!？」

「飛天御剣流!

双龍閃・雷!!!」

狼狽えている詠春の顎に、鞘で詠春を浮かした後、そのまま、右手に握った逆刃刀・真打で斬り伏せる

「ぐ、あ……う……?」

「し、死んでない?」

「ふうっ、言ったら今日の俺は紳士的だ、次に会う時はもっと強くなってるんだな

ナギ・スプリングフィールド」

「……?」

「失望させるなよ?」

「!?!」



「せめて、あんちよこを読まないで詠唱できる様にするんだな」

地に伏したナギ達を無視してフランスのテオドラの元に帰る

よし、とりあえず、これでナギは更に強くなる筈だ、そうなれば、さらに速く戦争が終わる

……しかし、最後の俺は何だ？

もしかして……疲れてたのかな？

あ、転k――

俺は爆発した、スイーツ（泣）

さあ怯えろ恐怖しろ、畏怖して逃げ惑え！……………えっ？ちよ、何で逃げないん？

さて、飛天三剣流を分からん奴は居るか？

よし、居ないな

「んじゃ魔剣良綱WWW説明言っとけWWW」

魔界戦記デイスガイアより

「魔剣良綱WWW、攻撃範囲はフィールド全部WWW最強装備でWWW入手が面倒WWWやべえ神説明キタコレ、むしろ魔王説明キタコレWWW」

313

おま、俺に説明させないの？

「俺様は言っている、メダチタイノデスWWW」

そうか、話す事も無いし終わるか

次はきつと更新速い筈だ

「それまで俺様の美声を想像してもよろしくってよWWW

タカ W W W ト ラ W W バ ツ タ W W W

タ W ト W バ W タ ト バ W タ W ト W バ W

黙らっしやい

## **v s. 薄刃二…刀？（前書き）**

さて、まえがたりだ

今回の物語は、批判が入るかもしれん

なんせオリキャラだからな、だけど楽しんでくれると嬉しい

しかし、東方の二次製作を見ていて思った

なぜ、オリ主×魔理沙が無いんだ（泣）

原作前転生物だと必ずと言っていい程の確率だ、なんだこの確率はちくしょう、魔理沙が百合キャラな二次製作に絶望した

そんなに百合が好きかぁー！！！！？

……何か「大好きだぁあああああ」って野太い声が……気のせいだな

さてさて、今回現れる刀剣はどんな物か！？

（トレース・オン）

——投影、開始。

## v s. 薄刃二…刀？

ある晴れた日の事、ヘラス帝国から出て、遠くの村に荷物を届けに（人助けの一巡で）行った事が、全ての始まりだった

いや、全てってのは言い過ぎかもしれないけど、それでも、色々が始まったのは、間違いが無い

あれはナギ達と戦って数週間立った日のこと、ヘラス帝国のとある青年の大事な荷物を辺境の村に届けた日の事

カラッカラの、水滴一つ残っていない井戸を眺めてる奴が居た

左右の腰に工事のオッサン方が着けてそうな（よりかは小さいが）腰袋を着けて、酷く詰まらなそうにカラッカラの、ガラガラの井戸を見ていた

「なあ、なにしてんだ？」

「カラカラの井戸見てる」

「……楽しいか？」

「さして……」

最初の開口はそれでお終い

何か変な奴が居るな程度にしか思わなかった、ソイツの顔を見た訳でもない

ただ後ろから声をかけただけ、別に何か深い意味が有った訳じゃなく、ただ、ただ単に気になっただけだった

次の開口は、草木も眠る丑三つ時

村の子供が行方不明になった時だった

☆

深夜、荷物を届けたお礼にと言われ、1日その村の宿で休む事にしたのは良いんだが

休む事にしたその夜、て言うか今現在

この村の子供が拐われたそうだ、うむ、ここで黙っているのは正義の味方の名折れ、てか罪が消えるから万々歳ザマス

「それで？」

その子供とやらは、どこのどいつに拐われたんだ？

具体的に、敵の特徴、人数、装備、魔法を使うなら、魔法の種類、魔法を使う奴の人数を教えてください」

「そ、それが――その、その子供を拐った奴等を見た者が居ません……」

「………何？」

「その――」

「私達も、困ってしまして

拐われた子供が……」

「……子供がどうしたよ？」

「キール・ザックと言うんですが

その子の親がもう既に死んでいて、その子が居ないと気付いたのも、その子の家に夜食を心配した村の者が見に行った時で」

「心配した？」



ソイツは独り暮らしなのか？」

「え、あ、はい、その子が独りで暮らしたいと、常日頃ボーッとしてる奴でして

何時も井戸を見てる奴なんですよ」

「…………ふーん、なんで拐われたと？」

「お、置き手紙が部屋の中に置いてありましたので……」

「…………ふーん」

「ば、場所はそこの森の中の小屋だそうです、その子と山賊はそこに居るそうです

私達の食料を要求してきたのですが、私達も、流石に出せる程の食料は有りません

そこで、プリニー殿に助けていただこうと」

コイツ等……いや、まあもしかしたら、もしかしたらと言う可能性で、俺の考えは間違ってるかもな

思う所はあるが、それが行かない理由にはならない故に、山賊が居ると言われる場所に向かう

「……多分、罨だよなあ」

罨、と言っても、村人に対しての罨じゃない、むしろ俺に対してだろうな

最初から、俺を狙っての誘拐か

そもそも、見てる人が居ないのがおかしい、あの井戸をずっと見てると言ってたが、その井戸がある場所が村の中心近くだぞ？

たとえば家に帰った所で拐われたとしても、その家が村の中に有るんだから結局はバレるだろ

その上、家に置き手紙だあ？

今時、山賊がそんな素敵な事するかよ、大抵【今時】は人質すら取らない

奪って奪って奪うだけ、俺を事前に警戒するのは可笑しい、なんてったって、俺がここに来たのはイレギュラーなんだから

「だとするなら、村人が山賊とグルで、俺を殺そうとしてる

金目当てか？」

まあ良いや、適当にボコしてやれば良いだろ……お？

森の中から、正確には、俺が迎おうとしている方向から、沢山の山賊がやってくる

おかしい

罠にしちや余りにもお粗末だ、さらに言えば、俺を殺しに来た、と言うよりは

「何かから逃げてる？

まあ良いや、適当に武器でもぶち壊しゃ良いだろ

（トレース・オン）

———投影、開始」

取り出したのは、一本の刀

鞘に納められたその刀、左手に握り、右手で引き抜く

キラリ、と月明かりに照らされて光る刀を振り上げ

――降り下ろす

先程よりも、8 m程の先で、刀を鞘に納める

チキンッ

逃げようとしていた山賊達が、次々フラリフラリとよろめいた後、地面に倒れ伏す、誰一人として死んでいない

死んではないが、しばらく起きる事はない筈だ

「拙者に――ときめいてもらうでござる」

「か――カッコいい……」

最後に一言そう残して、意識を絶った

きつと、この刀の、刀身を見る事は出来なかっただろうな

何から逃げていたのか、出来れば聞きたかったんだが

まあ、行ってみりゃ分かるか

速歩きで歩いて行く、やはりと言うかヤッパリと言うか、この体だ  
とかなり不便だ

しばらく進むと、昔、山賊だったであろうモノに出くわすようになる

傷口は鋭利な刃物か？

どれもこれも、一撃の下、的確に急所を切り裂いてる、一切の無駄  
が無い、なんだってんだ？

凄腕の何でも屋でも来たのか？

さらに歩を進めると、死体の土俵に座り込む子供が居た

――ああ

――ああ

こりゃ不味い、非常に宜しくない、異常に芳しくない

村人さん達よお、とんでもない依頼を出してくれやがったな

「こんばんわ」

「こんばんわ」

「ちよつと質問良いかな」

「良いけど」

「この山賊達を殺ったのは君で合ってるかな？」

キールくん」

村でカラカラの井戸を見ていた子供、後ろ腰の左右に、工具等を入れる腰袋を2つ付けてる子供

山賊に拐われた筈のキールくん

なんでったって血すら付いてないかなあ、もう

「そうですけど……

あなたは？」

「俺は君を助けに来ただけど

おっと、ッ！」

一歩後ろに下がる、当然の如く目の前を光が通貨する

問答無用で殺しに来るか

「……なんで？」

「キールくん、むしろその言葉は、俺が使うべきだと思うんだが  
そこら辺おかしいかな？」

「あ、ごめんなさい、僕そんなつもりじゃ」

「とか言いながら二撃目ェ！」

ビュン、風切り音を残して地面が切れる

夜だから見にくいだが、キールくんは剣も刀も持ってなさそうだ

と言うことは、暗器の類いか？

「いや、ちが、そんなつもりじゃ——」

「——もしかして、人を殺したのは初めて？」

「え？」

「だから、日常的に日々の一環として、常日頃殺人行為に勤しんでないのかい？」

「あ、当たり前じゃないですか、僕は兵士じゃ無いんですよ？」

「当たり前前に殺ってる？」

「当たり前前に殺ってません！」

そんな事を言いながら、僅かにキールくんから距離を取る



土の切れ具合から見て、ここはキールくんの攻撃範囲外だと思われる

「ぼ、僕は、別に殺したい訳じゃ」

「ん？」

ソイツはちよいと違くないか？」

「え？」

「君は、キールくん君はね、今病気とも呪いとも言える様なモノが憑いてる

多分、一生付いてきて離れないモノだろう、世界が違うから分からないけど、多分ヤッパリ一生物だ」

「び、病気？」

病気ってなんの」

「キールくんはこれから、一生をかけて、【人を殺しながら】生きていけないといけない

人を殺さないといけないし、人を殺さないダメ、息をするように殺すと言うよりは

人を殺さないと息苦しい」

「な、なん——」

「キールくんは、人を殺しながら生きるんだ

これからずっと、嫌でも」

「い、いや」

「キールくん、君は、生まれた時から

――殺人鬼だ」

「う、嘘だアアアアアアアアアア！」

チキチキ、スー、ビュン、さっきよりかなり強めに風が吹く、また一歩後ろに下がる

射程が伸びた？

「嘘だ！、い、意味が分かんないよ！

あんたの言ってる事は無茶苦茶だ！」

「無茶苦茶か？」

「僕は人殺しなんかしたくない！

これからだってしない！」

「んじゃ今現在俺を襲ってるのは何だ？

プリニーだから人殺しじゃないってのは、俺の島じゃノーカンだから」

「し、知らない！

僕じゃない！」

参ったな、こんなに混乱してたらろくに話も出来ないぞ

いや、まて諦めるな、

俺は平和主義者だ、こんな序盤で諦めたら平和主義者の名折れだ

「キールくん、俺の家族に

ならないか？」

「――ッ！？うわあああああああああああ！！！！」

なんか更に暴れだした、なんでなん？

仕方ない、気絶させて、起きたら詳しく説明するか

——気絶ですむと良いけど

鞘から、刀を引き抜き、攻撃を避ける

間違っても、この刀で受ける何て事はしない

「はあ、はあ、——何、それ？」

「俺の自慢の日本刀だが？」

「日本刀？」

——刀身が無いのに？」

「ああ、それはそう見えるだけだ

この日本刀はな、【薄さ】と【軽さ】

さらに言えば【脆弱さ】に主眼が置かれている日本刀なんだよ

ほら、良く見てみ？」

「——あ、」

キラ、キラ、と月明かりを反射して、刀身が僅かに見える

余りにも薄く、余りにも軽く、余りにも脆弱

故に、美しい

故に、剣筋をずらさずに完全な軌跡で斬りつけなければ、空気抵抗で折れてしまう

故に、敵を斬っても、敵が身体の筋をずらしても折れてしまう

「完成形変体刀十二本が一本  
四本目

薄刀・針ハクトウ・ハリ

「――そんな、刀を使うの？」

「おいおい、舐めるなよ小僧

この身体じゃちと不便だが、どうまかり間違っても

負けは無い

拙者に、ときめいてもらおうでござる」

やって来た攻撃を避け、足に力を込める

「爆縮地！」

「うそっ!？」

一瞬、足裏が爆発するような衝撃を得て、即座にキールくんの懷に飛び込む

キールくんは目で捉えきれない速度でも、薄刀・針は、折れずに美しい刀身を魅せている

「う、わあああ！」

「む、悪足掻きだな

あ、?、嘘だろ!？」

軽く気絶させて終わりだと、思っていたら

無理な体制からの一太刀、キールくんの手には月明かりに輝く光、

おそらく刀が合った

薄刀・針の鞘で受け止め、そのまま気絶させようとしたが

受け止めた刃が、バラバラに砕け、雨の様に俺に降り注ぐ

全力で、全開で、後ろに下がる

折れた？

鞘で防いだけで？

二刀流？

簡単に折れるのに振るえる？

刀剣なのに射程が変わる？

いや、そもそも、キールくんの武器は何だ？

そうだ、俺はまだキールくんの武器を知らないんだった、相手の武器も分からない状態で突っ込む何て愚策

目を凝らして見てみる、じつくりと

意識を集中させて見る、ゆっくりと

月明かりに照らされて、ついさっき折れた刀剣の類いだと思われる物に手を添える

チキチキ、スー

「カッター!!?」

「ええ、はい、カッターです

詳しく説明するなら、折れ刃式の魔法世界産の刃が消えないカッターです」

「は、はは、そう言えば、日常的に殺人を行ってないんだったね

そんな人物が、剣やら刀やら持つてる訳ないか」

「何ですかその日常的に剣やら刀やら持つてる人って？

完全なる不審者ですよ」

「鏡見てみ、不審者が居っから」

キールくんは刃が生えたカッターを構える、左手と右手、はあ、果てしなく厄介だ！



そもそも、相性が悪い、俺はプリニーだぞ、一撃食らったらアウト  
何だよそれを、カッターだ？

防いだら折れた刃が飛んでくるし、防げない、折れてもまた生えて  
くる、射程が刀剣類に相応しくなく伸びる

カッターを相手にした戦闘方なんぞ知らんぞ

「ッ、またか！

爆縮地！」

「アレ、また消えた

——なんなんですかソレ？」

「爆縮地か？

そうだな、説明してやろう

よく競技のクラウチングスタートに使う足に付ける奴が有るだろ？」

「良く使うかは知りませんが」

「アレを擬似的に作り出すんだよ

他にも細かい動作は有れども、ヤッパリそれが一番だな、足で地面を僅かに砕き

擬似的にあの装置を地面に作り出す

分かったか？」

「めんどくさそう」

「そうかい、爆縮地！」

速遅剣」

「え？」

キラと、また薄刀・針を振る

キールくんの二本のカッターの刃が折れる、俺とキールくんの距離は、4 m

「何ですかそれ」

「今度は自分で考えてくれたまへ

——速遅剣！」

またチキチキと伸ばしたカッターの折れ刃を斬り壊す

タネは簡単である、所謂飛ぶ斬撃

ただし、飛距離、刃渡り、速度共に自由自在

薄刀・針の特性【薄さ】を使った剣術

本来飛ぶ斬撃は、刀を高速で振った後にできる真空、その真空に入り込む空気、それらを使って斬る訳だが

その動作、普通よりも【薄い】薄刀・針でやるには幾らか辛い

速度が普通の刀の時の速度だと、空気が真空にならない

ソレよりも速く、折れない様に正確に

そして、飛距離、刃渡り、速度を変える為に、速さを自在に変える

ソレで出来上がる飛ぶ斬撃が、速遅剣

元から薄い刀で出来る飛ぶ斬撃も、また薄い飛ぶ斬撃、薄さってのは斬る事に置いて、かなりの重要性を持つてる

そんな、薄い見えない斬撃は正しく驚異だ

「悪いが適当に出血多量で気絶してもらおう」

「う、ぐ」

「飛び道具もない、魔法を使う触媒もない、いい加減諦めたら」

「う、わあああああ！！！！」

「んなっ！？」

またしても、驚き

キールくんがカッターを振るったと同時に、カッターの折れ刃が高速回転しながら飛んでくる

し、しかも

沢山、大量、一杯、目一杯

「な、おおおおお！？  
爆縮地！」

「に、逃げるなでください！」

「意味の分からん事言うな！」

くっ！

一揆刀錢！」

一揆刀錢  
イツキトウセン

独自の居合い抜きであり、周り全てを囲まれていようと、一刀の下  
斬り伏せる……んだが

「む！」

「ま、だ、ま、だあああ……！」

斬ったカッターの折れ刃が、物の見事に折れる、折れる、折れる

何度も言うが、相性が悪い

これは、ヤバい、長期戦になっても折れ刃が切れる事がない

……だったら、わざわざ長期戦にする必要もない、すぐに、ケリを付ける！

「爆縮地！！！」

「だから、鞘で受けても！」

攻撃は、通る！！！！」

左右から迫るカッターを、鞘で叩き折る、いくつも折れ刃が迫るが、今回は、避けない

「来たれ（アデアット）オオオオオオオオオ！！！」

「い、？」

「薄刀・針 限定奥義！」

薄刀開眼！！！！」

頬やら二の腕やらが切れるのを無視して、薄刀・針を頭上に上げる

薄刀・針 限定奥義

——薄刀開眼

薄刀・針の特徴、【薄さ】と【軽さ】を使った斬撃

速遅剣で使った様に、【薄さ】を使って、従来の飛ぶ斬撃よりも、より斬れ味を誇る見えない斬撃

そして、薄刀・針の【軽さ】を使った荒業

飛ぶ斬撃の中に、飛ぶ斬撃を作り出す

本来、一度降り下ろした刀をもう一度振る時は、斬り返すか、もう一度構えて斬るしかない

だが、この羽よりも【軽く】、空気よりも【軽い】薄刀・針は、もう一つの斬り方がある

降り下ろした刀を、まったく同じ軌跡で戻し、また降り下ろす

こんな荒業は、重みのある日本刀で再現不可能、【軽さ】に主眼を置いたからこそ出来る技

斬撃の中に斬撃が有る矛盾を孕んだ技

薄刀・針 限定奥義

薄刀開眼

斬撃の中に斬撃を作り、更にその中に斬撃を作り出す事十七度  
どこまでも伸びる斬撃が、キールくんの体を斜めに斬り裂いた

「拙者に、ときめいてもらうでござる」

「か——かっこいい……」

どきりと倒れたキールくん、まずは、真っ二つになった彼をくっ付ける

余りにも綺麗な斬り方をした結果、大根やらがくっ付けるとくっ付いた話は余りにも有名

そして、それよりも綺麗に斬れた人の体は、くっ付ける事が余裕綽々である

うん、起きたら謝っとかないとなあ



しかし、カカシ

まさか、まさかまさか、この世界に

「零崎<sup>ぜろさき</sup>たりえる人が居るなんてね、まさかだね、まさにまさかだ

生まれついで殺人鬼、殺す事に恐怖も喜びも悲しみも歓喜も絶望も達成感も無く、人を殺さずには居られない

でもま、違う世界だからかな？

幾らか呪いは弱いし、これなら、傭兵で通用するんじゃないかな？

……いや、現実逃避は止めよう

しっかりと現実を受け止めよう……

——はあ、やり過ぎちゃったよなあ」

体がくっ付いたキールくんをおんぶして、地面に落ちてるカッターを腰袋に入れる

村に向かって歩きながら、後ろをチラと見て、またため息を吐く

「やるせねえ」

まるで、子供が公園で作った砂山を、真っ二つにした様な、そんな風に二つになった大きな山を見て、山まで続く地面に出来た斬り口を見て

またまた、ため息を吐く

「しかし、これから家族になってくれるかね？」

そしたら俺は父親か？

それとも、兄かな？」

……この際名付け親に成るとするならば、名前は、どんな物が良いだろう？

まあ、簡単な、シンプルイズベストで良いかな

これからよろしくね

零崎切識くん

## **v s. 薄刃二…刀？（後書き）**

さてさて、またしてもでした

変態じみた日本刀

完成形変体刀十二本

実は、刀語原作、アニメを見た人にも、見てない人にも言う事が

今回出てきた技の説明

作者が勝手に考えた物です、はい公式ではありません千円

原作、アニメ見た人なら分かるでしょうが、まあ見てない人は……  
ネタバレになっちゃうから省略して

どうしても、技の説明が作者オリジナルになったか知りたい人は、  
一言でも書いて下さい

うぼああああ、不安だ

原作読んだ人とか、アニメ見た人から「俺の予想と違う、早急に変  
える事を推奨する」とか

「お前の文才クソすぎてワロタWWWなに言いたいかわカンネWWW」言われたらどうしよう

まあ、そんなときゃ開き直ろう

そして、反響がまたしても有るかも知れない、オリキャラ

いや、実はね、零崎設定生かされて無いなあと

その、はい、ごめんなさい

零崎分かない人も居るよね？

零崎ってのはまあ、殺人鬼です、生まれた時から殺人鬼です、後、家族愛が強いです、説明終了

今回は西尾維新大爆発な物語でした

これからも気楽に見てってね

拙者にときめいてもらうでござる（キリッ

…プリニーに…愛を…(前書き)

さて、まえがたりザマス

「ひゃっはー！久方ぶりの魔王様だZE」

本当に久方ぶりだね、何で出てこなかったんだ？

「色々あるんだよ、俺様の美声を待っていた諸君！

聞き狂うが良い……！」

出番無さすぎて頭ヤラレタか？

…プリニーに……愛を…

「ねえ、兄さん」

「……兄さんに……なっ たんだな…」

「流石に、人ならまだしも、ビックリ動物なプリニーに【父さん】  
とは言いたくないです」

「……………」

ビックリ動物なプリニーに父さんは嫌でも、兄さんなら良いのか

……落とし所が分からん

「それにしても、僕は田舎生まれだから、このヘラス帝国の大きさ  
にはビックリですよ

あ、ビックリって言い過ぎですか？」

「……うるせえ、  
【切織】きりおり……………」

「おや？」

おやおやおやあ？

【き・り・し・き】、じゃ無かったんですか？

ねえ、兄さん？

無いですよねえ？、流石に無いですよねえ？

どのくらい無いかと問われれば」

「……どの、……位だ、……」

「サーカスのピエロが空中浮遊しながら観客を一人一人食ってく位

無いですよねえ？」

「……………」

コツ、コツ、コツ

歩く度に視界が上下に揺れる、あれから数日、やっとこさヘラス帝  
国に帰ってこれた

俺を見かけた人が挨拶しようと近寄るが、途中で立ち止まり、苦笑  
いしながら手を振るだけに止めて去っていく

「……な訳で……聞いてます？」

「……………」



「はあ、確かに、僕……なんて自分の事を言ってますが  
いやあ、寂しい物がありますね？」

寂しいですよ、寂しくて悲しくて死んじやいそうです」

「……悪……かった」

「本当に悪いと思ってます？」

あり得ませんよ、家族の性別を間違えるなんて

こんな絶世の美女に対して男……だなんて」

絶世の……はっ

「落とします？」

「……すまん」

「兄さんみたいな、性別があるのかすら分からない摩訶不思議動物  
なら、人の性別くらいセンサーで見分けてください」

「……ねえよ……」

「あ、お城が見えてきましたよ？」

「そろそろ……下ろしてくれ」

「はいはい」

切織の村から、今の今まで俺を背負ってきた切織には感謝の雨だな、むしろ嵐だな

……決してアレは違う、アレは記憶の奥底に封印しよう

あんな情けないのは俺の人生に置いて

「まさか、プリニーが転け」

「黙ろうか」

「……家族に殺気を向けないでくださいよ

てか、情けなく無いですか？

Gにビックリしてk」

「頼む、それ以上先を言わないでくれ」

「……はあ、分かりました」

切織から降りて体を軽く動かす

右腕、問題なし

左腕、問題なし

……その他問題なし

「こいつ……動くぞ……」

「……動いてくれなきゃ困ります」

「……お前の説明もしなきゃならんし、速く入ろうか

ただいまあ」

数日ぶりに門を開けて中に入ると、此方に走ってくる人影

うん、少しは落ち着いてくれ

「プリニーーーーー!!!!!!」



いやいや、まずは言わなくてはならない

「俺は……爆発した、…スイーツ」

「そこに直れプリニー！」

「う、ごけません」

「動くのじゃ！」

「壁にめり込んで出れません」

「正座にどげなのじゃー！！！」

その後、切織に土下座の意味を教えた後、テオドラに何故そこまで怒ってるのか聞いた

壁に突き刺さったまま

いや、最後には抜いてくれたけど

「本当に申し訳なさしあ」

「だいたい何なのじゃ、山が、山が斬れるとは何事なのじゃ！

その上、妹じゃと？

ああ、もう、頭が割れそうなのじゃあ…」

「常識では考えられない出来事、それが俺

あ、それはとあるVIPの<sup>マッハタイプ</sup>高速入力だった」

「ごめん、僕良く分かんないんだけど」

「分からないなら分からないままで良いんじゃないか？」

「そう言う物ですか」

「そう言う物だろ」

「妾を無視するでないわあああああ！！！！」

「いや、無視してる訳じゃ、ただ話題に上がらないだけで」

「ええい！

プリニーはぐてつとするでないのじゃ！」

「いや、だって俺爆発したし

もう力とか出ねえよ」

「何か……黒目が無い」

「う、良く見たら……何か死んだ魚の目みたいなのじゃ……」

傷付くからそう言う事を言わないで欲しい

いやーしかし、切織の説明もしたし、もういい加減疲れたし、眠って良いかな？

なんだかとても眠いんだ……

「最近……こんなのばかりだ

おかしい、おかしいぞ、俺は平和主義者で正義の味方で戦闘嫌いだった筈だが」

「……え？」

「誰がなのじゃ？」

「お前等なあ……」

しかし、もう眠りたいからさ、寝室まで運んでくれないか？」

「えー、なのじゃ」

「えー、じゃねえよ

テオドラがやったんだろうが」

「仕方がないのじゃ

えっと、切織はどうするのじゃ？

たしか、戦災孤児でプリニーが妹にしたとしか聞いておらぬのじゃが」

「あれ、僕って戦災孤児だったんだ」

「いや、何故自分の待遇を忘れておるのじゃ

はあ、プリニーの隣の部屋を用意するから、そこで休むのじゃ」

「うん、分かった」

「……あの、床が冷たいから、早めにしてくれると助かったり」

「む、そうじゃな、早速行くとするのじゃ」

テオドラに運ばれて寝室まで切織と一緒に行く

効果音にするならガリガリ、ゴツ、ガツ、だ



「いや、だ、じゃねえよ、何で引きずってるのさ？」

「むうー、小さい事を」

「この嘴に付いた傷は小さい事に分類かよ」

「あ、僕洗剤持ってるんで磨きます」

「う？」

何で洗剤なんて持っても、止める！

匂い！匂いがあああい！

鼻！鼻に入った！！！！」

腰袋から布と洗剤を取り出し、嘴をキュキュツと拭き始める切織

その心遣いは間違いなくありがた迷惑だ

「あ、動かないで下さい兄さん」

「動けねえよ！あたたあああ！？」

お前わざとやってんじゃn」

「わ、妾もやるのじゃ！」

「どうぞ」

「おま、待てテオドラ止m

目エエ！目エエエエエ！！？」

この、何だ、恨みでもあるのか俺に？

もはやイジメだぞ、動けない俺にやりたい放題やりやがって

お、起きたら覚えてろよテオドラに切織ィ

…プリニーに……愛を…（後書き）

プリニーはとても爆発しやすいです

闇雲に投げないでください、あなたの一時の反応が一匹のプリニーを助けます

「シャーツハツハツハツハアー！」

プリニー落とし！！！」

止めろおおおおお！

てな訳であとがたりです

「最初の茶番は何だWWW」

特に意味は無い

しかし、原作が無いと辛いな、この先は

「きWあWいW」

あ、さいですか

出番が無いくせに

「オ・ノオーレエエエエエエ！！！」

貴様なんぞがあ、この俺様に

勝てるわあつつきやねええだろおおおおおおお！！！！」

絶好調だな

さて、書くこともないし、これにてあとがたり  
お終いなり」

「あれ、コロ助？」

**諸君！戦争だ！、殲滅戦で全滅戦で千滅戦だ、奴等のその全てを滅ぼすまで私達**

作者は基本的に虫が大嫌いです

もし部屋に蜘蛛が現れたなら、新しい家に住みたいと思うくらい虫が嫌いです

てか、むしろ虫が居ない病院に住みたい

あ、本編の話してなかった、本編では、ついにプリニーにフラグが立ちます

これでプリニーもフラグ建築士の称号をゲット

皆さんフラグにwktkしながら見てくれると嬉しかったり

諸君！戦争だ！、殲滅戦で全滅戦で千滅戦だ、奴等のその全てを滅ぼすまで私達

今日は雨

曇天から雨粒が零れ落ち、城の屋根を叩いて音楽を奏でる、その音は、まるで失恋の衝動を掻き立てるグランギニョル、ああ、アナタの思いがハルマゲドン、食べるカレーはセンサーション

まあ、そんな素敵神経は持ち合わせて無い俺は鬱陶しいとしか思わないけど

「し、仕事が終わったのじゃー」

「乙カレー」

「だ、誰のせいだと……」

「きつと宇宙人の仕業だろう、なんて酷い事しやがる」

「プリニーの【家族達】の事じゃ……!!」

家族達……零崎一族の事か

ふ、と思い浮かぶのは、一番最初に家族になった零崎切織、彼女は

今ではそこそこ有名になった

いや、彼女……と言うか零崎一族が有名になった

皆もうちよつと自重……無理だね

「うー、何時までもプリニーになってないで、早く人になるのじゃ」

「はいはいよ、幼い、姫様の仰せの通りに」

「おい！今！今あ！？」

「H A H A H A、ナンノコトヤラ私ニポンゴ分カリマセーン」

「プリニー貴様あ！」

「来たれ（アデアット）」

「なあっ、持ち上げるなこら！」

ははは、かわいいかわいい、かわいいなあテオドラかわいいよテオドラ

でもどうせ彼女にはならないんだよね

うん、知ってる、だって何時も何時も何時もそうなんだから、何時だってそうなんだから

思えば、沢山ある長い人生だが……未だに女性との付き合いが無い、ってのは……

もしかして、俺って思ってるより不細工？

あれ、どうしよう、もしかしてヤバイ？

長い人生一人もそういった経験ないの？

まてまてまて、大丈夫だ、多分誰か一人くらいの俺が成し遂げてる筈

…………アレエ？

「どうしたのじゃプリニー？」

「え、いや何でもないよ」



……………アレエ？

あ、そうすか、所詮わたしやー脇役ですか

は、良いよ良いよ別に知らねーし、全然平気だし

……テオドラかわいいなあ、でもラカンとくつつくんだよなあ

……………

「……………んぞ」

「へ？何か言って」

「絶対に認めんぞジャツツクラカアアアアアアアアアアアアアアアアア  
……………」

殺してヤルウ、コロオオオオオス……………！！！！

お父さんは絶対に認めませんよおおおおおおお……………！！！！」

「え？何、ちょ！

ま、回るんじゃないのじゃ！」

「許さああああああん!!!!」

どうしても欲しいと言うならこの俺を倒してみせろ！」

「い、意味がわからんのじゃ!？」

「ちきしょー!! アイツがああ!

アイツが憎い!!!」

モブキャラだって脇役だって生きてんだぞ!!？」

それをオ、それをオ!!」

「……な、何が何だか分からぬが、泣くんじゃ無いのじゃ…」

「テオドラ優しいなあ、こんなモブで脇で日陰な俺にも……」

よし元気デター、なにして遊ぶ?

それとも人助け行くか？」

「速ッ!？」

立ち直るのが速いのじゃ!？」

「ま、気にしててもしゃーないし

さあ、何しようk」

「うわあああああああああ……」

「……テオドラ」

「うむ、速く行くのじゃ！」

一瞬でテオドラの部屋を飛び出し、悲鳴が響いた場所に走る

その現場に着くと、もう既に決着はついていた

傷付いた壁や天井、そして床がそこで起こった激闘を思い起こさせる

現場の中心には、荒い息を吐く切織と、モザイクがかかる様な死体だった

「コイツ……まさか場内に忍び込んで居るなんて!？」

「一応、仕留めたけど……」

「……コイツ一匹な訳が無いよな

テオドラ、雨の中悪いが、兵士達を集めてくれ」

「うむ！」

駆け出すテオドラの背中を見て拳を握る

俺が背負って走った方が速いな、何かノリでテオドラに行かせたけど、別に俺が行っても良かったんだよね

とにかく、俺も兵士達の所に行かないとな

ズタズタな廊下を切織と歩き、すれ違ったメイドに城の中の人を避難させる様に言う

「……なるほど、見かけたのは一匹だけ

しかもちゃんとその一匹も殺したか」

「見かけたのは一匹だけなんだから、別にここまでしなくても……」

「甘い、甘甘バカップルより甘い！

奴等を一匹見たら！

後三十匹は居ると思え！……！」

これからの殲滅戦について話していると、中庭に集合した兵士達の下にたどり着いた

偉そうにするテオドラの頭を撫で、濡れない様に城の中に入れて、俺兵士達の前に立つ

「諸君……既にテオドラから事情は聞いているだろう

この城に、あの人類の敵、悪の化身、奴が現れた

この事により、城内の人の避難は完了している、諸君が暴れるのに相応しい場所となった

諸君——これは模擬戦では無い

諸君——これは人類の覚悟を見せる戦いだ

諸君——これは城内、ひいてはヘラス帝国に諸君の力を見せる時だ

諸君——

諸君——

諸君——

——これは戦争だ

一切の手加減不用

合切の哀れみ無用

一切合切の余力は否用

今この時に全力を注げ！

奴等を許すな！

戦う理由など幾らでも作ろう！

——諸君！

これは戦争だ、一片のDNAも残さず、チリすら残さず消し去れ！

俺達は奴等の敵だ！

奴等は存在が悪だ！

ソコに居る事が悪なんだ！

奴等の存在その物を認めはしない！

絶対だ——

——絶対に許しはしないぞ！！！

剣を取れ！

魔法を唱えろ！！

逃さず許さず消し去るぞ！！！！

奴等、イニシャルじー頭文字G

——ゴキブリ共を！！！！」

沸き上がる歓声と共に、兵士達が城内に入り込む、ヘラス帝国が誇る英士達が一部屋一部屋、丹念に探りを入れ、確実に塵すら残さん手はずだ

もはや奴等に逃げ場等無い、ただただ駆逐されるのみ

ふ、ふはは

フハハハハハハハハア！！！！

完璧だ、完璧な作戦だ

今まで何度思った事か、もしも奴等を完全に消し去る事が出来たらどんなに素晴らしいか

ああ、まさかこんな世紀の、歴史に残る事件に参加できるなんて

「すみませんプリニー殿」

「ん、どうした、今なら何でも言うこと聞いちゃうよ俺、あははは  
……！」

「ああ、それは良かった

実は今グレートブリッジが押されぎみでして

そこに行ってください」

「フハハハハハハア……！」

「……え？」

「では、ご無運を」

「……ええ、マジで？」



「実は、紅き翼とか言う奴等が出てきまして……」

アラルブラ  
「紅き翼………」

ジャック………ラカアアアアアアアアアアン!!!!」

「ひっ!？」

今、今再び俺の魂に火が点いた

俺は平和主義者だが、今回ばかりは平和的には逝かないなあハア  
アア……

待っているよジャックラカン、後紅き翼の皆、……脇役だって、モ  
ブキャラだって、日陰者だって

——主役に成れる事を教えてやる!

「プリニー、そんな装備で大丈夫なのじゃ?」

「大丈夫だ、問題無い」

……何かフラグ建てた気が

気のせいだな、てか認めたく無い

**諸君！戦争だ！、殲滅戦で全滅戦で千滅戦だ、奴等のその全てを滅ぼすまで私達**

立った、フラグが立った！？

口笛はなぜ、遠くまで聞こえるの

おしゝえてーお爺さんゝ

「ググレカス」

お爺さんは厳しい人でした

さて、なにやら一言にデビルメイクライの刀剣プリーズな声が……

何なのこの人、俺と全く同じ時に同じ事考える何て、もしかしてどこかで見てるんじゃないの？

まあそんな戯言は置いて置き

黒貴様 アアアアアアアア！！！！

いや、言いたかったただけなんだ、畜生、何だよあのお馬鹿設定、なんでソウルの矢で彼処まで体力が減るんだよ

おまけに炎の嵐とか使ってくんじゃねえよ、俺が壁際だと知っての使用か？

以上デモンズでの叫びです、ソウルに試されてでも見て心を落ち着かせよう……

## ヘラス帝国兵士の戦場（前書き）

今回は、何となく作者の気分により、プリニー視点ではなく、一介の兵士視点でいかせていただきます

さあ皆さん、これより、紅き翼が有名になる切っ掛け

グレート・ブリッジ奪還作戦です

準備はよろしいか？

——ならば、皆さんご一緒に！

ガンダムファイトオ！  
レディイイ！ゴオオオオ！

## ヘラス帝国兵士の戦場

sideーヘラス帝国兵士

私は、ヘラス帝国の兵士だ、私の放つ魔法に敵軍は恐怖し、逃げ惑っている

見栄張りしました、逃げ惑っているのは私です

メセンブリーナ連合が、グレート・ブリッジを奪還しに來たのを阻止するのが本来の役目なんだが

トンでもなあ奴が現れた、奴等は常々ヘラス帝国で噂になっている

あの、爆発ペンギン、プリニーさんとマトモに殺りあえる奴等

紅き翼  
アラルブラ

戦場は奴等の独壇場だった

青山 詠春

旧世界出身の、サムライ

左手に木製の鞘を持ち、右手にニホントウを構えている  
彼の放った剣技が、何人もの仲間達を切り伏せる

アルビレオ・イマ

恐ろしい重力魔法で、仲間達が地面に崩れ落ちていくのが見える

優男だが、フードに隠れたその笑みは……イケメンだから許される  
のだろうか…

ゼクト

老人口調の子供で、多彩な魔法でこちらを翻弄してくる

コイツのせいで指揮が滅茶苦茶だ

ジャック・ラカン

筋肉バカ

剣を投げってくる……プリニーさんのパクリか？

そして、なにより

ナギ・スプリングフィールド

まだ子供だが、コイツのせいで何人の仲間が殺られたか

ふざけてる本当、何で一人で戦略級殲滅魔法をバカスカ撃てるんだ！  
近付く暇もなく吹っ飛ぶわ！

……きっと、私も何も出来ずに死ぬんだろうーなー

すまない、帰ったら結婚する筈だったのに

兵士なんて身の上でプロポーズした俺を許してくれ

「愛してる、フェン」

荒れ狂う稲妻、後少しで味方が飲み込まれると言う所で、あまりにも、頼もし過ぎる声が聞こえた

「なあ兄弟、今……女の名前を言ったか？

ソード！ワイドソード！！

ロングソード！！！！



ドリームソードオオオ!!!」

荒れ狂う稲妻が、青い巨剣に切り裂かれて霧散する

空から舞い降りる姿は、まさしくヘラス帝国の守護神

「戦場でなァ、恋人や女房の名前を呼ぶ時と言うのはなァ

瀕死の兵隊が甘ったれて言うセリフなんだよおお!!!」

「ぐふっ!...?」

い、石を投げられた

しかも何か怒っていらっしやる

「おい、バカはどこだ」

「え?」



「おほ？

おおおおおおお！？？」

プリニーさんの周りに現れた無数の刀剣が筋肉b、ジャック・ラカンの方に向かって飛んでいく

恐ろしい、としか言いようが無い

私は刀剣の目利きなど無いが、あの刀剣達から溢れだす魔力だけで充分分かる、アレ等はかなりの名作だと

一瞬であんなに沢山の、そろこそ国宝級も混ざっているであろう刀剣を射出する

ヘラス帝国の公式な発表では、なんでも一世代限りの御技だとか

でも、確かプリニーさんは人を殺したく無いんじゃないや……

「おー、やってくれるなこのヌイグルミ」

「ひい！？」

ば、化物！！？」

あ、有り得ない

頭に刀突き刺したまま喋ってるこの人……

「ふふふ……俺の怒りが怒髪天だぜええええええええええ！！！」

ジャック・ラカン！！！！

お父さんは絶対に認めませんよ。おおおおお！！！！

認めてほしけりや俺を倒してみせろお!!!

アークエネミー・ユキアネサ！

(トレース・オン)

———  
「投影、開始」

「へっ、何だかわかんねえが、要するに喧嘩しようぜって事だろ？」

いいぜ、オレもやりたかったんだ！」

「おい、ラカン！」

俺にもやらせろよ！」

「はっ、ご指名はオレだ！」

「ユニバァアアアアス……!!」

す、凄い

プリニーさんが出したのは、日本刀、しかしただの日本刀じゃない鞘に納められた日本刀が引き抜かれると共に、何ら詠唱をしていなかったのに氷柱が出来上がる

ジャック・ラカンも負けてない、どこから取り出したのか、幾つもの剣を投げつけ氷柱を砕く

フロストバイト  
「零刀!」

「適当に右パンチ!」

氷柱が、剣が、ジャック・ラカンとプリニーさんの間飛び交う

「凍牙氷刃!」

「ラカンインパクト!」

どちらも、どちらとも凄まじい戦いだが、どんな物でも終わりは来るらしい

ジャック・ラカンが凍った地面に足を滑らせた時、その戦いは終わった

「おほ」

「サヨナラだ」

——煉獄氷夜」

一瞬、にして、世界が、氷る

ジャック・ラカンを中心に、巨大な氷柱がそびえ立つ

今まで争っていた戦場が氷の舞台に変わる

いやいやいや、おかしいでしょ、詠唱無しで何でこんな殲滅級魔法みたいなのができるのさ

「ふっ、六英雄、裏の七人目、仲間から、ざパクリヤローと言われた名は伊達じゃないぜ

また、つまらぬ者を凍らせて——え？」

「…ッ……ぬ、ううううん!!!」

あ、コイツ等可笑しいんだ、普通の範疇で考えちゃいけないんだ  
て言うか、六英雄って何でしょうかプリニーさん

「……いや、お前何普通に壊してんだよ

お前今凍り付けだったよな？」

「気合いでなんとかなった

あ、足のまだ凍ってるじゃねーか」

「…………甘い!!!!」

甘すぎる！

高々氷を砕いただけで俺を倒そうなど

無理の一言おおお！」

下半身が未だに凍ってるジャック・ラカンを前に、急にプリニーさんが刀を消して、何か変なポーズを取り始める

……………何をしてるんだ？

「俺のこの手が真ッ赤に燃える！

勝利を掴めと轟き叫ぶ！

爆熱！！！！

——ゴオオオオオオオツツツド！

フィンガアアアア！！！！」

一度両手を腰の高さに合わせた後、戦場の全員が注目する程の魔力を右手に込め、その右手でジャック・ラカンをかつさう

その魔力の余りの量で、氷が蒸発して霧になる



「何だありゃ、アイツ剣だけじゃ無かったのかよ」

「ヒイイイトツ!!!」

「――エンド!!!!」

右手で掴んだまま、腕力だけで、あの巨漢ジャック・ラカンを頭上に持ち上げると

プリニーさんの右手の魔力が更に高まり、大爆発を引き起こす

霧が舞い上がり、両陣営に緊張の糸が張りつめる、舞い上がった霧が薄れていき、最初に見えたのは

倒れ伏し、傷付き、指一本動かせないジャック・ラカン

「ラカン!?!」

「ぐ、う――ああ、ダメだこりゃ

まるで動けねえ……」



許さんぞジャック・ラカン！！！！」

「……………なあ、ラカン、お前アレに負けたんだぜ？」

「……………言うな」

「……………あの、体から煙を出してますが」

「バカじゃの」

「……………なんと言うか、哀れにすら…」

「ジャック・ラカン！！！！」

覚えていろ！！

何時か必ず、後悔する時がくるからな！」

「いや、そんな勢いで誤魔化そうとしても……………」

「チキショー！！！！」

人間になっていればこんな事にはあ！！」

……………えっと、色々言いたい事とか思う事はあるけど

まずは



## ヘラス帝国兵士の戦場（後書き）

はいはい、毎度お馴染み刀剣紹介ザマス

アークエネミー・ユキアネサ

ブレイブルーやれば分かるさ

え？説明ちゃんとしやがれ？

持ち主がこんな感じ

にいさああああん！にいさん、にいさん、にいさん、にいさあああ  
あん！にいさあああううううわあああああああああああ  
あああん！あああああ……ああ……あっ……！あああああ！  
にいさんにいさんにいさんにいさあん！にいさあああん  
んんううわあああ！ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハ  
ースーハー！スーハースーハー！いい匂いだなあ……くんくんあ  
はあっ！にいさん、ラグナザブラッドエッジにいさんの白髪癖っ毛  
をクンカクンカしたいお！クンカクンカ！ああああ！間違えた！モ  
フモフしたいお！モフモフ！モフモフ！髪髪モフモフ！カリカリモ  
フモフ：きゅんきゅんきゅい！「バカが！」って言ってるにいさん  
かわいかったよう！！あああああ……ああ……あっああああ！  
ふああああんっ！僕お手製抱き枕出来て良かったねにいさん！あ  
あああああ！かわいい！かっこいい！にいさん！かわいい！あっ  
あああああ！賞金上がって嬉し……いやああああ！にやああああ  
ああ！老若男子にゃんこおとおお！！ぎゃああああああ！ぐ  
あああああ！！抱き枕なんて現実じゃない！あ……僕お手製ポスタ



よし、正義の味方にまかせろ！（前書き）

うそ、だろ？

そんな……確かに……確かに面白いなとは思ってたけど

予想外どころの話じゃない、なにやってるんですか西尾維新さん  
なんで、なんでJUMPにいますか、何ですか「めだかボックス」  
（原作・西尾維新）って

ちょっと予想外すぎて作者は二度見しました

よし、正義の味方にまかせろ！

1982年5月7日

ヘラス帝国・帝都

俺、プリニーは基本的に忙しい

大抵テオドラの暇潰しをしたり、街中で些細な困り事でも手助けをする

テオドラの暇潰しをする時、何故かアーティファクトを呼び出して  
いると言われる

そのアーティファクトも、どうやら魔力で時間が変わるらしく、魔力回復の小道具や他人に魔力を移してもらい、かなりの時間出来るようになった

……まあ、その分アーティファクトが切れた後、またアーティファクトを発動出来る時間が遅くなるんだが

戦場に行く寸前まで発動して、肝心の戦場じゃ発動出来ないんだよな  
プリニーのままでも無双出来るから良いけどさ



今の俺と拮抗出来るのは紅き翼位かな  
アラルブラ

うん、戯言だな（閑話休題てきな意味で）

「すみません」

「ん？」

何だ？……？」

「いえ、突然すみませんが、最近この帝都に来たばかりで、街の人にプリニーさんに色々聞いとけば大丈夫と聞いたんですが」

「を、こんなご時世に大変だったな、この街のお買い得情報から、隠れた名酒が売ってる酒屋まで何でもござれだ

来たばっかって事はまだ行っていない店も多いだろう？」

「え、あ…ありがとうございます…？？」

「ん？」

何をそこまで驚いてんだか

……なあ、俺ってどっかで会った事あったっけ？」

「え、いや、無いですよ？」

むう、無い……か

でもなー、なーんかどっかで見たような？

……すれ違っただけかもな、この広い世界そんな事もあるか

「んじゃ自己紹介と行こうか

俺はプリニー

正義の味方で、爆弾ペンギンとかヘラスの守護神とか、なにあの目玉かわいい決り出したい、等々の二つ名を頂いてる罪人だ」

「ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ

ガトウで良い、こちらこそよろしく」

「んー、やっぱり何処かで……？」

……終わった話はもう良いか、まずは酒屋だ酒屋」

「……真っ昼間からかい？」

「真っ昼間だからこそだよ、それにほら」

「？」

「だって、ガトウって何か酒屋の隅に居そうな感じが」

「なんだいそれ……？」

俺の希望的予想で、予感的予想だ

まあ、そんな事も言ってもしゃーないよな

「ほらガトウ、早く行くぞ

お店は待ってくれないからな、ちんたらしてたら逃げてくぞ？」

「そんな店聞いた事ないよ」

「聞いた事が無いだけで決めつけるのは良くないぜ？

少なくとも、俺は死んで決めつけが吹っ飛んだしな、いやはや、人は死んだら無になるかと………」

酒屋への道を進みながら議題変更、プリニー故の人との身長差を恨

みながら雑談続行、そして歩行決行

「……………そう言えば、死んだら皆プリニーになるのか？」

「いや、違うんじゃないか？」

少なくとも俺は他のプリニーを見たことがない」

「君が特別だったのかい？」

「ああ、まあ、そうなんだろうなあ

どんなに特別でも異常でも摩訶不思議でも、死んじゃった今、意味は無いんだけどな」

ちょっと暗くなりながらも、努めてその事柄には触れない様にする

——俺はどうなるのか

プリニーとして、罪を償い終わったなら

——俺はどうなるのか

「すまない、たばこは良いかな？」

「——ん、良いぜ

俺なんか許可とらなくたって良かったのによ

それよか、着いたぜ酒屋」

ガトウと一緒に酒屋に入り軽く挨拶をして、酒を飲まずに外に出る普通に考えて、真っ昼間から酒を飲む訳がない、と言うよりこの後も色々なお店を紹介したりするのに、ここで酔っぱらったら話にならない

「結局……飲まないんだね……」

「そりゃな、ほら行くぞ？」

「次はなんだい？」

「そうだな、適当に行こうぜ」

その後、言葉通り文字通り有言実行の精神で、ガトウに色々な店を紹介した

いやいやいんや、如何わしいお店は紹介した覚えはないが、無いがしかし、よろしくないお店は紹介した

しかし、如何わしいお店と、よろしくないお店は、こう二つ並べると、何故なにゆえどうしてこうして如何わしいお店の方がえっちく聞こえるのか？

彼の金色の闇だか掃除屋で体内のナノマシンを操り、髪や手を剣に変える最初の人類の内の女性の名を冠する彼女は言ったなたしか

えっちいのはだめです

お前の存在がえっちいわ、と言った俺に対して金髪が襲いかかって来たのを思い出す、……いやこんな戯言は銅でも鉋でもいいや

俺が問題にすべき事柄は、なぜにこの酒屋の隅で酒を飲んでそんなおっさんが、こうもモテるのか？、と言うことに他ならない、他に有って堪るか、これだけでもう充分十全お腹いっぱいなのに

「てな事が俺の脳内で繰り広げられた結果として

ガトウ、お前ちょっと自重しろ」

「いや、僕も手加減してるんだけどね？」

「そういう奴は大抵もっと手加減出来るんだよ

俺の出番を潰してそんなに楽しいか？

それとも愉快かコノヤロー」

周りを見渡せば、ダンスを勝手に踊って躍って舞った奴等、見ていてそれなりに愉快だったが

しかし、本来そいつ等を踊らせるのは俺の筈なんだが、まあ、結果はほぼ同じだから良いか

「大丈夫ですか、お嬢さん？」

「は、はは、はい！」

「おい、何時までお姫様だっこしてるんだ？」

お姫様だっこ、お姫様だっこか……、お姫様だっこ何て代物が有るんだったら王子様だっこが有っても何ら可笑しくないな

いやいやいやさ、まてまて待て待てマテマテイカ、この言い方だと

お姫様だっこは、お姫様がだっこして

王子様だっこは、王子様がだっこするように聞こえるぞ？

女性が、しかもお姫様が一人を持ち上げられるのか？」

「君は何を言ってるんだい？」

「戯言に決まってるだろ」

しかし、本当に久し振りに、何の意味も無い、とりとめの無い、無意味な事を喋ったな

しかし、やはり良いなこれ、何が良いつて、そりゃ文字s

「何を考えてるんだい？」

「アーサー王伝説と桃鉄の関連性について

あー、嘘だからそんな目で見んなよ

それにしたって悪いな、俺の人助け手伝わせてよ」

「いえ、僕としても困ってる人、ましてや美女は見過ごせないんでね」

「紳士ですからってか？」

ま、自称正義の味方としても見逃せないがな」



「……自称、正義の味方ですか？」

「そう、正義の味方、正義の味方、ジャスティスヒーローでございますよ

正義の味方ってたって、所詮は戦場で一人殺していないチキンだ  
けどな」

「はあ………え？」

「ん？」

「いや、あ、あれ？」

「一人も殺してないって」

「……あ、………忘れティロ・フィナーレ☆」

「いやいやいや！」

「どういう事ですか!？」

「やべ、ミスった

あーもう、これ後でテオドラに怒られるか？」

「いや、否、否定する！」

バレなければ問題ない！

「言うからさ、この事黙っといてくんね？」

「一応機密だからさー」

「……機密をそんな簡単に話して良いのかい？」

「大丈夫大丈夫、もしここにメセンブリーナのスパイが居ようとも、どうにか出来るしな」

「………凄い自信だね？」

「自信じゃなくて確信だな」

それからガトウに俺が何なのかとか、様々な身振り手振りを加えて説明した

いささか、わずかに、身振り手振りが必要無かったような気もするが

ま、世の中、必要な事だけなんて、つまらないしね、むしろそんな世は死ね

「そんな、事情が……」

「ま、事情が無い奴何か居ねえだろ

あ、やっぱ居るの方向で」

「……………いや、なんと言うか……」

「言葉が出ないなら、出ないままで良いんじゃないか？

しかし、さっき店の爺から新しい情報を買ったんだが……

あいつ等何が有ったんだ？

情報に関しちやあの爺は信用出来るが、あいつ等はこんな事する様な奴等じゃない気がするんだがなあ

……………ハメられたか？」

「一体今度は何の話だい？」

「今回は紅き翼アラルブラの話だ」

「……………紅き翼の？」

何かあったんですか？」

「ん、ああ、あったと言えばあったな

「紅き翼がメセンブリーナ連合裏切ったってよ」

「へー、メセンブリーナ連合を裏切ったんですか紅き翼」

「裏切っちゃったらしいぜ？」

「へえ——えええ……ええええええええええええ！？」

え、驚きすぎじゃない？

そんな幼馴染みが実はニューハーフだった時並みに驚かなくても

「確かにシヨックだったんだろうな、なんせ幼馴染みがニューハーフだ

これを驚愕と言わず何と言う？」

「知りません!？」

何の話だ！？

そんな事より、紅き翼がメセンブリーナ連合を裏切ったって」

「本当らしいなあ」

酷く慌てている所悪いんだが、ヘラス帝国に居る俺等が、メセンブリーナ連合に居る紅き翼の情報にそこまで慌てなくても

確かに、ここで紅き翼が居なくなったら、今後の戦争が楽だが

ガトウの驚きは何か違う気がするんだよな

「…………プリニーくん、お店の紹介ありがとうね」

「くん、か、俺のが年上だと思うが、ま、良いさ

お礼を言われる要素が零だぞ、俺は俺の為に動いただけだ、そこに正義なんかないぜ？

むしろ俺の罪を消す為に利用された事を怒ったらどうだ？」

「それでも、だよ

とにかく、ありがとうね、僕はここらで失礼して

また何時か会おう」

「んだな、生きてりゃ何時かは会えるんじゃないか？

ま、元気にな？」

「そちらも元気に…」

そのままガトウとは別れ、城に帰ってテオドラに、帰ってくるのが遅いと言われ、城の中で豪華な料理を食べ、メイドさんの手伝いをし、テオドラに風呂に誘われ、断り、昔を僅かに想い、俺の布団に入ってきたテオドラを無視して

そして、今日を思い返して

ふと気付く

「あれ？」

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグって、紅き翼アラルブラの……？」

後の祭りだった

よし、正義の味方にまかせろ！（後書き）

さて、今回はとくに達筆する事のない……………すいません

更新速度が遅くて謝罪してみたり

まあた多分誤字脱字が有るんだろうな、と半ば諦めたり

まあ、ゆるーくがんばります

…………めだかボックスには驚いた…

## 重大なお知らせ

すいません

最初に謝っておきます

色々ありますが、しばらく、この物語を書く筆を置かせて頂きます

色々ありますが、しばらくは作者のかつてな事情により、人の死が  
どうのこうのから、離れたいから、すいませんが、筆を置かせて頂  
きます

楽しみにしていた読者様、本当にすいません、何時の日かもう一度  
筆を取るかもしれません

その時は、よろしくお願いいたします

以下文字稼ぎです

ああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああああ



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0055t/>

---

魔法先生ネギま！～俺の平和は何処へ？

2011年6月13日11時08分発行